

福井県埋蔵文化財調査報告 第112集

高柳・下安田遺跡

— 国営九頭竜川下流土地改良事業に伴う調査 —

2010

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

福井県埋蔵文化財調査報告 第112集

高柳・下安田遺跡

— 国営九頭竜川下流土地改良事業に伴う調査 —

2010

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター



① 東地区建物群全景（南西より）手前から SI002・003、SI001、SB006



② 西地区建物群全景（南東より）手前から SI052～055、SI051



① 銅鐸片 表面 (a面)



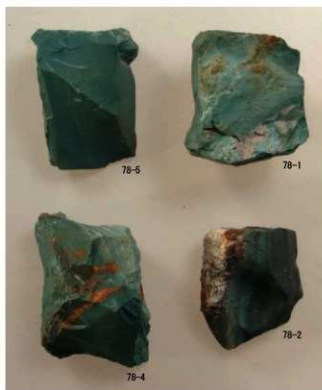
③ 勾玉、ガラス玉



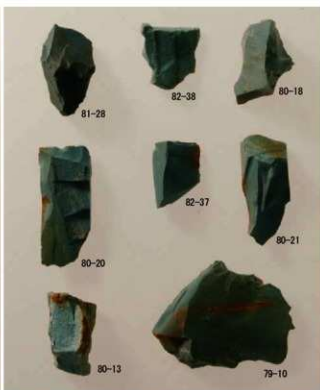
② 銅鐸片 裏面 (b面)



④ 管玉製品



⑤ 荒割1類



⑥ 荒割2~4類、形割1類

序 文

本書は、農林水産省北陸農政局の九頭竜川下流農業水利事業に伴い、平成16・18年度に実施した、福井県坂井市丸岡町に所在する高柳・下安田遺跡の発掘調査の成果を取りまとめたものです。

全国でも有数の穀倉地帯をささえる坂井平野の基幹水路である十郷用水の、パイプライン化の工事に伴う発掘調査です。今回の調査では、福井県で稲作が開始されたと考えられている弥生時代の集落が確認され、農耕以外にも管玉生産を盛んに行っていたことや、その技術的な変化も確認することができました。

また今回の調査では弥生時代の祭祀の象徴である銅鐸が破片となって出土しました。これは銅鐸祭祀の終焉を示すものとして、今後の弥生時代の研究に欠くことのできない成果であると考えられます。

この度の発掘の調査成果が、今後各方面で広く活用され、文化財に対する理解をより一層深めるとともに、郷土の歴史を見直す機会となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行に至るまでに、関係機関をはじめ多くの皆様から多大なご協力とご支援を賜りましたことに、深くお礼申し上げます。

平成22年3月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所 長 吉 岡 泰 英

例 言

- 1 本書は福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが国営九頭竜川下流土地改良事業に伴い、平成16・18年度に実施した高柳・下安田遺跡（福井県坂井市丸岡町高柳、下安田所在）の発掘調査報告書である。
- 2 高柳・下安田遺跡の調査は農林水産省北陸農政局九頭竜川下流農業水利事業所の依頼を受けて福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施し、主任赤澤徳明、主査御嶽正典、同僚御嶽貞義、嘱託職員入江剛弘、同僚藤優子が担当した。
- 3 発掘調査期間は、平成16年8月18日から平成17年3月25日と平成18年11月17日から同年12月25日の2回に実施した。出土遺物の整理作業は、平成17年4月1日から平成22年3月15日まで、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにて実施した。
- 4 本書の編集は赤澤があたり、主査御嶽、田中勝之が分担して執筆した。なお、執筆の分担は以下の通りである。また第8章附編は、各分析を依頼した機関から成果報告としていただいた文章の一部に赤澤が加筆し、編集した。
第1・2・3章、第4章第1・2・3・4節、第5章、第6章第2節 赤澤、第4章第5節 御嶽、第6章第1節 田中
- 5 高柳・下安田遺跡に関するこれまでの成果のうち、本書と齟齬がある場合は、本書をもって訂正したものと了解されたい。
- 6 出土遺物のうち玉作関連資料の図化は田中の指示のもと、大成エンジニアリングと株式会社アルカに委託して作成し、そのほかについては赤澤の指示のもとに当センター作業員が作成した。写真撮影は赤澤が行った。
- 7 遺構の写真撮影は赤澤が行い、上空からの写真は、航空測量時に株式会社平和ITCが撮影したものである。遺構図などは株式会社ITCと株式会社平成調査設計が作成したものを、株式会社サンワコンに委託して編集したものを使用した。
- 8 遺物実測図と写真図版などの遺物番号は符合する。写真の縮尺は不同である。
- 9 土器の観察表の法量の項目で（ ）の数値は残量を示す。胎土の項目では次のように分類した。①微砂粒（径1mm以下）を少量含む。②微砂粒を多く含む。③砂粒（径1～2mm）を含む。④大き目の砂粒を含む。
- 10 本書における水平レベルの表示は、海拔高（m）を示し、方位は座標北を用いて図中に明記した。またX・Y座標地は国土方眼座標系第Ⅵ系に基づく。
- 11 本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面・写真は、一括して福井県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管している。
- 12 遺構・遺物の時期などに関しては、研究が進んでいる石川県の成果を参考にして赤澤が判断した。その型式名についてはその示す意味を明確にすべきではあるが、現在その内容は大きく変更しつつあるため暫定的なものである。その責任はすべて赤澤が負うものである。
- 13 発掘調査に関しては、次の機関のご協力を得た。
農林水産省北陸農政局九頭竜川下流農業水利事業所、坂井市教育委員会
- 14 発掘調査ならびに本書作成にあたり、次の方々からご指導・ご教示を頂いた（五十音順・敬称略）。
堤徹也（坂井市教育委員会） 難波洋三（奈良国立文化財研究所） 馬場伸一郎（下呂市教育委員会）
廣瀬時智（大阪府立近つ飛鳥資料館） 吉田広（愛媛大学法文学部）
- 15 発掘調査には、地元の方々の参加・ご協力を得た。また、遺物整理作業は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの整理作業員があたった。

目 次

	頁
第1章 調査の経過	1
第2章 遺跡の地理的・歴史的環境	
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の概要	
第1節 調査地とその周辺の概要	4
第2節 調査区の概要	5
第4章 東地区の遺構と遺物	
第1節 東地区の概要	9
第2節 東地区（16年度調査）で検出された遺構	10
第3節 東地区（16年度調査）の遺物	18
第4節 銅鐸片	37
第5節 東地区（18年度調査）の遺構と遺物	39
第5章 西地区の遺構と遺物	
第1節 西地区の概要	44
第2節 西地区で検出された遺構	45
第3節 西地区の遺物	56
第6章 玉作関連の遺物と石製品	
第1節 玉作関連の遺物	86
第2節 石製品（砥石）	105
第7章 まとめ	
第1節 出土した遺物について	107
第2節 遺跡の変遷と土器様相の変化	108
第3節 遺跡の立地と時期—まとめに代えて—	110
第8章 附編 自然化学分析	
第1節 自然科学分析の概要	112
第2節 高柳・下安田遺跡銅鐸片の分析について	112
第3節 高柳・下安田遺跡銅鐸片の鉛同位体比	113
第4節 放射性炭素年代測定	116

巻首図版

- 巻首図版 遺構 ①東地区建物群全景(手前からSI002・003、SI001、SB006、南西より)
 ②西地区建物群全景(手前からSI052～055、SI051、南東より)
- 遺物 ①②銅鐸片 表裏(a・b)面 ③勾玉、ガラス玉 ④管玉製品 ⑤荒削1類
 ⑥荒削2～4類、形削1類

写真図版目次

- | | | |
|------|---|--|
| 図版第1 | 遺構 ①東地区SI001・SB005全景(西より)
②東地区SD022・SB006・SI001全景(東より) | ③西地区SD062土器出土状況(南より)
④西地区SD062土器出土状況(北より) |
| 図版第2 | 遺構 ①東地区SI001全景(北より)
②東地区SI001床面出土状況(南より)
③東地区銅鐸片A・B出土状況(東より)
④東地区SI001北側床面出土状況(南東より)
⑤東地区SI002・SI003上層(炭化面上)
遺物出土状況(南東より) | 図版第10 遺構 ①西地区SI051全景(西より)
②西地区SK065土器出土状況(東より)
③西地区SI051土器出土状況(北より)
④西地区SI051北西コーナー土器出土状況(南より)
⑤西地区SI051床面器台出土状況(南より) |
| 図版第3 | 遺構 ①東地区SI002・SI003全景(北西より)
②東地区SI002床面出土状況(南より)
③東地区SI002床面出土状況(南より)
④東地区SI003床面出土状況(北より)
⑤東地区SI002高坏出土状況(北より) | 図版第11 遺構 ①西地区SI052～SI055全景(南西より)
②西地区SI052床面土器出土状況(南東より)
③西地区SI052西壁土器出土状況(東より)
④西地区SI052-SP5土器出土状況(北より)
⑤西地区SI052土器出土状況(北東より) |
| 図版第4 | 遺構 ①東地区SB004全景(南より)
②東地区SB005全景(南西より) | 図版第12 遺構 ①西地区SI052土器出土状況(南より)
②西地区SI052土器出土状況(北東より)
③西地区SI052土器出土状況(南より)
④西地区SI052土器出土状況(東より)
⑤西地区SI055土器出土状況(東より)
⑥西地区SI055土器出土状況(南より) |
| 図版第5 | 遺構 ①東地区SI001・SB006周辺全景(真上より)
②東地区SB006全景(北より) | 図版第13 遺構 ①西地区SD066土器出土状況(北東より)
②西地区SD066土器出土状況(北東より)
③西地区SD066土器出土状況(北東より)
④西地区SD066土器出土状況(北より)
⑤西地区SD066土器出土状況(北東より) |
| 図版第6 | 遺構 ①東地区SK019土器出土状況(北西より)
②東地区SK021土器出土状況(東より)
③東地区SD022出土状況(北より)
④東地区SK036土器出土状況(南西より)
⑤東地区礫層土器出土状況(南より)
⑥東地区SK020土器出土状況(南東より) | 図版第14 遺構 ①西地区SK060土器出土状況(西より)
②西地区SE069土器出土状況(北より)
③西地区SX058土器出土状況(東より)
④西地区SE068土器出土状況(北西より)
⑤西地区SX070土器出土状況その1(南より)
⑥西地区SX070土器出土状況その2(南より) |
| 図版第7 | 遺構 ①東地区SK007(右)・008(左)全景(東より)
②東地区SK008土層断面(西より)
③東地区SD009土器出土状況(南西より)
④東地区SK007土器出土状況(南より) | 図版第15 遺構 ①西地区SI056全景(南より)
②西地区SK073土器出土状況(西より) |
| 図版第8 | 遺構 ①東地区18年度調査区全景(南より)
②東地区18年度調査区北側(北より)
③東地区18年度調査区SB040(東より) | |
| 図版第9 | 遺構 ①西地区豊穴住居群近景SI051～SI055(西より)
②西地区SI057近景(西より) | |

	③西地区SK077土器出土状況(西より)	図版第31	遺物西地区出土土器
	④西地区SP075土器出土状況(北東より)	図版第32	遺物西地区出土土器
	⑤西地区旧河道土器出土状況(北東より)	図版第33	遺物西地区出土土器
	⑥西地区旧河道土器出土状況(北より)	図版第34	遺物西地区出土土器
図版第16	遺物東地区出土土器	図版第35	遺物西地区出土土器
図版第17	遺物東地区出土土器	図版第36	遺物西地区出土土器
図版第18	遺物東地区出土土器	図版第37	遺物西地区出土土器
図版第19	遺物東地区出土土器	図版第38	遺物西地区出土土器
図版第20	遺物東地区出土土器	図版第39	遺物西地区出土土器
図版第21	遺物東地区出土土器	図版第40	遺物西地区出土土器
図版第22	遺物東地区出土土器	図版第41	遺物玉作関係遺物
図版第23	遺物東地区出土土器	図版第42	遺物玉作関係遺物
図版第24	遺物東地区出土土器	図版第43	遺物玉作関係遺物
図版第25	遺物西地区出土土器	図版第44	遺物玉作関係遺物
図版第26	遺物西地区出土土器	図版第45	遺物玉作関係遺物
図版第27	遺物西地区出土土器	図版第46	遺物玉作関係遺物
図版第28	遺物西地区出土土器	図版第47	遺物玉作関係遺物
図版第29	遺物西地区出土土器	図版第48	遺物発泡土器・砥石・玉作微細写真
図版第30	遺物西地区出土土器		

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置と周辺の地形概要図	2	第19図	弥生土器実測図	21
第2図	遺跡周辺の関連する遺跡分布図	3	第20図	弥生土器実測図	22
第3図	調査地区周辺の概要図	4	第21図	弥生土器実測図	23
第4図	中近世井戸遺構図	5	第22図	弥生土器実測図	24
第5図	弥生時代後期以外の土器実測図	6	第23図	弥生土器実測図	25
第6図	調査区全体図	7~8	第24図	弥生土器実測図	26
第7図	東地区主要遺構図	9	第25図	弥生土器実測図	27
第8図	SI001実測図	10	第26図	弥生土器実測図	28
第9図	SI001内SK1土器出土状況図	11	第27図	弥生土器実測図	29
第10図	SI001-003・SB005土層断面図	11	第28図	弥生土器実測図	30
第11図	SI002・SI003実測図	12	第29図	弥生土器実測図	31
第12図	SI002内SK1、SI003内SK11実測図 SI002土器出土状況図	13	第30図	弥生土器実測図	32
第13図	SB005-004-006実測図	14	第31図	銅鐸実測図	38
第14図	SK007・SD009土器出土状況図	15	第32図	銅鐸微細写真	38
第15図	SK008実測図	15	第33図	平成18年度調査区遺構図	39
第16図	SK019土器出土状況図	16	第34図	SB040実測図	40
第17図	弥生土器実測図	19	第35図	SD048土層断面図	41
第18図	弥生土器実測図	20	第36図	弥生土器実測図	42
			第37図	西地区主要遺構図	44

第38図	西地区南北・東西トレンチ図	45	第69図	弥生土器実測図	71
第39図	SI051実測図	46	第70図	弥生土器実測図	72
第40図	SI051土層断面図	46	第71図	弥生土器実測図	73
第41図	SI051内SP1・13実測図	46	第72図	弥生土器実測図	74
第42図	SI052～SI055実測図	48	第73図	弥生土器実測図	75
第43図	SI052～SI055土層断面図	49	第74図	弥生土器実測図	76
第44図	SI052内SP6・7、SI053内SP5・6・7実測図	49	第75図	弥生土器実測図	77
第45図	SI052内SP5土器出土状況図	50	第76図	弥生土器実測図	78
第46図	SI055床面土器出土状況図	50	第77図	弥生土器実測図	79
第47図	SI056実測図	51	第78図	玉作関係遺物実測図1	87
第48図	SX058土器出土状況図	51	第79図	玉作関係遺物実測図2	88
第49図	SK060土器出土状況図・土層断面図	52	第80図	玉作関係遺物実測図3	89
第50図	SD062実測図	52	第81図	玉作関係遺物実測図4	90
第51図	SD066土器出土状況図	53	第82図	玉作関係遺物実測図5	91
第52図	SK067・SK078実測図	53	第83図	玉作関係遺物実測図6	92
第53図	SE069土器出土状況図・土層断面図	54	第84図	玉作関係遺物実測図7	94
第54図	SK077土器出土状況図	55	第85図	玉作関係遺物実測図8	95
第55図	弥生土器実測図	57	第86図	玉作関係遺物実測図9	96
第56図	弥生土器実測図	58	第87図	玉作関係遺物実測図10	98
第57図	弥生土器実測図	59	第88図	玉作関係遺物実測図11	99
第58図	弥生土器実測図	60	第89図	石製品実測図1	105
第59図	弥生土器実測図	61	第90図	石製品実測図2	106
第60図	弥生土器実測図	62	第91図	高柳・下安田遺跡から出土した銅鐸片の 鉛同位体比図	114
第61図	弥生土器実測図	63	第92図	高柳・下安田遺跡から出土した銅鐸片の 鉛同位体比図(拡大)	114
第62図	弥生土器実測図	64	第93図	高柳・下安田遺跡から出土した銅鐸片の 鉛同位体比図	115
第63図	弥生土器実測図	65	第94図	高柳・下安田遺跡から出土した銅鐸片の 鉛同位体比図(拡大)	115
第64図	弥生土器実測図	66	第95図	暦年較校正結果図	118
第65図	弥生土器実測図	67			
第66図	弥生土器実測図	68			
第67図	弥生土器実測図	69			
第68図	弥生土器実測図	70			

表 目 次

第1表	弥生土器観察表(平成16年度東地区)	33	第8表	高柳・下安田遺跡から出土した銅鐸片の 鉛同位体比一覧表	113
第2表	弥生土器観察表(平成18年度東地区)	43	第9表	資料の鉛同位体比の平均値一覧表	113
第3表	弥生土器観察表(西地区)	80	第10表	測定試料及び処理内容一覧表	116
第4表	玉作関係遺物組成表	101	第11表	放射性炭素年代測定及び暦年較正の 結果一覧表	117
第5表	玉作関係遺物観察表	101			
第6表	石製品観察表	106			
第7表	高柳・下安田遺跡主要遺構変遷表	110			

第1章 調査の経緯

高柳・下安田遺跡が所在する坂井市丸岡町は、全国でも有数の穀倉地帯である坂井平野の東部を占める。この平野のほぼ中央を斜めに横切るのが十郷用水で、農林水産省北陸農政局(以下、農政局)による用水地中埋設工事に伴う発掘調査である。平成12年度から開始されたこれらの事業に伴う試掘調査でも坂井市丸岡町内については、平成15年度に終了した。その結果、本調査となったのは16年度の上安田向田遺跡と高柳・下安田遺跡、そして17年度に舟寄福島通遺跡・舟寄遺跡、18年度に舟寄福島通遺跡と坂井市坂井町若宮遺跡、19年度に若宮遺跡の残りを行っていち段落ついている。事業の概要と12年度から15年度までの試掘調査については、すでに刊行した上安田向田遺跡の報告書にまとめた。ここでは高柳・下安田遺跡に関するものについて述べておく。

発掘調査では農道直下とその両側について対象となるため、仮設道路と仮設水路の設置が必要であり、その工事が完了した8月から表土掘削などの作業を開始した。先行して調査を行っていた上安田向田遺跡が終了した9月後半に、調査を担当していた赤澤とともに、作業員も合流して作業が本格的となった。調査区が東西に長いので、その両側から並行して掘削を行っていたが、土器とともに玉作関連遺物が大量に出土したため、東地区の作業を中心に行うこととした。玉作関連遺物は包含層や掘立柱建物の周辺で出土し、平板実測にて図化した上で取り上げるとともに、さらに集中する範囲では、50cm四方のメッシュで区画して取り上げた。確認された竪穴住居などの遺構掘削などに追われる11月初旬に竪穴住居の床面などで銅鐸片が出土し、記者発表を行うとともに、12月26日に現地説明会を実施した。調査はその後、西地区へ順次移動し、やはり円形の竪穴住居で集中して玉作関連遺物が大量に出土し、4棟の竪穴住居が重なって確認されるなど、予想以上に遺構が確認された。天候不順などもあったが3月上旬には空中写真測量を終え、補足調査などを行い、3月末に現地での調査を終了した。

年度が変わった翌年、農政局から設計変更に伴う一部について追加の調査の依頼があった。対象地は建物などが集中し、銅鐸片も出土した東地区の北側に接するため、11月に試掘を行い、約680m²について本調査が必要となった。本調査は18年度の秋に対応した。

平成16年度(2004)調査日誌抄録

8月3日 農道脇の耕作土から除去開始。
8月18日 作業員作業開始。遺構確認作業を行いながら、調査区の両脇に排水用の側溝を掘削。
9月1日 調査区の東側に落ち込みがあり、集落の東端を確認。
9月23日 同事業の上安田向田遺跡の調査が終了し、器材とともに赤澤・佐藤が合流。先行していた東地区を機部が担当し、赤澤は西地区を主に担当する。
10月上旬 遺構検出を行なうとともに、調査区北端の落ち込みの検出を行なう。
10月下旬 竪穴らしき遺構・土坑・溝などを検出。M・Nグリッドでは遺構に伴わないで玉材が集中して出土し、主要なものには平板実測にて図化した後に取り上げるとともに、50cmメッシュを組んですべての玉材の出土傾向を把握するように努める。
10月27日 調査区の北端で完形に近い土器がまとまって出土

する(SX058)。また調査区の南西隅(SI051上層)で玉材が集中したため、平板実測にて図化した後に50cmメッシュを組んでの取り上げを行なう。
11月6日 SI001で銅鐸片出土(12月26日現地説明会実施)。
12月21日 東地区のSI001を中心に1回目の空撮。
3月9日 東地区のSI002を中心に2回目の空撮。
3月25日 3回目の空撮で河道から西地区を終了。
3月25日 補足測量。器材を撤収し作業終了。

平成18年度(2006)調査日誌抄録

11月15日 表土掘削開始。
11月22日 遺構検出・掘削。
12月14日 遺構の掘削を終了し、全景写真撮影。
12月19日 全体測量と並行して補足調査。
12月25日 器材・ユニットハウスを撤収し、作業終了。

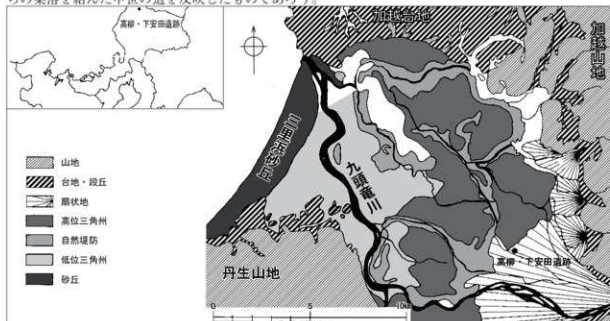
第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

高柳・下安田遺跡は、上安田向田遺跡の北西約1kmに位置し、その地理的・歴史的環境は、先に刊行した上安田向田遺跡の報告書の内容とほぼ同じである。ここではその内容と重複する部分は割愛し、追加して述べる必要がある部分についてのみ取り上げる。

第1節 地理的環境 (第1回)

高柳・下安田遺跡は北約400mに兵庫川が、南約500mに旧九頭竜川の支流を利用したと考えられる十郷用水が東西に流れ、その間の微高地に広がる遺跡と考えられる。検出された弥生時代の遺構面は標高約10m前後に位置し、上安田向田遺跡で弥生土器が出土した標高12mより2mも低い。また北西へ約4km離れた舟寄福島通遺跡・若宮遺跡ではそれが6m前後となる。平坦なイメージがある坂井平野で、近隣するほぼ同時代の遺跡が立地する標高のこの違いは大きい。舟寄福島通遺跡・若宮遺跡では地山付近で礫層が確認されないのに対して、高柳・下安田遺跡と上安田向田遺跡周辺では表土近くで礫層が確認されるとともに、この2遺跡の間、本遺跡と国道8号を挟んだ東側の安田新遺跡の立会い調査では広範囲に広がる礫層を確認している。つまり高柳・下安田遺跡の周辺から東の地山直下、もしくは現水田直下には礫層が広がる。これは西にある旧国道8号付近が扇状地扇端となり、前者の2遺跡はその下流に形成された沖積低地に立地するのに対して、後者の2遺跡は明らかな扇状地に立地することを意味している。つまりこれまで九頭竜川右岸の坂井平野の遺跡の立地は一括して考えられがちであったが、旧丸岡町東部の平野東部と旧丸岡町西部から旧坂井・旧春江町の平野西部では、遺跡の立地する環境が大きく異なることが言える。

また余談とはなるが、遺跡付近の旧国道8号沿線の集落の多くは江戸時代以前には文献に現れ、成立はそれ以前に扇状地扇端の湧水地点を選んだものと考えられる。つまり九頭竜川北岸から旧丸岡町を結んでいる旧国道8号は、渡渉地点である福井市森田地区から、旧丸岡町市街地(丸岡城)の間にある、これらの集落を結んだ中世の道を反映したものであろう。

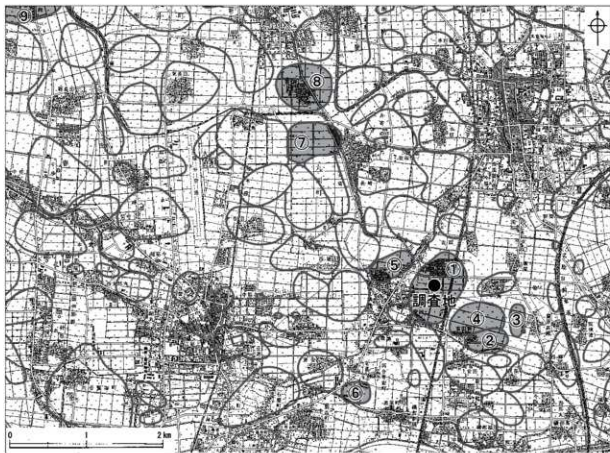


第1図 遺跡の位置と周辺の地形概要図 (縮尺 1/200,000)

第2節 歴史的環境 (第2回)

本遺跡については、先の上安田向田遺跡で述べた内容とほぼ同じであるので、ここでは発掘調査された付近の弥生時代の遺跡について述べるにとどめる。地理的環境でもふれたように、舟寄福島通遺跡・若宮遺跡は沖積低地に位置し、本遺跡は扇状地に立地する。この立地の違いは、舟寄福島通遺跡・若宮遺跡の弥生時代の遺構は住居が地山を掘り込まない周溝を廻らす平地式住居や、明らかに井戸と考えられるものが検出されているのに対して、高柳・下安田遺跡では周溝を廻らす平地式住居ではなく堅穴住居が8棟も検出され、湧水がみられる明らかに井戸とされるものは確認できなかったことに関連するものと考えられる。また集落の時期も先の2遺跡は、高柳・下安田遺跡の前段階である。坂井平野の弥生時代中期の集落が、主にその西部の沖積低地に分布し、扇状地にはやや下った後期に顕著となる状況にほぼ合致する。

また本遺跡では表土から6世紀の須恵器と古代の土師器が、松木遺跡では7世紀の須恵器が出土し、安田新遺跡の立会いでも古代の土器が採集されている。また本遺跡の西に位置する北横地森里遺跡では、旧丸岡町教育委員会による試掘調査で古墳時代後期と考えられる遺物が確認されている。古墳時代後期以降は扇状地の開発が進んだものと思われるが、発掘調査が行われた事例が少なくよくわからない。特に古墳時代の(集落)遺跡については福井平野全体での事例も少ない。しかし近年、九頭竜川付近で調査された高柳遺跡や河合寄安遺跡などの内容から、狭い範囲に集中している可能性が想定される。その意味では北横地森里遺跡の事例は大いに注目される。



第2図 高柳・下安田遺跡周辺の関連する遺跡分布図 (縮尺 1/50,000)

* 図中の番号はそれぞれの遺跡の調査地点に当たる。①高柳・下安田遺跡 ②上安田向田遺跡 ③松木遺跡
④安田新遺跡 ⑤北横地森里遺跡 ⑥河合寄安遺跡 ⑦舟寄福島通遺跡 ⑧若宮遺跡 ⑨向井銅出土地

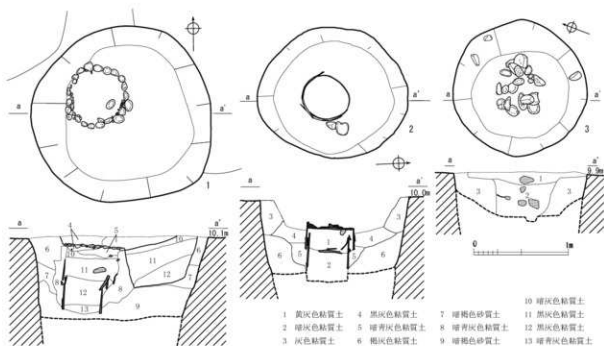
第3章 調査の概要

第1節 調査地とその周辺の概要 (第3図)

高柳・下安田遺跡の範囲は南北の北を兵庫川、南を十郷用水に挟まれた範囲としているが、今回の調査区はそのほぼ中央に位置する。扇状地の扇端に近く、地山は黄褐色の粘質土であるが、その直下には礫層が各所に広がる。排水路が東西に流れるその北側は調査区脇の水田より低く、地元によるとこの排水路周辺は深田であったとのことである。さらに今回の調査直後に北側の商業施設建設に伴う旧丸岡町の



第3図 高柳・下安田遺跡調査地周辺の概要図 (縮尺 1/5,000)



第4図 中近世と考えられる井戸遺構図 (縮尺 1/40)

試掘調査でも、遺構・遺物の密度は本調査区と比較すると極端に少ないことが判明している。調査区東側は遺構の密度が極端に少なくなるとともに、地山が落ち込み、土器の出土そのものが極端に少なくなっている。これらから弥生時代後期の集落範囲の北端と東端がほぼわかり、調査区は集落の縁辺部に当たるものと考えられる。この状況を検出された地山の標高から追うと調査区東端と北端で約9.5mとなるが、18年度の調査区北端ではまだ9.7mを測り、この付近はさらに北へ若干張り出す。また調査区南方の水田は現標高12m前後と高い。調査区は高柳地籍であるが、弥生時代の集落は西と南の不安田地籍へ大きく広がっているものと考えられるが、その範囲をこれ以上に判断する材料は全くない。このように弥生時代の集落は遺跡範囲の南部に広がり、北側にはこの集落が広がらないことから、遺跡範囲の北部には別の集落、または異なる時代の遺跡があるものと考えられる。

第2節 調査区の概要 (第6図)

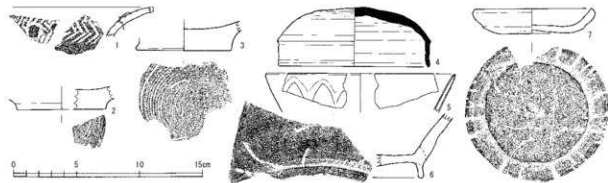
調査区はパイプ敷設に伴う掘削幅を対象としたため、既設農道を中心にその両側を含めた幅15mである。16年度はL字状の調査区であったが、18年度に約680m²の追加調査を行ったため、最終的にはF字状となった。既設農道は当時の地山に周辺の耕作土を盛り上げられるようにして作られたようで、その両側の水田はむしろ削平されたためか、農道の部分よりもやや残りが悪い。幸いなことに今回確認された主な遺構である竪穴住居は調査区のほぼ真ん中、つまり既設農道の下にあったものが多く、遺存状況は調査区のなかでも良い方である。

調査区のほぼ中央に旧河道が南北に流れて、集落を東西に分断している。この旧河道を境に調査区を東地区、西地区に分けることができ、その時期も若干の時期差がある。東地区で検出された遺構は竪穴住居3棟(うち1棟が明らかな建て替えを行う)と布堀掘立柱建物2棟に、掘立柱建物2棟と土坑や溝などである。西地区では掘立柱建物は確認できなかったものの、竪穴住居6棟と土坑や溝などが確認された。東西両地区では時期がやや異なり、土器で見る限り東地区の方が西地区より古い。ただし土器の量は面

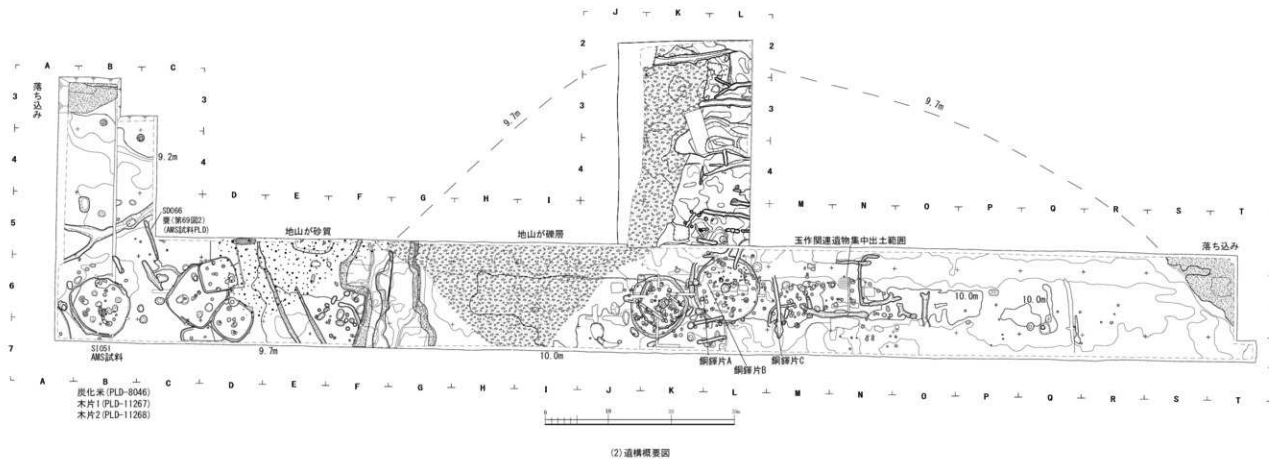
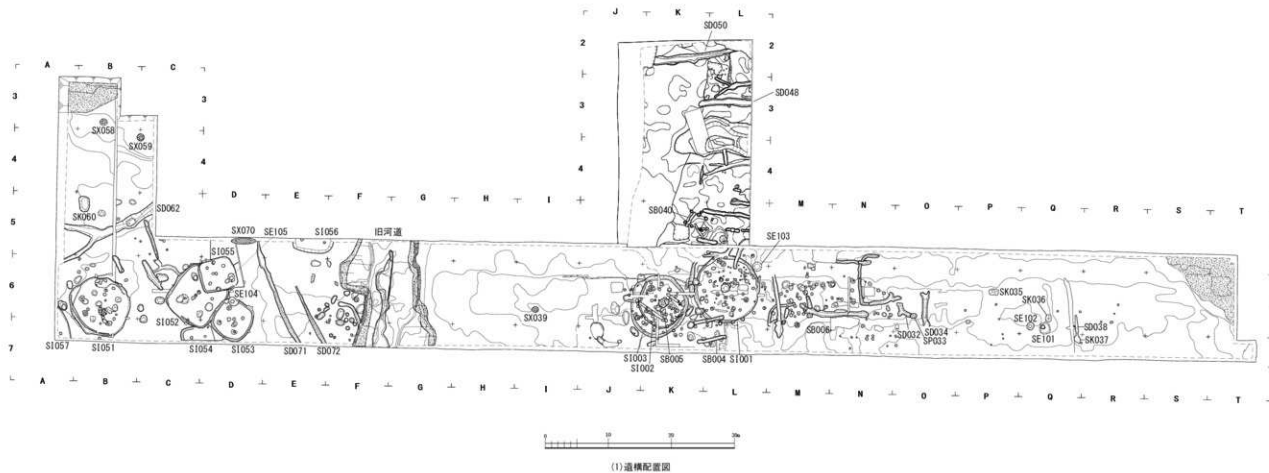
積を考えても西地区の方が圧倒的に多い。玉作関連資料は両地区ともで出土しているが、絶対量は西地区が多い。西地区は河道の縁近くまで土坑やピットなどが検出され土器も伴い、この河道が利用されていたものと考えられる。本調査区で堅穴住居や土坑などの遺構が検出されている地山には礫などは含まれてはいないのに対して、河道の東側には礫層が広がり、遺物がまとまって出土した箇所(SX039)が1か所あるのみで、包含層や旧河道の東岸からの遺物も非常に少ない。この周辺が調査区内で検出された地山で最も高い標高を残すにもかかわらず遺構がないのは、元々地表面に礫層があって生活に適さない空白地であったのか、または本来は居住に適さない低い部分が地震などで礫層などが盛り上がった結果であるのかは不明である。この礫層は18年度に行った北側の調査区でも確認され、北側へ大きく広がることも確認されている。

今回の調査では弥生時代後期の遺構が中心で、一部に中世、もしくは近世の井戸が、東西両地区に数基ある(第6図)。東地区には遺構密度が薄い東端近くでSE101・102(第4図1・2)、ほぼ中央のSI001の北東壁に接してSE103(第4図3)の合計3基が、西地区にはSI053の壁を切るようにSE104、SI055の東側にSE105の2基を確認した。ただし西地区の2基は地震の影響か、平面形・規模ともに明確なデータは提示できないが、東地区の3基と大きく変わるものではない。平面形は4基が円形で1基(SE101)のみ隅丸方形を呈し、大きさも円形のもの直径約1.4m、隅丸方形のものが1.84m×1.92mを測る。深さは1m以上あるが、井戸である性格上明確な底面は確認できていない。残りが比較的良好だったSE101・102では掘方の中央に直径約40cmの曲物を井戸杵とし、その周辺を埋め戻し、その上辺には円礫で囲うように配している。SE103では曲物の痕跡こそはないものの同様な土層断面で覆土上層に円礫が残っていたことから、やはり同じ構造であったと考えられる。SE103からは中世の土師質土器(第5図7)が出土している。このほかにも調査区の包含層から出土している中近世の遺物には摺鉢底部(第5図6)と青磁碗(第5図5)があるが、いずれも13世紀代のもので井戸はこの時期のものである可能性が高い。それ以前については、6世紀の古墳時代後期の須恵器杯蓋1点(第5図4)と古代末(10・11世紀代?)の土師器の糸切り底部2点(第5図2・3)が、また集落の時期である弥生時代後期以前については、弥生時代中期(小松式)の壺口縁部1点(第5図1)と、中期に特徴的なミガキ調整の非常に小さな細片が出土している。いずれも表土に近い出土か、表採によるもので、これらの土器を伴う時期の遺構は確認されていない。

以上、調査区全体の概要について弥生時代後期とそれ以外の概要について記した。弥生時代の個々の遺構・遺物については東地区と西地区に分け、出土遺物の概要を説明する。また遺物の個々の内容については観察表を参考にされたい。



第5図 弥生時代後期以外の土器実測図(縮尺 1/3)



第6図 調査区全体図 (縮尺 1/600)

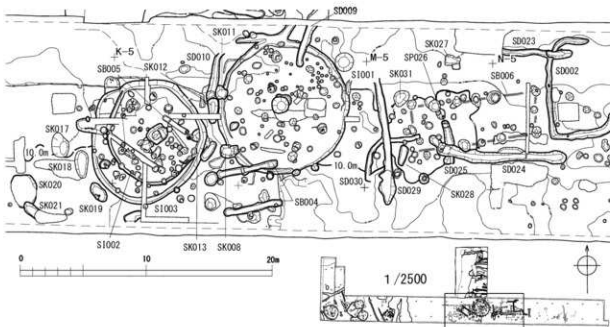
第4章 東地区の遺構と遺物

第1節 東地区の概要（第7図）

東地区はSI001を中心に、西側にSI002・003・SB005がある。SI002を南から西へ大きく拡張したようにSI003がある。後に述べるが、SI003が埋没したのちにSI002が掘削されたことが判明した。またこの2棟の住居の覆土を切り込んでSB005の溝があり、SI002・003からSI001にかかる東西のセクションではSI001の最上面の堆積層がSI002とSB005の覆土の上へ広がる（第10図）。このことからSI003が最初であり、SI002、SB005の順番で作られ、SB005とSI001は同時期である可能性が高い。またSB005の溝に挟まれた覆土上層では大量の炭化物が堆積し、この上では大量の土器が出土した。SB005とこの周辺の土坑は、SI002・003の平面を確認する以前に、その遺構の平面が確認された。

SI001の東側にはSD029・030を挟んでSB006がある。この建物の東のピットを中心とした地山面で大量の玉作関連遺物が出土している。SB006の東に接してSD022があるが、この溝から東ではピット・土坑とともに極端に少なくなり、SK037・038を東端として弥生土器を出土する遺構がなくなり、地山そのものが北東から東へ落ち込んでいく。

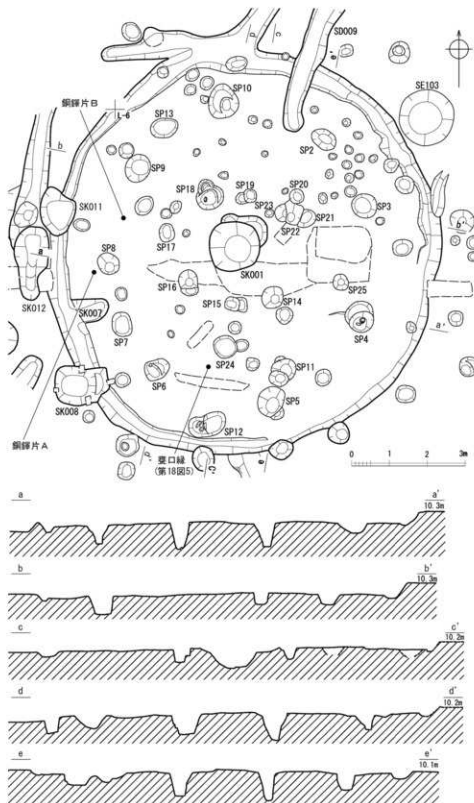
西側はSI002などの竪穴住居確認面の上面でピット・土坑があるが、さらに河道近くになると、今回の調査区でも地山が最も高い（標高10.18m）範囲であるにもかかわらず、その間のHI6グリッドを中心とした約25mについては、遺構が全く確認できなかったばかりか、遺物の出土も極端に少なかった。まとまって土器が出土したのは、特に礫が集中していた中央のSX039とした地点のみである。この部分は地山に礫が多く混じり、地震によってできた地山とも考えられ、その範囲は18年度調査区の西側半分にも広がる。この地山が形成された時期がいつかは明確ではないが、遺跡の主体である弥生時代以前で、礫が混じる地表面を弥生時代の人々が嫌って遺構を残さなかった、つまり生活に利用しなかった空間の可能性もあると考えている。



第7図 東地区主要遺構図（縮尺 1/300）

第2節 東地区(16年度調査)で検出された遺構 (第8~16図)

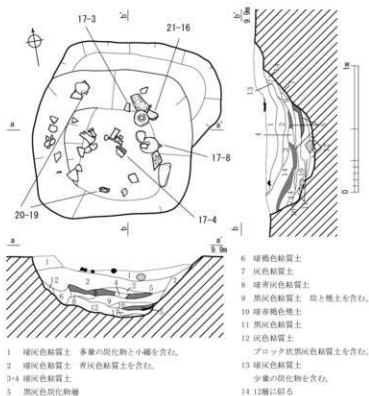
SI001(第8図) L6グリッドを中心に位置し、平面形は円形、もしくは多角形を指向していた可能性もある。東西10.3m、南北10.6mを測る。のちに述べるSB004の埋没後につくられ、北側のSD009、西側のSD010・SK011・12に切られる。壁高は確認面から約25cm残るが、削平のためか西側では浅くなる。壁の



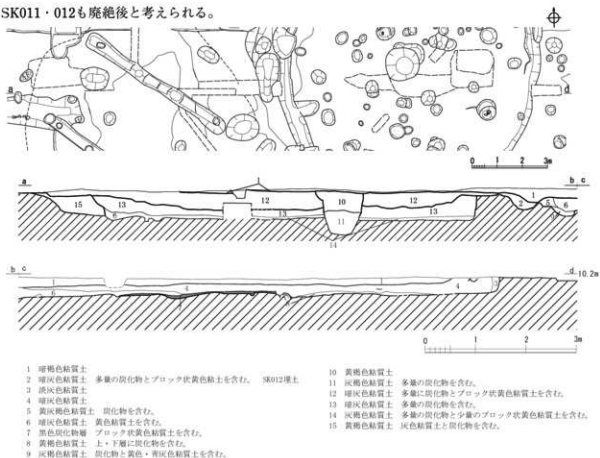
第8図 SI001実測図(縮尺 1/100)

残りがよくないが、緩やかに立ち上がると推定される。壁溝は南東を除き連続し、その幅25~70cm、深さ8~15cmを測る。床面は標高9.85mに位置し、西側がやや低くなる。炉跡と考えられる土坑(SK1)がその中心にある。これに先行する土坑が北東に重複する(第9図)。土坑は長軸1.42m、短軸1.36m、深さ0.47mを測る。この床面に据えられた状態で甕の口縁(第18図5)が出土している(図版第2②)。柱穴と想定されるピットは先の土坑を中心に二重に巡り、外側がやや大きく主柱穴は9基(SP2~10)で径約0.5~0.8m、深さ約0.3~0.5mを測る。その内側にもやや小さな7基(SP14~20)またはSP25も含めた8基で、径0.4~0.72m、深さ約0.3~0.8

mを測る。南側の壁際直上にも小さなピットが6～7基巡るが、規則性はない。この竪穴住居の床面から銅鐸片が2点(第31図)出土し、また洗浄が終了した土器には強い熱を受けた「発泡土器」の破片(図版第48)が多数含まれていた。いずれも2～3cm四方の破片で図化できるものはない。床面では目立つ大きな破片は確認されていないが、床面直上や覆土からは大量の土器が出土している。この竪穴住居のうちに述べるSB004の北溝の埋没後に掘削され、この竪穴住居の廃絶(または埋没)後に西側の壁にかかるように、SK007・008の土坑2基、北側の壁を切るようにSD009が掘削されている。またセクションなどで明確には確認していないが、検出状況から、SD010・SK011・012も廃絶後と考えられる。



第9図 SI001内SK1土器出土状況図(縮尺 1/30)

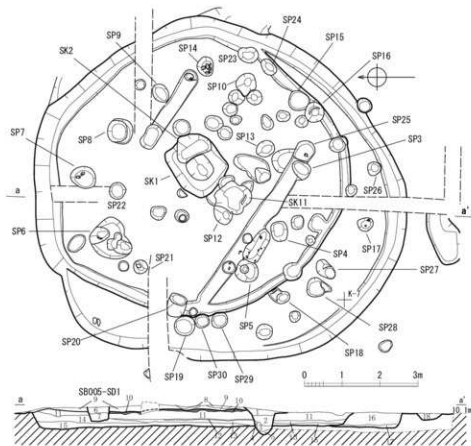


- | | | | |
|----------|------------------------------|-----------|--------------------------|
| 1 暗褐色粘質土 | 多量の炭化物とブロック状黄色粘質土を含む。SK102埋土 | 10 黄褐色粘質土 | |
| 2 暗灰色粘質土 | | 11 灰褐色粘質土 | 多量の炭化物を含む。 |
| 3 赤灰色粘質土 | | 12 暗灰色粘質土 | 多量の炭化物とブロック状黄色粘質土を含む。 |
| 4 暗灰色粘質土 | | 13 暗灰色粘質土 | 多量の炭化物を含む。 |
| 5 黄灰色粘質土 | 炭化物を含む。 | 14 灰褐色粘質土 | 多量の炭化物と少量のブロック状黄色粘質土を含む。 |
| 6 暗灰色粘質土 | 黄色粘質土を含む。 | 15 黄褐色粘質土 | 灰色粘質土と炭化物を含む。 |
| 7 黒色炭化物層 | ブロック状黄色粘質土を含む。 | | |
| 8 黄褐色粘質土 | 上・下層に炭化物を含む。 | | |
| 9 灰褐色粘質土 | 炭化物と黄色・黄灰色粘質土を含む。 | | |

第10図 SI001・SI002・SI003・SB005土層断面図(縮尺 1/75)

SI002(第11図) K6グリッドに位置し、平面形は円形を基本とするが、西側の一部に隅を持ち、本来は多角形であった可能性もある。この住居はSI003と重複するが、南北のセクションではSI003の覆土を切るように、SI002の壁溝の位置で土層が変わることから、SI003が埋没したのちにSI002が掘削されたことが判明した。東西7.9m、南北8.3mを測り、壁高は確認面から約55cmを残す。立ち上がりは緩やかである。壁溝は全周し、幅約21~34cm、深さ2~6cmを測る。床面は標高9.55mに位置し、ほぼ平坦である。中心にこの住居の炉と考えられる土坑(SK1)が1基あり(第12図)、長軸1.55m、短軸1.32m、深さ0.32mを測る。方形の平面形を呈する。南西に先行する土坑があるようで、この炉は掘りなおされている可能性がある。柱穴と想定されるピットは8基あり(SP3~10)、径約0.5~0.9m、深さ約0.1~0.3mを測る。床面で甕や高坏などが出土し、覆土からも多くの土器が出土している。特に壁際の周溝で伏せられたように甕(第22図3)が1個体出土している(第12図、図版第3③)。また上層のSB005の2本の溝(SD1とSD2)に挟まれた範囲では炭化物が集中し、その上で大量の土器が出土したため(図版第2⑤)、この住居の覆土のものとは別に取り上げた。

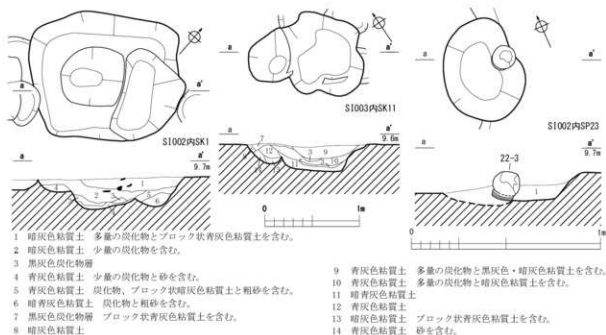
SI003(第11図) SI002の南から西へ張り出すように残され、想定される住居の大半をSI002と重なり全体が不明である。残された平面形は不整形な楕円形であるが、北西に隅があり、多角形であった可能性も残す。この住居



- | | |
|---------------------------------|----------------------|
| 1 暗褐色粘質土 | 10 黒色炭化物層 機土を含む。 |
| 2 灰褐色粘質土 多量の炭化物とブロック状黄色粘質土を含む。 | 11 黄褐色粘質土 炭化物を含む。 |
| 3 暗灰色粘質土 多量の炭化物とブロック状青灰色粘質土を含む。 | 12 黒灰色炭化物層 |
| 4 灰褐色粘質土 ブロック状黄色粘質土を含む。 | 13 灰褐色粘質土 炭化物を含む。 |
| 5 暗灰色粘質土 ブロック状青灰色粘質土を含む。 | 14 黄褐色粘質土 少量の炭化物を含む。 |
| 6 黄褐色粘質土 | 15 灰褐色粘質土 炭化物を含む。 |
| 7 灰褐色粘質土 多量の炭化物を含む。 | 16 黄褐色粘質土 |
| 8 暗褐色粘質土 | 17 青灰色粘質土 |
| 9 黄褐色粘質土 | 18 黄褐色粘質土 |

第11図 SI002・003実測図(縮尺 1/100)

は先にも述べたようにセクションの状況から、SI002に先行する住居である。東西8.9m、南北9.8mを測り、壁高は確認面から55cmを残す。立ち上がりは垂直に近い。壁溝は南側に巡り、幅38~58cm、深さ3~7cmを測る。床面は標高9.55mに位置し、ほぼ平坦である。炉跡はSI002の床面の部分ではあるが、SI002の炉と判断した土坑の南で、この住居の柱穴と考えられる柱穴の中心に1基(SK11)ある(第12図)。長軸0.8m、短軸0.7m、深さ



第12図 SI002内SK1、SI003内SK11 実測図（縮尺 1/40）、SI002土器出土状況図（縮尺 1/20）

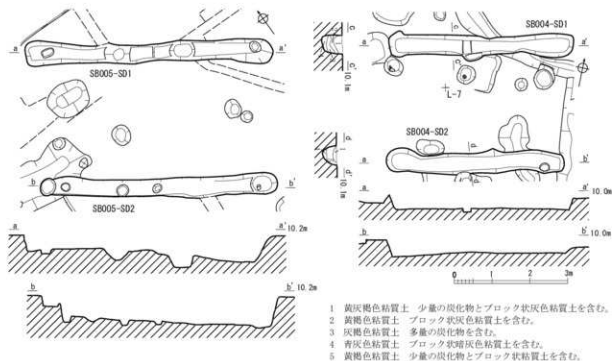
0.23mを測る。西側に先行する土坑があるようで、これとあわせて不整形な瓢箪形の平面形を呈する。柱穴と想定されるピットは9本あり（SP14～22）、径約0.4～0.5m、深さ約0.1～0.3mを測る。

SB004（第13図）北溝（SD1）がSI001の南壁に重なり、KL6・7グリッドに位置する。検出状況からSI001に先行する布堀の溝を持つ建物である。溝の底に柱穴は残存せず、桁行方向はN78°Wを示す。溝が東西に並び、その北溝（SD1）は長さ4.82m、幅0.52m、深さ0.38mを、南溝（SD2）は長さ4.7m、幅0.51m、深さ0.40mを測り、それぞれ西側にやや傾く。いずれの溝からも弥生土器片が出土しているが図化できたものはない。

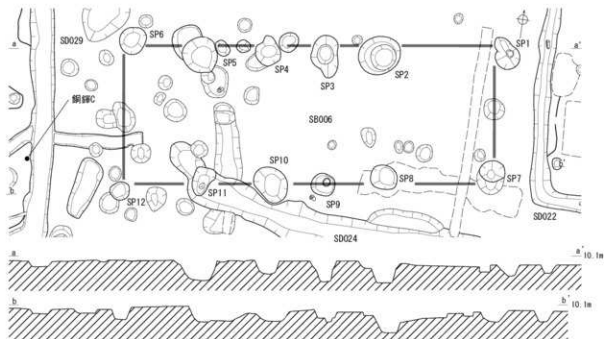
SB005（第13図）SI001の西側に先行した堅穴住居（SI002・003）にはほぼ全体が重なり、K6グリッドに位置する。検出状況からSI002・003が完全に埋没した後の、布堀の溝を持つ建物である。両方の溝の底には柱穴を残す。北溝（SD1）は長さ6.54m、幅0.46m、深さ0.7mを測る。その柱穴は不規則に4本が並ぶ。南溝（SD2）は長さ6.24m、幅0.44m、深さ0.74mを測る。溝の底に残された柱穴は5本あり、径0.2～0.64m、深さ0.06～0.28mを測る。これから建物を復元すると、1間×3間、梁行3.5～3.7m、桁行5.7m、桁柱間1.5～1.9m、床面積は約20.3㎡となる。桁行方向はN57°Eを示す。北溝（SD1）から出土した土器片3点（第28図12・13・15）、南溝（SD2）から出土した土器片1点を図化した（第28図11）。

SB006（第13図）SI001の東、MN6グリッドに位置する1間×5間と想定した掘立柱建物である。柱穴としたピットの大きさも、深さにもバラツキがある。ここで示したピットすべてが建物に伴うもの、またはこれ以外のピットなどが関係ないものとは断定できない。特に南側のピット（SP10・11）と重複する溝（SD024）、西側の溝（SD029）、北側の溝（SD023）、東側のコの字状の溝（SD022）など四方向に溝があるが、この建物との関係は不明である。掘立柱建物として復元したのは、梁行3.2～4m、桁行10m、柱間1.5～3.4m、床面積は約40㎡となり、柱穴は径0.5～1.1m、深さ0.3～0.54mを測る。桁行方向はN86°Wを示す。いずれの柱穴からも弥生土器片が出土しているが、図化できたものはない。この建物の東側を中心に大量の玉作関連遺物がさらに西側に接して、銅鐸片C（第31図）が出土している。

SK007（第14図）K6グリッドのSI001の西壁にひっかかるように位置する。SI001の検出の上面で確認



- 1 黄灰褐色粘質土 少量の炭化物とブロック状灰粘質土を含む。
- 2 黄褐色粘質土 ブロック状灰粘質土を含む。
- 3 灰褐色粘質土 多量の炭化物を含む。
- 4 青灰色粘質土 ブロック状暗灰色粘質土を含む。
- 5 黄褐色粘質土 少量の炭化物とブロック状粘質土を含む。

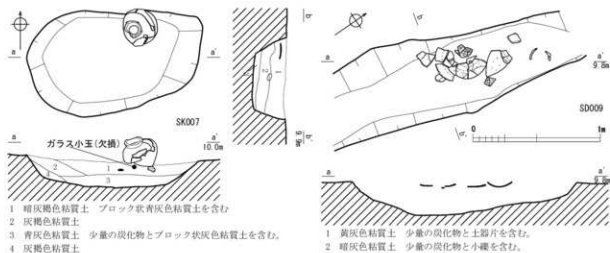


第13図 SB005・SB004・SB006 実測図 (縮尺 1/100)

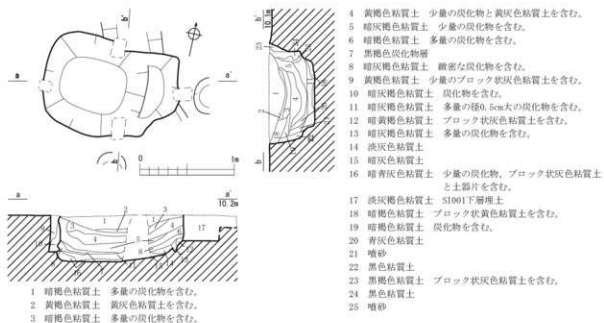
され、この竪穴住居廃絶後の遺構である。平面形は小判形を呈し、長軸1.4m、短軸0.77m、深さ0.19mを測る。完形に復元された壺1点(第30図1)とその脇でガラス玉(欠損品)が1点出土している(図版第7④)。

SK008(第15図) SK007と同じようにK6グリッドのS1001の西壁にひっかかるように位置し、S1001検出の上面で確認され、この竪穴住居廃絶後の遺構である。平面形は楕円形を呈し、長軸1.42m、短軸0.9m、深さ0.38mを測る。出土した土器で壺など3点を図化した(第28図9・10・20)。SK007・008の2基の土坑はその間が1.2mほどしか離れず、並びも同じ方向である(図版第7①)。

SD009(第15図) L5・6グリッドのS1001の北壁に直交するように、その内部まで及び、北端は調査区



第14図 SK007・SD009 土器出土状況図（縮尺 1/30）



第15図 SK008 実測図（縮尺 1/40）

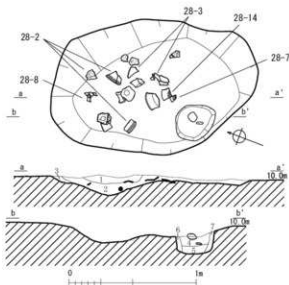
外へ伸びる。やや東に傾き南北方向に流れる溝である。検出した長さは3.6m、幅0.64m、深さ約0.26mを測る。断面は横長い逆台形である。高坏の坏部などが出土している（図版第7③）。

SD010 K5・6グリッドのSI001の西壁上面に沿うように検出され、南北に長い溝である。南端はSK012に切られ、北端は削平を受ける。長さは3.68m、幅0.46～0.98mで南側は幅が広くなり、深さは南側で約0.3mを測る。断面は横に長い逆台形を呈する。弥生土器が出土しているが、図化できたものはない。

SK011 K6グリッドに位置し、SI001の西壁上面にかかるように検出された。平面形は不整形を呈し、長軸1.32m、短軸0.96m、深さ0.31mを測る。弥生土器は出土しているが、図化できたものはない。

SK012 K6グリッドのSI001の西壁上面に沿うように検出され、南北に長い土坑である。長軸1.96m、短軸0.49m、深さ0.41mを測る。弥生土器は出土しているが、図化できたものはない。

SK013 K6グリッドに位置し、SI002の東壁上面にかかるように検出された。この堅穴住居の前後関係は検出状況では明確に出来なかった。平面形は楕円形を呈し、長軸1.32m、短軸1.06m、深さ0.34mを測



- 1 黄褐色粘質土 少量の土器片を含む。
- 2 黄色粘質土 多量の土器片と炭化物を含む。
- 3 灰色粘質土
- 4 暗灰色粘質土 礫を含む。
- 5 灰色粘質土
- 6 黄灰色粘質土
- 7 灰色粘質土 少量の炭化物を含む。

第16図 SK019 土器出土状況図(縮尺 1/30)

SB005-SD 2 西端で重複するが、検出状況では少なくとも前者廃絶後のものである。平面形は隅丸方形を呈し、長軸3.36m、短軸1.2m、深さ0.7mを測る。高坏1点を図化した(第28図17)。

SK018 J 6グリッド、SI003の西側に隣接する。平面形は小判形を呈し、南西側の肩は攪乱を受ける。長軸2.2m、短軸1.9m、深さ0.34mを測る。弥生土器は出土しているが、図化できたものはない。

SK019(第16図)J 7グリッド、SI003の南西側に隣接する。平面形は小判形を呈し、長軸1.64m、短軸1.09m、深さ0.15mを測る。鉢など5点を図化した(第28図2・3・7・8・14)。

SK020 J 6・7グリッドに位置する。西端が削平を受け、南端でSK021と重なり平面形は不確定であるが、小判形と推定される。検出した大きさは長軸2.6m、短軸約1.9m、深さ0.32mを測る(図版第6⑥)。甕1点(第28図21)を図化した。

SK021 J 7グリッドに位置する。西端でSK020と重なり、東側が攪乱を受けて、平面形は不明確である。大きさは長軸1.18m、短軸0.78m、深さ0.1mを測る(図版第6②)。甕1点(第28図18)を図化した。

SD022 N 5・6グリッドに位置し、SB006の東に接する。東側に開放する「コ」の字状の溝である。北辺2.47m、西辺7.56m、東辺6.17mを測る。総延長は約16.2m、幅0.37~0.7m、深さ約0.28mを測る(図版第6③)。断面は逆台形を呈する。甕・高坏など10点を図化した(第29図1~4・11・12・15~18)。

SD023 N 5グリッドに位置し、東西方向に流れる溝で西端側は攪乱を受ける。長さは5.53m、幅0.45~0.65m、西から東へと傾斜し深さ約0.33mを測る。弥生土器は出土しているが、図化できたものはない。

SD024 MN 6グリッドに位置し、東西方向に流れる溝で西端側をSB006-SP11に切られる。検出した長さは約10.3m、幅0.54~1.1m、溝の真ん中が最も深く約0.3mを測る。弥生土器は出土しているが、図化できたものはない。

SD025 M 6グリッドに位置し、やや西側に傾き南北方向に流れる溝で南側をSD024、北側をSP026に切られる。検出した長さは3.48m、幅0.53~0.74m、北側で最も深く約0.2mを測る。弥生土器は出土して

る。弥生土器は出土しているが、図化できたものはない。

SK014 K 6グリッドに位置し、SI002の東壁上面を切るように検出された。平面形は小判形を呈し、長軸1.79m、短軸0.7m、深さ0.27mを測る。弥生土器は出土しているが、図化できたものはない。

SK015 K 6グリッドに位置し、SI001とSI002の間、SB004-SD 1の西端を切るように検出された。平面形は楕円形を呈し、長軸1.04m、短軸0.84m、深さ0.18mを測る。鉢1点を図化した(第28図16)。

SD016 L 5グリッド、SI001の北壁から飛び出るように伸びる溝である。「へ」の字状に屈曲し、南側の肩はSI001と重複し、検出状況からSI001廃絶後のものと考えられる。検出した長さは4.84m、幅0.42~0.64m、深さ約0.1mを測る。弥生土器は出土しているが、図化できたものはない。

SK017 J 6グリッドに位置し、SI003の西壁と

いるが、図化できたものはない。

SP026 M6グリッドのSD025北端に位置する。平面形は隅丸方形を呈し、長軸0.66m、短軸0.36m、深さ0.22mを測る。壺1点を図化した(第29図7)。

SK027 M5・6グリッド、SB006の北に位置する。平面形は不整形形を呈し、長軸1.24m、短軸0.56m、深さ約0.1mを測る。壺2点を図化した(第29図5・6)。

SK028 M6グリッド、SD024とSD029の間に位置する。平面形は長方形を呈し、長軸1.57m、短軸0.59m、深さ0.19mを測る。弥生土器は出土しているが、図化できたものはない。

SD029 M6・7グリッドに位置し、北側削平されている。検出した長さは9.81m、幅0.53～0.64m、南端が深く0.27mを測る。弥生土器は出土しているが、図化できたものはない。

SD030 M6グリッドに位置し、SD029と重なるが、その前後関係は不明である。「へ」の字状に屈曲するし、南端は削平により不明確である。検出した長さは約6.5m、幅0.35～0.43m、深さ約0.08mを測る。弥生土器は出土しているが、図化できたものはない。

SK031 M6グリッドに位置し、SB006の北西隅柱穴と隣接する。不整形な小判形を呈し、長軸1.4m、短軸1.06m、深さ0.43mを測る。弥生土器は出土しているが、図化できたものはない。

SD032 O6グリッドに位置し、「Y」の字状の溝で東端をSP033に切られている。長さは約2.87m、幅0.62～0.73m、南東側の隅が最も深く約0.07mを測る。弥生土器は出土しているが、図化できたものはない。

SP033 O6グリッドに位置し、SD032の東端に重なる。平面形は小判形を呈し、長軸1.2m、短軸0.74m、深さ0.18mを測る。弥生土器は出土しているが、図化できたものはない。

SD034 O6グリッドに位置し、南北方向の溝である。南端は削平により不明確である。検出した長さは約5.3m、幅0.72～1.12m、深さは溝の真ん中が最も深く約0.08mを測る。弥生土器は出土しているが、図化できたものはない。

SK035 P6グリッドに位置し、周辺に遺構はない。平面形は不整形な楕円形を呈し、長軸1.55m、短軸0.91m、深さ約0.2mを測る。弥生土器は出土しているが、図化できたものはない。

SK036 Q6グリッドに位置し、平面形は隅丸方形を呈する。長軸1.17m、短軸0.91m、深さ約0.21mを測る(図版第6④)。壺と器台など4点を図化した(第29図8・9・13・14)。

SK037 Q7グリッドに位置し、SD038の南端に重なる。平面形は不整形で、検出した長さは長軸1.3m、短軸0.9m、深さ約0.04mを測る。壺1点を図化した(第29図10)。

SD038 Q6グリッドに位置し、南北の溝で南端はSK037と重なる。長さは約3.4m、幅0.42～0.52m、北から南へ緩やかに傾斜し深さ約0.06mを測る。弥生土器は出土しているが、図化できたものはない。

SK039 東西調査区の間、旧河道の東側16グリッドに広がる礫層で比較的まとまって出土した土器群である(図版第6⑤)。礫層で確認したこともあって明確な遺構とはならなかった。図化した土器は高坏など3点(第28図19・22・23)である。

以上、東地区の主な遺構について述べてきたが、竪穴住居以外の主な遺構についての前後関係についてまとめておく。SI001に先行する遺構はSB004の北溝(SD1)で、明らかに廃絶後となるのがSK007・008とSD009で、その可能性があるのがSD010とSK011・012である。SI002・003については先行する遺構は確認されず、明らかに廃絶後となるのがSB005である。また検出状況や土器の新旧で、廃絶後と考えられるのが、その周辺のSK013・017・019～021などの土坑群である。

第3節 東地区(16年度調査)の遺物 (第17~30図、第1表)

1 遺物の概要

竪穴住居・土坑・溝、そして包含層出土の土器の一部の合計240点を図化した。そのほとんどが竪穴住居出土のものである。図化した器種で多いのは甕と高坏で、甕は有段口縁がほとんどを占めるが、擬凹線文がない無文のものも多い。壺や鉢については西地区の土器よりも多種多様である。また包含層の土器は数点しか図化していないが、これは表土直下で竪穴住居などの遺構が特定できたり、SI002-003は上層の遺構確認で下層の竪穴住居の存在が判明したりするなど、早い段階で遺構平面が特定できたことによる。さらに溝や落ち込みでの土器量が少なかったことによる。

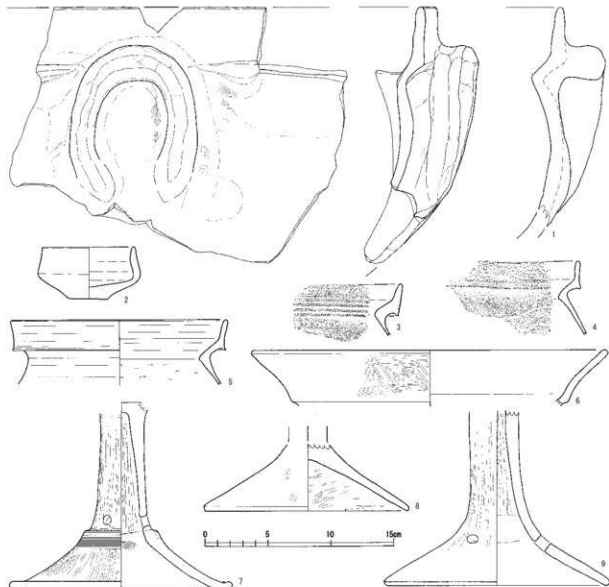
ここでは土器の説明ののちに、SI001で出土した銅鐸片についても説明する。

2 遺構出土の土器

SI001 復元できた土器が多く、銅鐸も出土していることから、合計80点を図化した。

床面近くで出土した土器は26点ある。甕は有段口縁ではほぼ直立気味に立ち上がるものか、外傾しても短く直線的であるものがほとんどで、擬凹線文があるもの3点(第17図3・4、第18図9)、ヨコナデで無文のもの3点(第17図5、第18図1・3・5)である。下半のみ残す胴部(第18図12)も底部が大きく安定感がある。壺は×印のヘラ描のある底部(第18図13)と突出した底部の胴部下半のもの(第19図13)と、立ち上がった口縁部の一部を突出させ有段口縁状にしたもの(第19図1)の3点である。高坏は口縁が大きく開き有段となる坏部のもの(第17図6、第20図3・6・9)で、脚部分のみのものには裾が「ハ」の字状に開くもの(第17図9、第20図9・14)と、有段脚(第17図7)の2種類がある。器台は有段となる坏部の口縁を欠くもの(第20図8)の1点である。脚は有段脚のもの(第20図19)の1点である。鉢は有段口縁のもの(第21図9)、小型の坏のもの(第17図2)、大きく開いた口縁端部に刻み目がある片口のもの(第21図3)、そして完形に復元できた有孔鉢(第21図6)である。蓋は口縁部が「ハ」の字に延びるもので、大小2つの口径がある(第17図8、第21図4)。小型土器は口縁が小さく開く鉢を模したようなもの(第21図11)である。

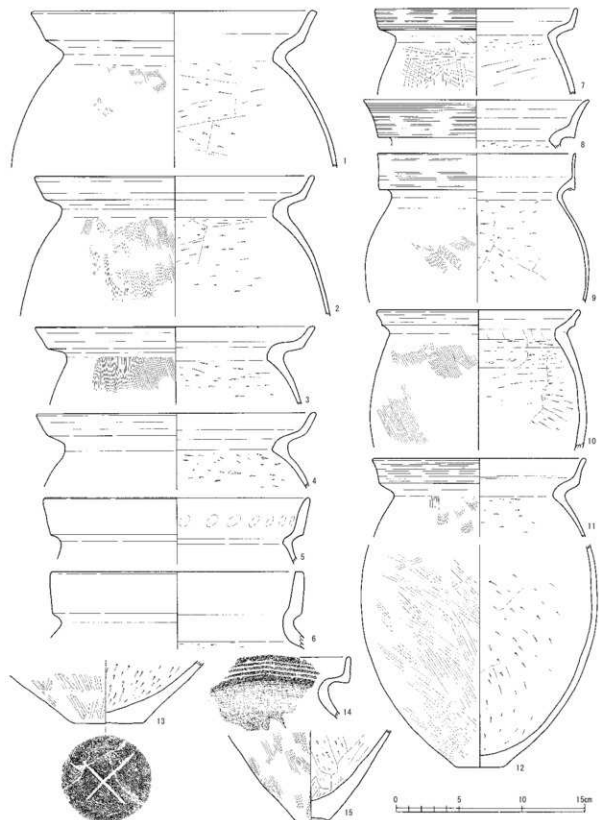
覆土一括で取り上げた土器は54点を図化した。甕は有段口縁で擬凹線文があるもの(第18図7・8・11・14)と、ヨコナデで無文のもの(第18図2・4・6・10)で、底部(第18図15)も厚い。口縁が延びて外反するもの(第18図8)は破片の1点である。壺は個体差が大きいが、短い頸部で有段口縁となるもの(第19図14)と、頸部が延びるもの2種類がある。後者はさらに口縁部を立ち上げて有段とするもの(第19図2・4~6)と、口縁帯を貼り付けるものに分かれる(第19図3・7~9・11・15・16・18・19)。口縁端部を欠くが、胴部上半に櫛描直線文と刺突列点文、さらに口縁内面に櫛描波状文を施文するもの(第19図12)は後者の口縁形状と思われ、接合していないが、同一個体と判断される胴部下半(第19図13)もある。口縁帯にも櫛描波状文(第19図7・8・15)、櫛描直線文(第19図11・19)、さらには円形浮文を貼り付ける(第19図11・16・18)など装飾性が強い。底部は大きく開くもの(第19図17)と外面ミガキ調整のもの(第19図10)2点である。高坏は口縁が大きく開き有段となる坏部のもの(第20図1)が完形に復元され、同様の脚(第20図13・18)も2点ある。器台は坏部が開く口縁のもの(第20図4・7)と、口縁帯を貼り付けるもの(第20図2・5・12)があり、脚には有段となるもの(第20図15・16)がある。脚部には沈線の間にS字スタンプを施文するもの(第20図10・11)、脚端部の面取りするもの(第20図17)、摘み上げて跳ね上げるもの(第21図17・18)がある。鉢には有段口縁のもの(第21図1・12)、浅いが皿状のもの(第21図2)、椀の形で口縁が直立(第21図13)か内湾するもの(第21図10・14)、底部が高台状に突出するもの(第21図16)である。



第17図 弥生土器実測図(縮尺 1/3)

また大型で側面に把手が貼り付く特異なもの(第21図1)は、その一部の破片で明確ではないが、おそらく口径は60cm前後になるものと想定される。蓋は口縁が直線に延びるもの(第21図5)と内湾するもの(第21図8)である。後者は天井部をハケ調整のち、ヘラで線刻して何らかの絵を表現しているが、口縁を欠いたため全体が不明である。このほかに鉢を模したような小型土器(第21図7・15)が2点ある。

S1002 床面、または直上で出土した土器は23点を図化した。床面出土の土器は小さな底部片(第23図8)、口縁端部が肥厚する高坏坏部(第24図2・8)、完形に復元された器台(第27図4)の4点である。覆土出土でも床面からやや浮いて出土したのは、甕4点、壺3点、高坏4点、器台1点、脚2点、鉢3点、脚台2点である。甕は口縁が短く直立するもの(第22図1・7・8)で、1点(第22図10)は明らかに内湾している。壺はフラスコ状で口縁が次第にすはまるもの(第23図3)、長く延びた頸部から僅かに内湾して口縁端部となる完形に復元できたもの(第23図7)、太めの頸部に擬凹線文を施した口縁帯を貼りつけるもの(第23図4)の3点である。高坏は口縁が大きく開き有段となる坏部のもの(第23図11・21)と、口縁端部が僅かに肥厚するもの(第24図7)と、同様な脚(第24図16)も1点ある。器台は開いた受部に口縁帯

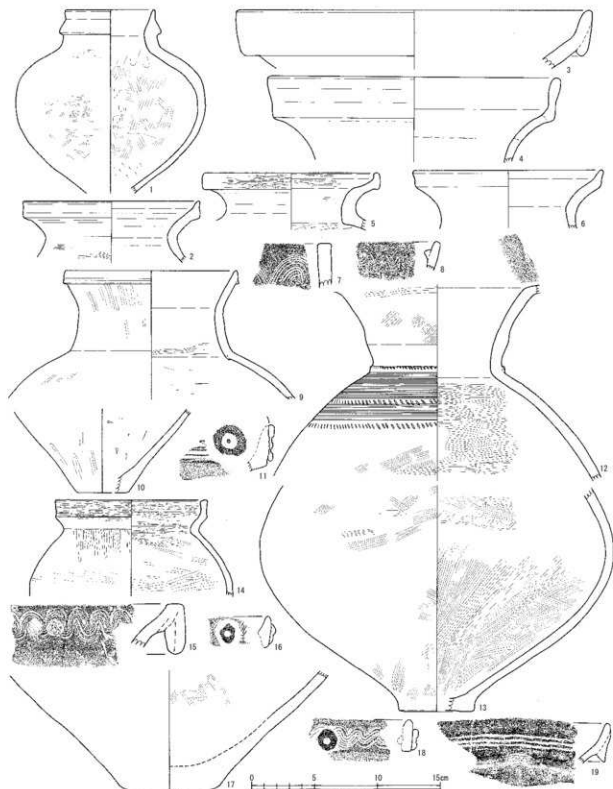


第18図 弥生土器実測図（縮尺 1/3）

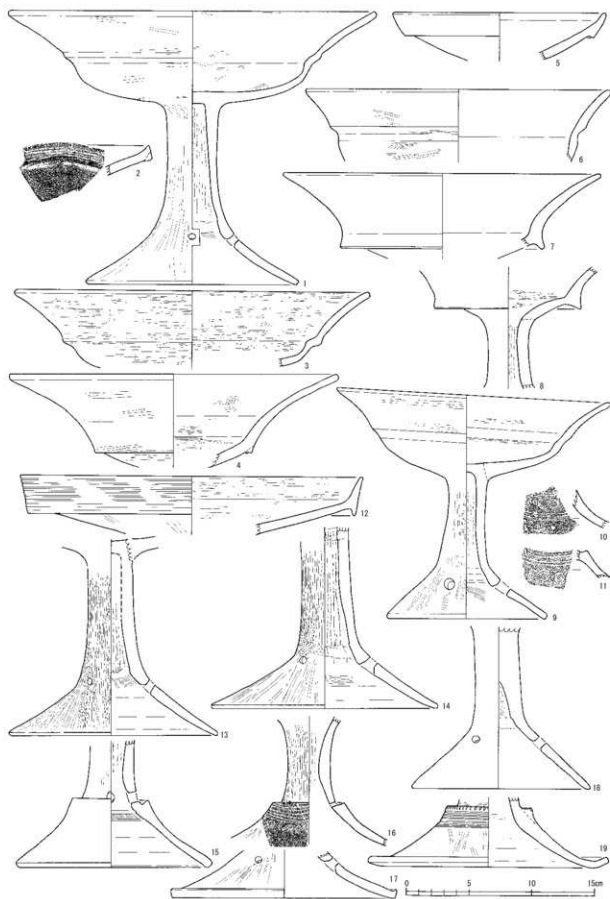
を貼り付けるもの(第24図12)である。脚は有段と無段の両者(第24図17・18)がある。鉢は有段口縁のもの(第23図16)と、椀状の器形のもの(第23図24)に加え、口縁外面に擬凹線文を施して赤彩されたもの(第23図19)の3点である。脚台はナデ成形で厚手のもの(第23図23)と、端部に面を作るもの(第23図20)

があるが、後者は赤彩され、胎土も赤彩された鉢（第23図19）に類似することから、同一個体であろう。

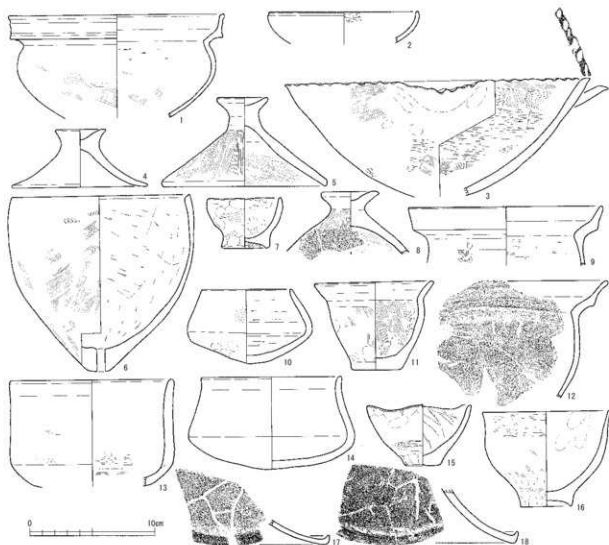
覆土一括で取り上げた土器では25点図化した。甕は有段口縁で擬凹線文のあるもの（第22図5・6・9）と、有段口縁で無文のもの（第22図4）、「く」の字口縁のもの（第23図1）である。壺として分類できるものはなかった。高坏は口縁端部内面に面をつくるか、肥厚させるもの（第24図1・3・4・6）と、有段の坏



第19図 弥生土器実測図（縮尺 1/3）



第20圖 弥生土器実測図(縮尺 1/3)



第21図 弥生土器実測図（縮尺 1/3）

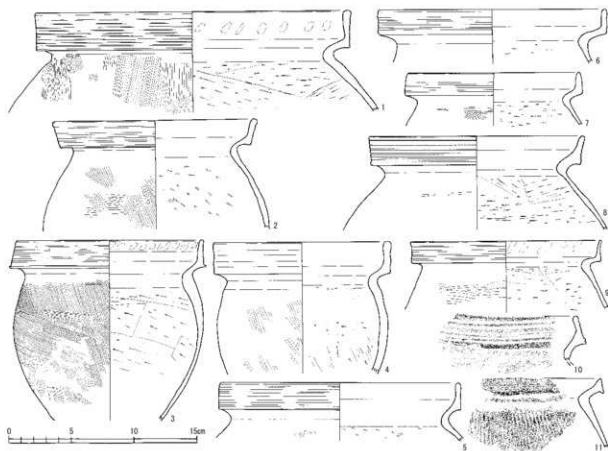
部（第24図10・11）であるが口縁は大きく伸びない。器台は口縁にヘラ刺突列点文のあるもの（第24図13）の1点である。脚は有段（第23図17、第24図19）と無段（第24図20）のものである。鉢は有段のもの（第23図6）、椀状の器形で口縁が僅かに外反するもの（第23図14、第24図14・15）、丸い胴部からそのまま口縁部となるものには、おそらく丸底の底部となるもの（第23図18）と、脚台が付くもの（第23図10）がある。また後者のようにここでは蓋として図化した、上下を逆転して台が付く鉢で分類可能なもの（第23図9）もある。小型の鉢となるもの（第23図12）は、屈曲した頸部から口縁が短く立ち上がる。脚台もあるが、上に付くものが想定できない（第23図13）。縦長のコップ状の小型土器（第23図22）は口縁端部を僅かに欠く。

SI002の覆土でも炭化物集中層の上の上層から出土した土器が大量にあり、明らかに下層出土のものとは分けることが出来た土器の44点を図化した。甕は有段口縁で擬凹線文のあるもの（第25図1～6・9・10）が7点、有段口縁で無文のもの（第25図19）が1点、「く」の字に屈曲するもの（第25図8）が1点である。有段口縁は直立気味に立ち上がるものがほとんどで、1点のみ（第25図10）内傾する。甕の底部（第25図7）も1点ある。甕には長い頸部に口縁部を立ち上げて有段とするもの（第25図13・14・16～18）、口縁に面を作るか（第25図15）、口縁帯を貼り付けるもの（第25図12）を基本とするが、広口壺で口縁帯を垂下させた口縁帯のもの（第25図11）があり、このタイプの壺はこの1点のみしか確認されていない。高坏

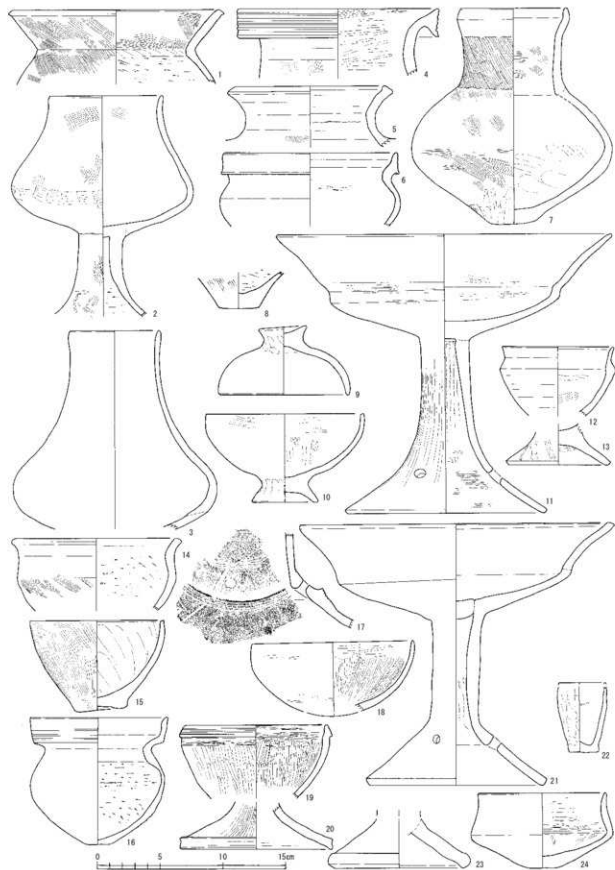
は口縁が大きく開き有段となる坏部のもの(第26図2～7・12)が7点と多く、口縁端部が僅かに肥厚するもの(第26図1)は1点だけである。同様な脚(第26図15)も1点ある。器台は、口縁端部はないが大きく開く受部となるもの(第26図14)、口縁端部を積み上げて面を作るもの(第26図11)、やや垂下させて面を作るもの(第26図13)の3点である。脚は有段となるものにはS字スタンプや刺突列点文が施文(第26図8・16・17)され、無段のもの(第26図9・18～21)にはやはり施文はない。鉢は有段でも口縁帯がほとんど立ち上がらないもの(第25図20)、有段でも弱いもの(第25図23)、椀状の器形のもの(第25図21)の3点である。脚台は端部に幅広の面を作るもの(第25図22)である。小型土器は高台状の脚が付く鉢を模したようなもの(第26図10)である。

SI002でSI003覆土から出土した破片が接合した土器には、擬凹線文のある甕(第22図3)と、口縁端部を僅かに肥厚させる高坏坏部口縁(第24図2・9)がある。

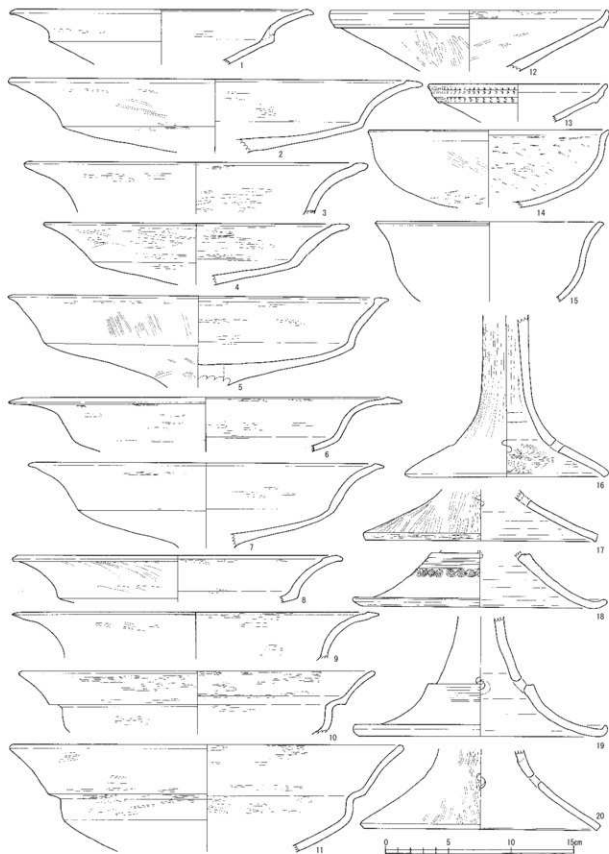
SI003 床面から出土した土器14点、覆土一括で取り上げた土器6点の20点を図化した。甕は有段口縁で擬凹線文のあるもの(第27図14)と、有段口縁で無文のもの(第27図12)である。壺は脚が付くプランデグラス形のもの(第23図2)と、頭部から口縁部が緩く外反して、端面を僅かに拡張するもの(第23図5)である。高坏は口縁が大きく開き有段となる坏部のもの(第24図5・第27図1～3)で、その脚と推定されるもの(第27図5・6)が2点ある。器台は1点も図化できなかった。鉢は有段口縁のもの(第27図18)が1点ある。蓋は内湾する口縁で、上下に逆転して台付の鉢にも分類されるもの(第27図16)である。小型土器は頭部が小さく屈曲する鉢を模したもの(第27図8)と、頭部がすはまる壺を模したもの(第27図9)で完形に復元できた。覆土一括で取り上げたもので甕は有段口縁で擬凹線文のある破片(第27図7・10・



第22図 弥生土器実測図(縮尺 1/3)

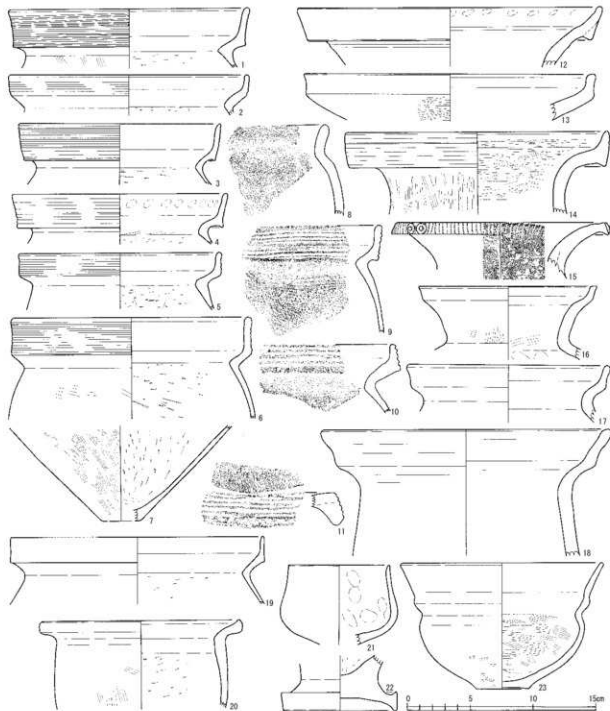


第23圖 弥生土器実測図（縮尺 1/3）



第24図 弥生土器実測図 (縮尺 1/3)

11)が3点ある。壺は有段口縁でも擬凹線文のない無文のもの(第27図13)である。鉢は平底の底部から



第25図 弥生土器実測図（縮尺 1/3）

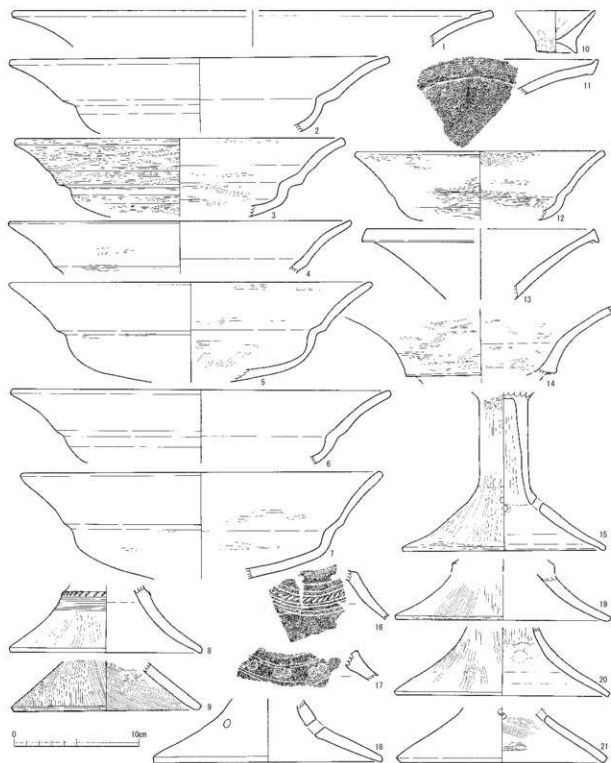
立ち上がった口縁をヨコナデで内湾させるもの(第27図15)である。蓋は僅かに内湾する口縁のもの(第27図17)である。

SB005 2本ある溝から出土した破片4点を図化した。有段口縁で擬凹線文のあるもの2点(第28図13・15)と有段脚と考えられるもの1点(第28図12)がSD1出土である。有段口縁で擬凹線文のある破片1点(第28図11)はSD2出土である。

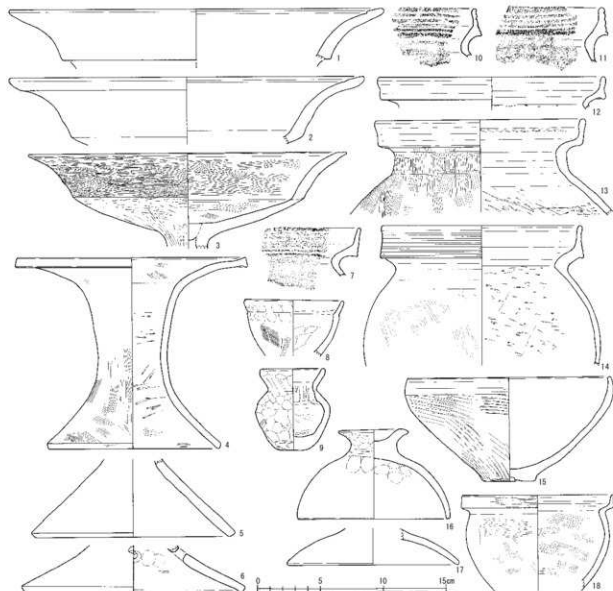
SK007 完形に復元された壺(第30図1)が1点ある。胴部の最大径がやや上に位置し、底部は突出した平底である。延びた頸部から立ち上がった口縁は端部を上へ伸ばした擬凹線文のある有段口縁である。

SK008 壺は有段口縁で擬凹線文のあるものとミガキ調整の胴部(第28図9・10)であり、接合はしないが両者の胎土・色調も類似することから同一個体と判断される。鉢は無文の有段口縁である(第28図20)。

SD009 甕は直立気味に立ち上がり有段口縁で擬凹線文のあるもの2点(第28図5・6)と、高坏は口縁が大きく開き有段となる坏部のもの(第28図1)1点が図化できた。



第26図 弥生土器実測図(縮尺 1/3)



第27図 弥生土器実測図（縮尺 1/3）

SK012 鉢は有段口縁であるもの1点(第28図4)を図化した。

SK015 鉢は胴部中ほどで屈曲して口縁となるもの(第28図16)が1点図化した。

SK017 高坏は口縁が大きく開き有段となる坏部のもの(第28図17)を1点図化した。

SK019 壺はすばまった頸部から開いた口縁がさらに若干開くもの(第28図7)と、口縁に端面を作るもの(第28図8)の2点である。鉢は擬凹線文のある有段口縁で、口径が大きいもの(第28図2)である。脚は有段で直線文を重ねるもの(第28図14)、脚台は端部を上下に拡張し面を作るもの(第28図3)である。

SK020 甕は口縁が外反する有段口縁で擬凹線文のあるもの(第28図21)である。

SK021 甕は口縁が直立気味に立ち上がる有段口縁で擬凹線文のあるもの(第28図18)である。

SD022 甕は直立気味に立ち上がる有段口縁で擬凹線文のあるもの3点(第29図1～3)と口縁は開くが短い有段口縁で無文のもの1点(第29図4)である。壺は大きく開いた口縁端部を上下に拡張し、円形浮文を貼りつけるもの(第29図16)であるが、器台の受部である可能性もある。器台は口縁が大きく開く受部であるが(第29図11)、もう1点は有段の器台受部の口縁となる可能性もある(第29図12)。脚は直線文



第28圖 弥生土器実測図（縮尺 1/3）

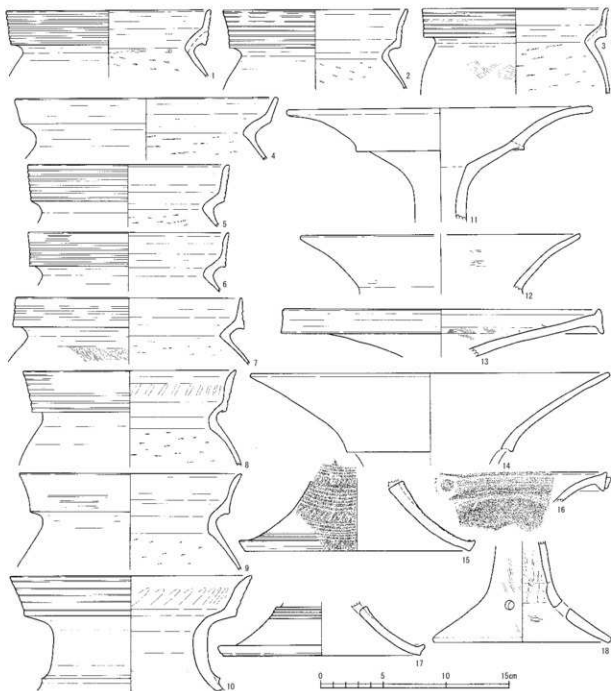
を巡らせる有段のもの2点(第29図15・17)と、無段のもの1点(第29図18)である。

SP026 甕は口縁が直立気味に立ち上がる有段口縁部で擬凹線文のあるもの(第29図7)である。

SK027 甕は口縁が直立気味に立ち上がる有段口縁部で擬凹線文のあるもの2点(第29図5・6)である。

SK036 甕は口縁部が全体に外傾する有段口縁部で擬凹線文のあるもの2点(第29図8・9)と、器台は受部が大きく開き、上下に口縁帯を拡張するもの(第29図13)と、口縁部が大きく開くもの(第29図14)が1点ずつある。

SK037 壺で有段口縁となり、頸部に刻み目のない凸帯を巡らすもの(第29図10)がある。



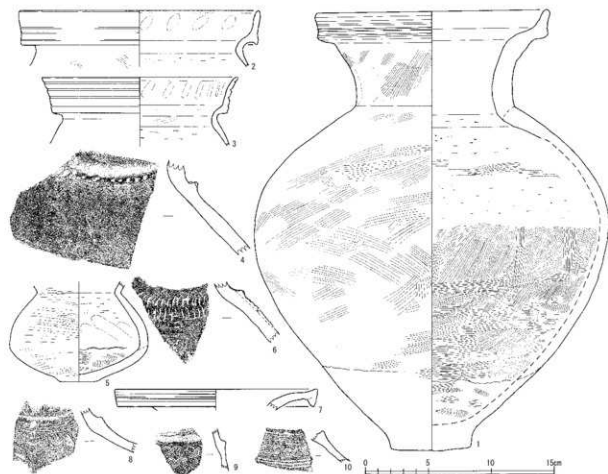
第29図 弥生土器実測図(縮尺 1/3)

SX039 高坏は口縁が大きく開き有段となる坏部のもの(第28図19)と、鉢は有段のもの(第28図23)と、椀状の器形で脚台がつくもの(第28図22)の2種類がある。

3 包含層の土器

東地区の包含層から出土した土器で図化したのは甕2点、壺4点、脚3点の9点である。甕は有段口縁部で擬凹線文のあるものであるがほぼ直立する口縁(第30図2)と、外反する口縁(第30図3)の2種類ある。ちなみに後者の甕は包含層出土ではあるが、その出土量が少ないSX039があるI6グリッドの礫層からの出土である。壺には頸部から上を欠出している有段か「く」の字かいずれかの小型のもの(第30図5)のほかに、大きく開いた口縁の端部を上下に拡張して擬凹線文を施文するもの(第30図7)、頸部に直下に刺突を加えた凸帯(第30図4)と凸帯状に盛り上げて羽状に刺突を加える胴部片(第30図6)がある。脚はS字スタンプのある破片3点(第30図8~10)を図化した。

以上、16年度の調査で出土した東地区出土の土器について述べてきたが、この後に述べる18年度調査の東地区や西地区の土器の概要を念頭に置いて比較しておく。18年度調査区は図化できた土器が少ないものの、この調査区に隣接することからもほぼ同時期と考えられる。この地区も含めて東地区は全体的に西地区より古く、特に堅穴住居出土の土器は西地区の土器よりも古く、北陸の弥生時代後期後半の指標である法仏式から月影式の前半が中心となり、建物がなくなった後の土坑などがやや新しくなる月影式後半に下る可能性がある。



第30図 弥生土器実測図(縮尺 1/3)

第3節 東地区（16年度調査）の遺物

第1表 弥生土器観察表（平成16年度東地区）

調査年度	調査番号	出土遺物	アソビ	器種	形状	調査・注目・説明など	16年度調査 調査年度	内発 調査年度	形状	色調	焼成	備考
第17回1	S000	S000	窯	煎	内口縁-飯粒	内口縁-ナメ 腹面：ハツのヒナナナ 内口縁-ナメ 腹面：ナメ	00.0	21.0	①	淡黄色	良好	
第17回2	S000	S000	窯	煎	内口縁-飯粒	内口縁-ナメ 内口縁-ナメ 腹面：ランダムなナメ	7.1	4.0	①	にじみ褐色	良好	
第17回3	S001-SK1	L 兼	内口縁-飯粒	煎	内口縁-ナメ	内口縁-ナメ 腹面：ランダムなナメ	13.0	4.0	①	淡黄色	良好	
第17回4	S001-SK1	L 兼	内口縁-飯粒	煎	内口縁-ナメ	内口縁-ナメ 腹面：ランダムなナメ	10.0	5.0	①	淡黄色	良好	
第17回5	調査番号	S001-SF2	L 兼	内口縁-飯粒	煎	内口縁-ナメ 腹面：ランダムなナメ	17.7	3.0	①	にじみ褐色	良好	内口縁付(内口縁-飯粒)
第17回6	S000	窯	煎	煎	内口縁-ナメ	内口縁-ナメ 腹面：ランダムなナメ	22.3	4.0	①	淡黄色	良好	
第17回7	調査番号	S001-SF13	高円	煎	煎	内口縁-ナメ 腹面：ランダムなナメ	15.3	14.7	①	褐色	良好	小丸3 東地区上
第17回8	S001-SK1	L 兼	内口縁-飯粒	煎	内口縁-ナメ	内口縁-ナメ 腹面：ランダムなナメ	15.9	5.3	①	淡黄色	良好	
第17回9	S001-SF2	L 兼	内口縁-飯粒	煎	内口縁-ナメ	内口縁-ナメ 腹面：ランダムなナメ	17.1	13.0	①	にじみ褐色	良好	小丸3
第18回1	調査番号	S000	L 兼	内口縁-飯粒	煎	内口縁-ナメ 腹面：ランダムなナメ	22.0	12.3	①	にじみ褐色	良好	
第18回2	S000	L 兼	内口縁-飯粒	煎	内口縁-ナメ	内口縁-ナメ 腹面：ランダムなナメ	21.7	11.0	①	にじみ褐色	良好	内口縁付(内口縁-飯粒)
第18回3	調査番号	S000	L 兼	内口縁-飯粒	煎	内口縁-ナメ 腹面：ランダムなナメ	21.0	16.1	①	淡黄色	良好	内口縁付(内口縁)
第18回4	S000	L 兼	内口縁-飯粒	煎	内口縁-ナメ	内口縁-ナメ 腹面：ランダムなナメ	21.0	16.0	①	淡黄色	良好	内口縁付(内口縁) 幸直-煎
第18回5	調査番号	S000	L 兼	内口縁-飯粒	煎	内口縁-ナメ 腹面：ランダムなナメ	20.0	5.0	①	淡黄色	良好	内口縁付(内口縁)
第18回6	S000	L 兼	内口縁-飯粒	煎	内口縁-ナメ	内口縁-ナメ 腹面：ランダムなナメ	17.0	16.1	①	褐色	やや中良	
第18回7	調査番号	S000	KL&A	煎	煎	内口縁-ナメ 腹面：ランダムなナメ	14.0	16.1	①	にじみ褐色	良好	内口縁付(内口縁) 内口縁-飯粒
第18回8	S000	L 兼	内口縁-飯粒	煎	内口縁-ナメ	内口縁-ナメ 腹面：ランダムなナメ	17.0	16.0	①	淡黄色	良好	
第18回9	調査番号	S000	L 兼	内口縁-飯粒	煎	内口縁-ナメ 腹面：ランダムなナメ	13.1	11.7	①	にじみ褐色	良好	
第18回10	調査番号	S000	L 兼	内口縁-飯粒	煎	内口縁-ナメ 腹面：ランダムなナメ	15.0	11.1	①	にじみ褐色	良好	内口縁付(内口縁) 内口縁-飯粒
第18回11	S000	L 兼	内口縁-飯粒	煎	内口縁-ナメ	内口縁-ナメ 腹面：ランダムなナメ	14.4	16.1	①	にじみ褐色	良好	
第18回12	調査番号	S000	L 兼	煎	煎	内口縁-ナメ	14.0	17.0	①	淡黄色	良好	内口縁付(内口縁-飯粒)
第18回13	S000	L 兼	煎	煎	内口縁-ナメ	内口縁-ナメ 腹面：ランダムなナメ	5.7	18.0	①	にじみ褐色	良好	腹面：ハツのナメ
第18回14	調査番号	S000	L 兼	煎	煎	内口縁-ナメ	1.1	14.0	①	にじみ褐色	良好	
第18回15	S000	KL&A	煎	煎	内口縁-ナメ	内口縁-ナメ 腹面：ランダムなナメ	2.3	17.0	①	にじみ褐色	良好	内口縁付(内口縁)
第19回1	調査番号	S000 S000 S001-SK1 S001-SF9	煎	煎	内口縁-飯粒	内口縁-ナメ 腹面：ランダムなナメ	16.0	14.0	①	にじみ褐色	良好	
第19回2	S000	L 兼	内口縁-飯粒	煎	内口縁-ナメ	内口縁-ナメ 腹面：ランダムなナメ	13.0	4.0	①	にじみ褐色	やや中良	
第19回3	S000	K&B	煎	煎	内口縁-飯粒	内口縁-ナメ 腹面：ランダムなナメ	27.4	4.0	①	淡黄色	やや中良	
第19回4	S000	L 兼	内口縁-飯粒	煎	内口縁-ナメ	内口縁-ナメ 腹面：ランダムなナメ	22.4	6.7	①	淡黄色	やや中良	
第19回5	調査番号	S000	L 兼	内口縁-飯粒	煎	内口縁-ナメ 腹面：ランダムなナメ	13.4	4.0	①	褐色	良好	
第19回6	調査番号	S000	K&B	煎	煎	内口縁-ナメ	14.0	4.0	①	褐色	やや中良	
第19回7	S000	L 兼	内口縁-飯粒	煎	内口縁-ナメ	内口縁-ナメ 腹面：ランダムなナメ	—	3.0	①	にじみ褐色	良好	
第19回8	調査番号	S000	K&B	煎	煎	内口縁-ナメ	—	12.4	①	褐色	やや中良	
第19回9	S000	L 兼	内口縁-飯粒	煎	内口縁-ナメ	内口縁-ナメ 腹面：ランダムなナメ	33.0	10.0	①	褐色	良好	
第19回10	S000	L 兼	煎	煎	内口縁-ナメ	内口縁-ナメ 腹面：ランダムなナメ	4.0	6.0	①	褐色	良好	
第19回11	S000	L 兼	煎	煎	内口縁-ナメ	内口縁-ナメ 腹面：ランダムなナメ	—	14.0	①	にじみ褐色	良好	
第19回12	調査番号	S000	KL&A	煎	煎	内口縁-ナメ	—	13.4	①	にじみ褐色	やや中良	
第19回13	調査番号	S000	L 兼	煎	煎	内口縁-ナメ	6.0	17.7	①	褐色	良好	
第19回14	調査番号	S000	K&B	煎	煎	内口縁-ナメ	13.0	17.0	①	褐色	良好	
第19回15	S000	L 兼	煎	煎	内口縁-ナメ	内口縁-ナメ 腹面：ランダムなナメ	—	4.0	①	淡黄色	良好	内口縁付(内口縁) 16年度付
第19回16	S000	L 兼	煎	煎	内口縁-ナメ	内口縁-ナメ 腹面：ランダムなナメ	—	12.1	①	淡黄色	良好	
第19回17	S000	L 兼	煎	煎	内口縁-ナメ	内口縁-ナメ 腹面：ランダムなナメ	17.0	19.0	①	にじみ褐色	良好	
第19回18	調査番号	S000	L 兼	煎	煎	内口縁-ナメ	—	12.0	①	淡黄色	良好	
第19回19	調査番号	S000	L 兼	煎	煎	内口縁-ナメ	—	11.0	①	淡黄色	やや中良	
第20回1	調査番号	S000	L 兼	煎	煎	内口縁-ナメ	20.0	2.0	①	にじみ褐色	良好	小丸1
第20回2	S000	L 兼	煎	煎	内口縁-ナメ	内口縁-ナメ 腹面：ランダムなナメ	—	12.4	①	褐色	良好	
第20回3	調査番号	S000	L 兼	煎	煎	内口縁-ナメ	27.7	16.7	①	褐色	良好	
第20回4	調査番号	S000	KL&A	煎	煎	内口縁-ナメ	20.0	17.0	①	褐色	良好	内口縁付(内口縁)
第20回5	S000	L 兼	煎	煎	内口縁-ナメ	内口縁-ナメ 腹面：ランダムなナメ	14.5	14.0	①	にじみ褐色	良好	
第20回6	調査番号	S000	K&B	煎	煎	内口縁-ナメ	22.0	15.7	①	淡黄色	良好	
第20回7	S000	L 兼	煎	煎	内口縁-ナメ	内口縁-ナメ 腹面：ランダムなナメ	24.0	6.0	①	にじみ褐色	やや中良	
第20回8	S000	K&B	煎	煎	内口縁-ナメ	内口縁-ナメ 腹面：ランダムなナメ	—	19.0	①	にじみ褐色	良好	東地区上
第20回9	調査番号	S000	L 兼	煎	煎	内口縁-ナメ	21.4	17.7	①	褐色	良好	小丸2
第20回10	S000	L 兼	煎	煎	内口縁-ナメ	内口縁-ナメ 腹面：ランダムなナメ	—	13.1	①	褐色	良好	
第20回11	S000	L 兼	煎	煎	内口縁-ナメ	内口縁-ナメ 腹面：ランダムなナメ	—	12.1	①	淡黄色	良好	
第20回12	調査番号	S000	L 兼	煎	煎	内口縁-ナメ	20.1	14.0	①	褐色	やや中良	
第20回13	調査番号	S000	L 兼	煎	煎	内口縁-ナメ	16.5	15.0	①	淡黄色	良好	小丸3 内口縁付(内口縁) 煎
第20回14	S000	L 兼	煎	煎	内口縁-ナメ	内口縁-ナメ 腹面：ランダムなナメ	17.0	14.3	①	にじみ褐色	良好	小丸3
第20回15	S000	L 兼	煎	煎	内口縁-ナメ	内口縁-ナメ 腹面：ランダムなナメ	14.0	10.0	①	にじみ褐色	良好	小丸4
第20回16	S000	L 兼	煎	煎	内口縁-ナメ	内口縁-ナメ 腹面：ランダムなナメ	—	10.1	①	褐色	良好	小丸3
第20回17	S000	L 兼	煎	煎	内口縁-ナメ	内口縁-ナメ 腹面：ランダムなナメ	17.3	14.0	①	淡黄色	良好	小丸3
第20回18	S000	L 兼	煎	煎	内口縁-ナメ	内口縁-ナメ 腹面：ランダムなナメ	13.6	12.0	①	淡黄色	良好	やや中良
第20回19	S000 S001-SK1	L 兼	煎	煎	内口縁-ナメ	内口縁-ナメ 腹面：ランダムなナメ	16.0	15.5	①	にじみ褐色	良好	内口縁付(内口縁) 幸直-煎
第21回1	S000	K&B	煎	煎	内口縁-ナメ	内口縁-ナメ 腹面：ランダムなナメ	16.0	18.7	①	にじみ褐色	良好	内口縁付(内口縁-飯粒)

第4章 東地区の遺構と遺物

調査番号	調査年度	出土遺構	タイプ	遺構	遺物	調査・経緯・支那など	1区 面積(m ²)	発見 高(m)	形状	色澤	焼成	備考
第21-2	S100	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		11.6	2.5	①	褐色	良好	
第21-3	S100	L6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ	内:ヨココシナリ	22.8	9.0	①	浅黄褐色	良好	
第21-4	S100	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		16.4	4.6	②	灰白色	良好	
第21-5	S100	L6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		12.8	7.6	①	にじみ褐色	良好	
第21-6	S100	L6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		14.0	13.9	①	にじみ褐色	良好	
第21-7	S100	L6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		13.7	4.0	①	にじみ褐色	良好	
第21-8	S100	L6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		15.0	1.1	①	にじみ褐色	良好	
第21-9	S100	L6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		11.5	4.7	①	にじみ褐色	良好	
第21-10	S100	L6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		7.0	5.5	①	にじみ褐色	良好	
第21-11	S100-S104	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		9.1	7.6	①	褐色	良好	
第21-12	S100	L6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		15.6	9.3	①	にじみ褐色	良好	
第21-13	S100	L6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		12.4	8.1	①	にじみ褐色	良好	
第21-14	S100	L6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		16.8	7.2	①	にじみ褐色	良好	
第21-15	S100	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		18.0	4.8	①	褐色	良好	
第21-16	S100	L6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		11.0	7.5	①	褐色	良好	
第21-17	S100	L6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		—	2.0	①	褐色	良好	
第21-18	S100	L6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		—	4.3	①	褐色	良好	
第21-19	S100	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		24.8	1.9	①	灰黄褐色	良好	
第21-20	S100	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		13.4	18.7	①	にじみ褐色	良好	
第21-21	S100	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		14.2	14.2	①	灰黄色	良好	
第21-22	S100	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		13.8	10.4	①	褐色	良好	
第21-23	S100	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		11.5	4.6	①	にじみ褐色	やや不良	
第21-24	S100	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		17.2	4.3	①	にじみ褐色	やや不良	
第21-25	S100	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		13.7	4.1	①	灰白色	良好	
第21-26	S100	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		16.6	7.4	①	にじみ褐色	良好	
第21-27	S100	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		14.0	5.4	①	灰黄色	良好	
第21-28	S100	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		16.0	5.5	①	褐色	良好	
第21-29	S100	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		14.8	7.4	①	にじみ褐色	やや不良	
第21-30	S100	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		18.6	11.8	①	褐色	良好	
第21-31	S100	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		14.3	5.1	②	褐色	良好	
第21-32	S100	J6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		8.4	17.4	①	浅黄褐色	良好	
第21-33	S100	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		17.0	13.2	①	灰白色	良好	
第21-34	S100	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		15.6	15.3	①	にじみ褐色	良好	
第21-35	S100	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		11.8	4.8	①	灰白色	良好	
第21-36	S100	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		12.4	4.8	①	にじみ褐色	良好	
第21-37	S100-S104	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		8.1	16.9	①	にじみ褐色	良好	
第21-38	S100-SK1	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		3.1	1.9	①	褐色	良好	
第21-39	S100	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		10.1	5.4	①	にじみ褐色	良好	
第21-40	S100-SK2	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		11.1	7.0	①	灰褐色	良好	
第21-41	S100	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		26.1	2.1	①	にじみ褐色	良好	
第21-42	S100	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		8.8	5.8	①	にじみ褐色	良好	
第21-43	S100	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		13.7	3.3	①	にじみ褐色	良好	
第21-44	S100-SK3	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		11.8	15.7	①	にじみ褐色	良好	
第21-45	S100	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		16.3	7.2	①	にじみ褐色	良好	
第21-46	S100	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		16.7	10.3	①	浅黄褐色	良好	
第21-47	S100	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		—	4.4	①	褐色	良好	
第21-48	S100	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		12.6	15.2	①	にじみ褐色	良好	
第21-49	S100	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		11.1	15.4	①	にじみ褐色	良好	
第21-50	S100	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		11.8	3.6	①	にじみ褐色	良好	
第21-51	S100	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		24.3	20.7	①	灰白色	やや不良	
第21-52	S100	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		13.6	15.1	①	にじみ褐色	良好	
第21-53	S100	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		18.0	13.9	①	褐色	良好	
第21-54	S100	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		9.9	5.9	①	褐色	良好	
第24-1	S100	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		22.8	4.3	①	にじみ褐色	やや不良	
第24-2	S100	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		31.0	5.8	①	褐色	良好	
第24-3	S100	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		26.4	4.1	①	灰白色	良好	
第24-4	S100	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		23.6	4.0	①	にじみ褐色	良好	
第24-5	S100	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		28.2	17.2	①	にじみ褐色	良好	
第24-6	S100	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		28.5	4.3	①	にじみ褐色	良好	
第24-7	S100	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		28.5	6.7	①	にじみ褐色	良好	
第24-8	S100	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		25.3	13.7	①	にじみ褐色	良好	
第24-9	S100-S104	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		26.9	17.1	①	にじみ褐色	良好	
第24-10	S100	K6	Ⅲ	1階-飯盛	内:ヨココシナリ 内:ヨココシナリ		27.4	5.6	①	にじみ褐色	良好	

第4章 東地区の遺構と遺物

探検番号	調査年度	出土遺構	出土遺物	説明	所在地	遺構・出土品・支那など	1区画	2区画	3区画	色澤	形状	備考
探検1716	昭和23	S1000	26	遺		外堀内堀・溝溝・瓦葺・土葺の土間	11.9	17.1	①	灰白・赤褐色	良好	同様(三)
探検1717		S1000	27	遺		内堀内堀とも遺構不明	11.3	2.9	①	灰白・褐色	良好	同様(同様探検1716)に共通
探検1718	昭和23	S1000	28-7	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間・土間	11.7	17.6	①	灰白・褐色	良好	外堀探検(同様探検1716)
探検1719	昭和23	S2000	1.5	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	29.2	18.8	①	灰白・褐色	良好	同様(同様探検1716)
探検1720	昭和23	SK019	27	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	26.9	17.3	①	灰褐色	良好	同様(同様探検1716)
探検1721	昭和23	SK019	27	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	29.4	17.7	①	褐色	良好	同様(同様探検1716)
探検1722	昭和24	SK012	26	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	14.7	12.9	①	灰白・褐色	良好	
探検1723	昭和24	SK009	1.5	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	17.2	14.9	①	灰色	良好	同様(同様探検1716)
探検1724	昭和24	SK009	1.5	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	15.6	15.2	①	褐色	良好	同様(同様探検1716)
探検1725		SK019	27	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	13.0	14.1	①	浅黄褐色	良好	同様(同様探検1716)
探検1726	昭和24	SK019	27	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	16.0	14.6	①	灰白・褐色	良好	同様(同様探検1716)
探検1727	昭和24	SK008	26	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	13.6	14.1	①	黄褐色	良好	
探検1728	昭和24	SK008	26	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	3.1	13.3	①	灰白色	良好	外堀探検(同様)
探検1729	昭和24	SK009	1.5	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	—	14.2	①	灰白色	良好	
探検1730	昭和24	SK009	1.5	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	—	14.2	①	褐色	良好	
探検1731	昭和24	SK009	1.5	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	19.0	15.4	①	灰白色	良好	
探検1732	昭和24	SK019	27	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	17.0	14.1	①	灰白・赤褐色	良好	外堀探検(同様)
探検1733	昭和24	SK009	1.5	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	15.0	14.0	①	灰白色	良好	外堀探検(同様)
探検1734	昭和24	SK012	26	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	16.0	16.0	①	浅黄褐色	良好	
探検1735	昭和24	SK012	26	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	23.4	16.4	①	灰白・褐色	良好	同様(同様)
探検1736	昭和24	SK025	27	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	18.6	12.6	①	灰白色	良好	同様(同様)
探検1737	昭和24	SK029	26	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	27.0	16.1	①	褐色	良好	
探検1738	昭和24	SK008	26	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	11.0	16.0	①	灰白・褐色	良好	
探検1739	昭和24	SK029	26	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	18.0	16.3	①	浅黄褐色	良好	同様(同様)
探検1740	昭和24	SK029	26	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	16.3	9.7	①	灰白・赤褐色	良好	同様(同様)
探検1741	昭和24	SK029	26	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	18.0	17.7	①	褐色	良好	
探検1742	昭和24	SK022	26	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	14.0	15.2	①	浅褐色	良好	
探検1743	昭和24	SK022	26	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	14.4	16.3	①	灰白・褐色	良好	内堀1区に遺構不明(同様)
探検1744	昭和24	SK022	26	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	19.4	16.8	①	灰白・褐色	良好	外堀探検(同様)
探検1745	昭和24	SK022	26	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	20.0	15.1	①	褐色	良好	
探検1746	昭和24	SK027	26	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	15.6	14.9	①	灰白・褐色	良好	外堀探検(同様)
探検1747	昭和24	SK027	26	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	15.6	14.9	①	浅黄褐色	良好	
探検1748	昭和24	SK036	26	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	16.8	17.3	①	灰白・褐色	良好	同様(同様)
探検1749	昭和24	SK036	26	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	17.4	17.4	①	灰白・褐色	良好	同様(同様)
探検1750	昭和24	SK037	27	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	13.0	17.2	①	灰白色	良好	
探検1751	昭和24	SK022	26	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	23.6	19.0	①	浅黄褐色	良好	
探検1752	昭和24	SK022	26	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	21.8	14.7	①	褐色	良好	
探検1753	昭和24	SK036	26	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	24.3	3.8	①	灰白・褐色	良好	同様(同様)
探検1754	昭和24	SK036	26	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	28.0	16.1	①	灰白・褐色	良好	同様(同様)
探検1755	昭和24	SK022	26	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	18.6	15.7	①	灰白・褐色	良好	
探検1756	昭和24	SK022	26	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	16.0	12.4	①	灰白色	良好	
探検1757	昭和24	SK022	26	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	14.4	14.1	①	灰白・褐色	良好	
探検1758	昭和24	SK022	26	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	11.8	16.0	①	浅黄褐色	良好	同様(同様)
探検1759	昭和24	SK007	26	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	18.2	14.5	①	灰白色	良好	外堀探検(同様)
探検1760	昭和24	SK036	26	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	18.8	14.1	①	浅黄褐色	良好	同様(同様)
探検1761	昭和24	SK036	26	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	15.4	15.5	①	灰白・赤褐色	良好	
探検1762	昭和24	SK036	26	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	—	17.3	①	灰白・赤褐色	良好	
探検1763	昭和24	SK036	26	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	13.0	17.0	①	灰白・褐色	良好	
探検1764	昭和24	SK036	26	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	—	14.0	①	浅黄褐色	良好	
探検1765	昭和24	SK036	26	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	15.8	14.1	①	褐色	良好	
探検1766	昭和24	SK036	26	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	—	14.0	①	灰白色	良好	
探検1767	昭和24	SK036	26	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	—	12.3	①	灰白・赤褐色	良好	外堀探検(同様)
探検1768	昭和24	SK036	26	遺	138-1-10	内138-1-10ナド 遺構・土間	—	12.3	①	灰白色	良好	

第4節 銅鐸片 (第31・32図)

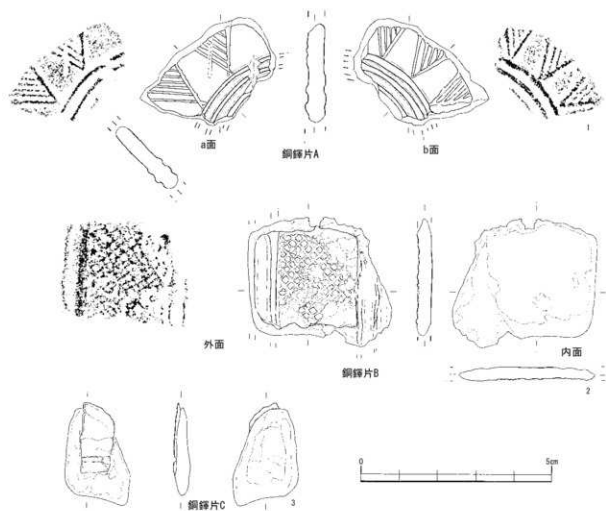
銅鐸片が3点出土しており、鈕の一部(銅鐸片A)と鐸身の一部(銅鐸片B)、そして文様などがなく部位が不明の破片(銅鐸片C)である。鈕と鐸身の破片がSI001(第8図)(図版第2③)から、部位不明の破片がSB006の柱穴付近(第13図)からの出土である。3点とも同一個体である確証はないが、前者の2点は突線鈕式で袈裟襷文銅鐸の破片と考えられる。

銅鐸片A(第31図1)は立ち上がった鈕が頂部へと移行するカーブとなる部分で、周囲がすべて破断面で縁は残されていない。いずれの破断面も割れたままではなく、程度の差はあれ研磨されている。長さ最大3.7cm、幅最大2.3cm、厚み最大で0.4cm、重さ11.74gを測る。両面とも内側に残された突線が3条は存在するが、それ以上に突線があるかは不明である。突線の外側には頂点を接した鋸歯文を巡らすのが、左右両面で異なる。a面(断面図の左側)とした方に鋸歯文が2か所、b面(断面図の右側)とした方には3箇所が確認され、両面の文様はズレて合わない。またb面は突線と鋸歯文ともに断面がつぶれて、文様の一部が研磨された痕跡がある。

銅鐸片B(第31図2)は鐸身の中央縦帯か、横帯の一部かが特定できないので、ここでは前者の可能性が高いと想定して図化した。銅鐸片Aと同様に周囲がすべて破断面で縁は残されていない。台形に近い平面を呈し、長軸3.7cm、短軸3.1cm、厚み最大で0.3cm、重さ12.74gを測る。鐸身外面の二条ある突線との間は2.1cmを測り、斜格子文が充てんされているが、その斜格子文の一部が磨滅して消えていたり、別の付着物があったりしてすべては明確ではない。反対側の内面(文様が鋳だされない内部)は金属器特有の平滑さがなく、のちに述べるような何らかの打撃が加えられた結果、表面が大きく荒れたのであろう。台形の底辺にあたる部分の突線は両端まで途切れることないが、断面に表現できないまで磨滅し、特に2条のうち外側の突線(図の右側)はその痕跡をわずかに残すのみで、明らかなこの縁辺を刃部のように作り出すために研磨されたことによると考えられる。また反対側の突線は2条途切れるように部分的にし確認されない。銅鐸片としては鐸身であることから、本来は内面へ若干なりともカーブするはずであるが、この破片は逆に外面(文様のある面)へ反っている。つまり本来カーブする面とは反対側へ反っていることから、何らかの打撃が加わったものと考えられる。これらの加工の痕跡からも、破片となった銅鐸片を平坦にして刃部を作り出して、再利用する意図があったものと考えられる。

銅鐸片C(第31図3)は周囲がすべて破断面で縁は残されておらず、またどちらが本来の表面かなどもわからないまで表面の残り具合は悪い。ただ一方の面には、長さ1.8cm、幅0.8cmの小さな破片がうろこ状に貼り付いている。平面は三角形形状を呈し、長さ最大2.9cm、幅最大1.8cm、厚み最大0.5cmで、重さ5.41gを測る。

以上、鈕に突線が3条は確認されていること、鐸身に袈裟襷文があることから先にも述べたように、突線鈕3式を含むそれ以降の大型の袈裟襷文銅鐸であるとする以上の判断はできない。しかし残された破片の厚みから突線鈕4式以降ほどは厚みが無く、突線鈕3式である可能性が高い。銅鐸が破片となった時期は不明であるが、廃棄された時期はSI001の床面の土器で判断され、後期でも終末までは降らない(石川県の土器型式の月形式より前の法仏式の範疇)と考えている。ちなみに本遺跡の北西約6kmには、農耕風景や舟・水田の生き物などが表現された銅鐸などの2個が、江戸時代末に出土した旧春江町井向(第1図⑨)がある。また坂井平野では九頭竜川河口の旧三国町米ヶ脇(本遺跡北西約15km)で出土している銅鐸が、日本海側の銅鐸出土地の東限である。



第31圖 銅鐸実測図(縮尺 1/1)



第32圖 銅鐸微細写真(上段銅鐸片A・下段銅鐸片B)

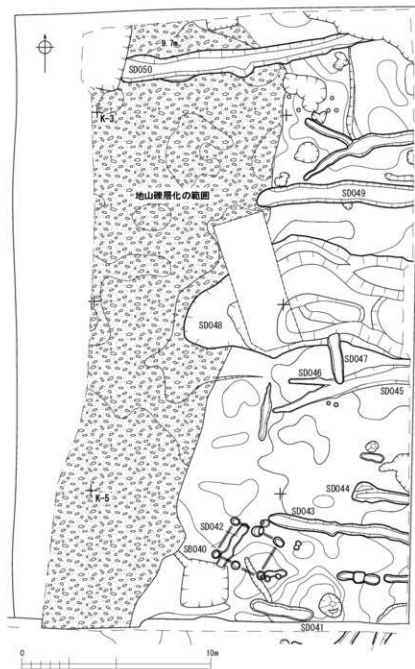
第5節 平成18年度の遺構と遺物 (第33～36図、第2表)

1 調査区の概要

平成18年度の調査は、平成16年度調査区の北側に拡張した調査区にて実施した。平成16年度の調査では、東西に長い調査区のはほぼ中央に南北方向の河道を検出し、その東西両側にそれぞれ複数の建物を確認しており、東地区・西地区としている。平成18年度調査区は東地区の北側に当たる。東地区は銅鐸片の検出された地点でもあることから、類例の増加が期待された。しかし、先の調査状況や試掘調査の結果から、調査地の東側や北側は低地あるいは湿地となり、遺構などが希薄となることが確認されており、集落域の北端に近いことが予想された。結果として、調査区の位置が東地区建物群北端から北へ外れた部分であり、掘立柱建物1棟と玉作りに関わる遺物などを検出したのみであったため、一連の弥生時代後期～終末の玉作りに関わる集落の北限付近に当たるものと見られる。

調査区は、現状で水田に利用されており、水田耕作土の下層に、遺物を包含する暗褐色粘質土が0.2m前後の厚みで展開する。包含層中の遺物は、比較的多くの土器片と、僅かではあるが管玉片や原石剥片などの玉作関連遺物を確認した。また、量的には少ないが越前焼や染付けの細片の混入が確認された。遺構検出面は、標高約9.75mでほぼ水平に揃うが、重機の痕跡が多く残る。これらのことは、圃場整備の際に、遺構面が削平され、包含層がかき混ぜられたことを示している。

遺構面を形成する土壌は、淡黄灰色粘質土であり、遺構検出面下0.5～0.9mの厚みで展開する。その下層に厚さ0.5m前後の鉄分を含む砂層があり、さらに準大あるいは人頭大までの円礫を多量に含む砂礫層に至る。下層に見られる砂層・砂礫層は、過去



第33図 平成18年度調査区遺構図 (縮尺 1/200)

の九頭龍川をはじめとする河川の営みに起因する堆積と考えられる。なお、調査区西側の大半には遺構の構築される淡黄灰色粘質土が展開せず、分厚い砂礫層が露出する。この砂礫層は、下層に認められる砂層・砂礫層とは異質であり、その砂層を挟り込む状況である。地震（とくに1948年福井震災）による影響もあるであろうが、下層の砂礫層を形成したものと異なる段階の河道の痕跡であると考えられる。なお、平成16年度検出の河道は、その位置関係から上層の砂礫層と一連となるようであり、遺跡の形成時には既に埋没していたようである。

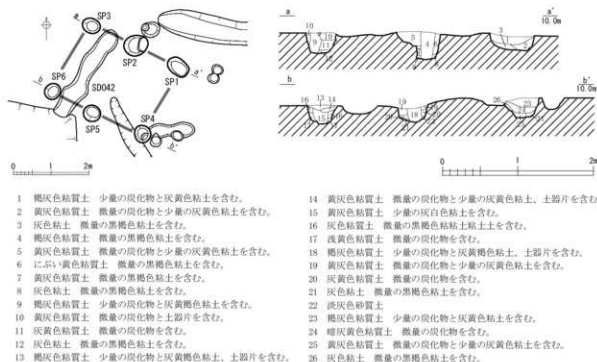
2 遺構

検出した遺構は、おもに東西方向に延びる十数条の溝状遺構であり（第33図）、それらの規模は幅0.5～1m、長さ2.5～15mである。以下、主要な遺構について評述する。

SB040(第34図) SB040は、J5～K5グリッドにまたがって位置する、6基の柱穴からなる建物である。側柱建物と捉えるならば、桁行約2.8m、梁行2m前後、床面積約5.6㎡となり、桁行方向は西北西～東南東である。ただし、柱穴6基のうち東側の2基(SB040-1・4)は、埋土の土層断面に木柱根の痕跡が明瞭でない。他の4基の柱痕は明瞭に確認されることから、その2基(SB040-1・4)は建物に付属するとしても主柱穴とは性格の異なる可能性がある。その場合、主柱で支えられる空間は2m×1.2～1.5mとなり、東側に簡易な支柱による大きな軒が取り付く建物が推測される。遺物は、各柱穴の埋土や覆土中から土器細片が出土しており、高坏脚部1点を図示した(第36図23)。

なお、SD042は、SB040の主柱に囲まれる部分の長軸線上に沿って位置することから、この建物に関連する可能性がある。SD042の規模は、検出長約2.7m・幅0.4～0.6m・深さ0.1～0.17mである。

SD043(第33図) SD043は、K5グリッドに位置し、一部J5グリッドに入る。東西方向に延び、東端は調査区外へ続く。規模は検出長7.5m・幅0.5～0.7m・深さ0.25mである。SD043の埋没後、検出部分のほぼ中央と東端付近に土坑が掘られている。東側の土坑は長径0.67m・短径0.6m・深さ0.22mであり、西



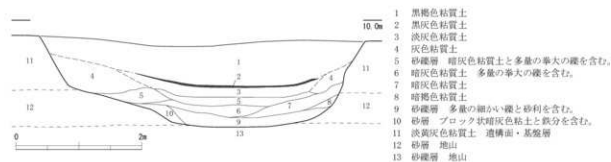
第34図 SB040 実測図（縮尺1/100・土層断面図1/50）

側の土坑は長径0.65m・短径0.58m・深さ0.25mである。ちょうど布掘り状となるが、どちらの土坑にも柱根痕跡は確認されなかった。遺物は、SD043および西側の土坑から土器片が出土しており、SD043出土の甕2点・壺1点、西側土坑出土の甕1点を図示した(第36図1~4)。

SD045~47(第33図) SD045~47は、K4グリッドに位置する。SD045は、西南西~東南東の方向に延びる。規模は、検出長約7.5m・幅0.25~1m・深さ数cm~0.5mである。SD046は、東西方向に延びてSD045に至る。検出面での規模は、長さ2.5m・幅0.3m前後・深さ数cm~0.4mである。SD047は、南北方向に延びており、南はSD045に至り、北はSD048に開放する。規模は延長約2.7m・幅0.6m前後・深さ0.4m前後である。これらは重複し、その関係からSD045が最後に構築されたことが分かる。SD046とSD047の先後関係は不明だが、埋土の状況に共通する部分が多く、同一遺構である可能性がある。その場合、西から北へほぼ直角に方向を変える溝となる。遺物はいずれの溝からも土器細片が出土している。SD045出土の甕・壺・台付壺・高坏2点(第36図9・16~19・21)、SD046およびSD047出土の壺を図示した(第36図6)。

SD048(第33図) SD048はJ3~4・K3~4にまたがって位置する。調査区の中央から東へ延びており、調査区外へと続く。西端は南北に延びる河道の痕跡と見られる砂礫層を一部削り込む。規模は検出長約12m・最大幅6m・深さ1.3mである。調査区東端での堆積状況(第35図)によると、下層の砂層(12層)・砂礫層(13層)の上に厚さ0.8~0.9mの基盤となる層(11層)があり、それらの層の境に地震による影響が認められる。すなわち、SD048北岸の基盤層が1m以上北側に引張りられるように移動し、その影響で砂礫など(5・6層)が堆積土層間に吹き出した状況が認められる。南岸の基盤層(11層)もやや北側に移動し変形しているが、堆積土に抑えられ留まる。このため本来の幅は少なくとも1m程度は狭かったものと見られる。最下層に堆積する砂礫層(9層)は12・13層とは異なり西側の河川痕跡内に見られるものに近いため、SD048が開削している間に西側から崩落・流入して堆積したもののようである。そして、灰色粘質土など(3・7・8層)により徐々に埋没した後、しばらく開口したままとなり、最後に黒褐色粘質土(1層)により一度に埋没する。SD048は堆積土中に多くの土器細片を含むことから廃棄土坑として利用されたことが推測されるが、確定的ではなく、当初より人為的に開削されたか否かも不明である。遺物は、最下層の砂礫層など以外から多量の土器片が認められたが、大半が細片である。そのうち、甕・高坏2点・器台・台付鉢・注口を図示した(第36図5・7・8・10・12・15)。

SD050(第33図) SD050は調査区北端のJ2・K2グリッドにまたがって位置し、ほぼ東西方向に延びる。検出長13.5m・幅0.7~1.4m・深さ0.37mである。遺物は、多くの土器細片を含んだが、甕口縁2点を図示した(第36図13・20)。

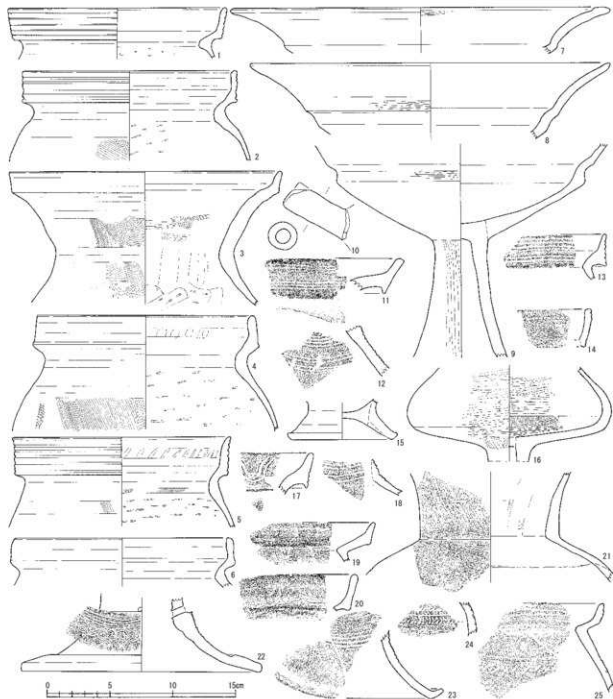


第35図 SD048 土層断面図(縮尺 1/60)

3 遺物

ここでは溝などの遺構出土の土器を中心に甕9点、壺7点、高坏3点、器台1点、脚4点、鉢か壺の脚台1点の合計25点を図化した(第36図)。図化できた遺構数も土器の数もそれぞれ少なく、すべての土器についてまとめて説明していく。

甕は9点あるが基本的に口縁がほぼ直立するもので、擬凹線文があるもの5点(第36図1・2・5・13・25)、無文のもの4点(第36図4・6・19・20)で、うち前者の1点(第36図25)の肩部に刺突列点文がある。また口縁内面に指頭連続圧痕があるのは9点の甕のうち2点(第36図4・5)と少ない。壺には



第36図 弥生土器実測図(縮尺 1/3)

緩く開く頸部から口縁が有段に立ち上がるもの(第36図3)、胴部から「く」の字に屈曲して頸部となるもの(第36図21)、下影れの丸い胴部に脚台がつくもの(第36図16)など一部でも器形わかるものは少ない。このほかは壺と考えられる破片である。口縁部片は有段に櫛描の波状文があるもの(第36図17)や刺突列点の間にS字スタンプ文があるもの(第36図14)である。胴部片(第36図24)には沈線を挟んで羽状の刺突を連続する。また壺で注口土器の注口の一部もある(第36図10)。高坏は口縁端部内面が肥厚するもの(第36図7)と、坏部が有段に屈曲して大きく開くもの(第36図8・9)である。器台として明確なものはないが、有段の口縁帯が下へも延びるもの(第36図11)か、口縁であろう。高坏、もしくは器台の脚となるものは、有段となると判断されたものに文様があるため、破片も含めていくつか図化した。数本の沈線の間にS字スタンプ文(第36図23)や刺突列点(第36図18)が連続するものはこの時期に通用のものと考えられるが、扇形文を充填するもの(第36図12)の類例は知らない。脚端部外面に幅広の粘土帯を貼り付けるもの(第36図22)の類例はあるものの少ない。脚台は鉢か壺のもの(第36図15)であろう。

以上、ここで図化した土器は16年度東地区の堅穴住居などとほぼ同じ時期、北陸の土器標識である法仏式から月影式の過渡期的ものである。それぞれの遺構で図化できたものが少なかったこともあるが、土器からは遺構についての時期差は顕著には見当たらない。

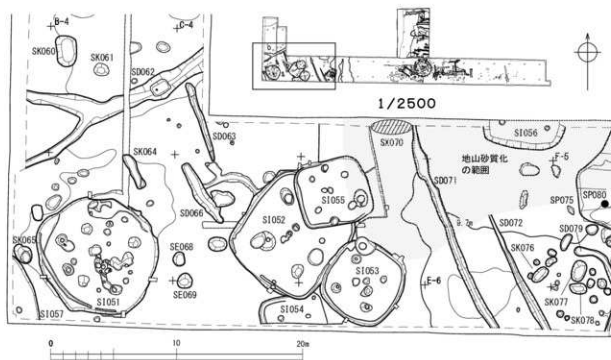
第2表 弥生土器観察表(平成18年度東地区)

調査番号	調査番号	出土遺構	タイプ	部類	説明	調査・注目・支那など	1面/2面 面積(cm ²)	形状	色澤	産地	備考	
第36図1	SE043	1.5	壺	1面-頸部	外-有段の幅内高3条 頸部-ナダ	内(1)面: 頸部 ココナダ	17.4	③	にんべん褐色	良好		
第36図2	1.3	壺	1面-頸部	外-2段に付けた幅内高3条 頸部-ナダ	頸部: ランダムなウツ	—	17.1	①	にんべん褐色	良好	内縁縁付帯(1面-頸部)	
第36図3	図録第24	SE043	1.5	壺	1面-頸部	外(1)面: ココナダ 頸部: ナダ+ハタのちナダ 内(1)面: ココナダ 頸部: ココナダ+タコズリ+タコズリ+タコズリ	—	17.1	①	灰黄色	良好	内縁縁付帯(頸部-頸部)
第36図4	図録第24	SE043	1.5	壺	1面-頸部	外(1)面: 頸部 ココナダ 頸部: ココナダ+ハタのちナダ 内(1)面: ナダ+有段内高3条 頸部: ココナダのちナダ 頸部: ココナダ	—	16.0	①	灰白色	良好	
第36図5	SE048	壺	1面-頸部	外: 丸い口の幅内高3条 頸部: ナダ 頸部: ハタのちナダ 内(1)面: ナダ+有段内高3条 頸部: ココナダのちナダ 頸部: ココナダ	—	17.2	17.2	③	にんべん褐色	良好	内縁縁付帯(頸部)	
第36図6	SE048 SE047	1.4	壺	1面-頸部	外(1)面: 頸部 ココナダ 内(1)面: ココナダ 頸部: ココナダ	—	17.0	13.9	③	赤褐色	良好	内縁縁付帯
第36図7	SE048	図録	有段	外: 外縁上と下にタコズリ	—	20.0	1.8	③	にんべん褐色	良好		
第36図8	SE048	図録	有段	外: タコズリ	内: 産成不詳	—	28.2	4.0	③	にんべん褐色	良好	
第36図9	図録第24	SE043	1.4	有段	外: 外縁 外: 外縁 ココナダ 頸部: タコズリ	内: 産成不詳	—	—	①	良好		
第36図10	SE048	図録	注口	注口	外: 産成不詳 内: はり不詳	—	15.4	①	褐色	良好		
第36図11	SE044	図録	有段	外: 外縁 外: 外縁 外: 外縁 外: 外縁	内: 産成不詳	—	26.0	1.8	③	にんべん褐色	良好	
第36図12	SE048	壺	頸部	頸部	外: 注口4条+有段内高3条+タコズリ 内: ハタのちナダ	—	1.4	①	にんべん褐色	良好		
第36図13	SE050	壺	1面-頸部	外: 幅内高3条 頸部: ナダ 内(1)面: 頸部 ナダ 頸部: ココナダ	—	18.0	13.6	③	浅黄褐色	良好		
第36図14	SE049	1.3	壺?	1面	外(1)面: 平円筒型頸部付立文+タコズリ+タコズリ+タコズリ+タコズリ 内(1)面: ココナダ 頸部: ココナダ	—	20.0	1.0	①	にんべん褐色	良好	
第36図15	SE048	脚台	底面-脚部	外: 底面-脚部 外: 底面-脚部 ナダ+有段内高3条 内: 底面-脚部	—	7.8	3.2	③	にんべん褐色	良好		
第36図16	図録第24	SE043	1.4	壺	頸部-脚部	外: 頸部: ココナダ 頸部: ナダ+タコズリ 内: 頸部: ココナダ 頸部: ナダ+タコズリ+タコズリ+タコズリ+タコズリ	—	7.4	①	浅黄褐色	良好	底面: 産成不明(外高3条+有段内高3条+タコズリ)
第36図17	SE045	1.4	壺?	1面	外(1)面: ナダ+幅内高3条+有段内高3条 内(1)面: ナダ	—	13.2	①	褐色	良好		
第36図18	SE045	1.4	壺	頸部	外: 注口3条+有段内高3条+有段内高3条+有段内高3条+有段内高3条 内: ナダ	—	12.0	①	にんべん褐色	良好		
第36図19	SE045	1.4	壺	1面-頸部	外(1)面: 頸部 ココナダ 内(1)面: ココナダ 頸部: ココナダ	—	20.0	15.1	③	褐色	良好	
第36図20	SE050	壺	1面	1面	外(1)面: 外縁 外: 外縁 外: 外縁 外: 外縁 内(1)面: 頸部 ココナダ 頸部: ココナダ	—	16.0	12.8	③	にんべん褐色	良好	内縁縁付帯(1面)
第36図21	SE043	1.4	壺	底面-脚部	外: 底面 外: 底面+ナダ 外: 底面+ナダ 内: 底面+ナダ 内: 底面+ナダ	—	18.7	③	灰白色	良好		
第36図22	図録第2	K2	壺	脚部	外: 注口4条+有段内高3条+有段内高3条+有段内高3条 内: ナダ	—	14.0	①	にんべん褐色	良好	外高3条?	
第36図23	SE49-5977	K3	壺	頸部	外: 注口3条+有段内高3条+有段内高3条+有段内高3条 内: ハタのちナダ	—	15.4	③	浅黄褐色	良好		
第36図24	図録第2	K2	壺?	頸部	外: ナダ+幅内高3条 頸部: ナダ 頸部: ココナダのちナダ+ナダ 内(1)面: 産成不明	—	12.8	①	にんべん褐色	良好		
第36図25	図録第2	K4	壺	1面-頸部	外(1)面: ナダ 頸部: 産成不明	—	14.0	17.0	①	灰白色	良好	内縁縁付帯(頸部)

第5章 西地区の遺構と遺物

第1節 西地区の概要 (第37・38図)

西地区ではL字屈曲部のSI051とその東にSI052・053・054・055の4棟が重複して検出された。SI051の北には東西からやや北へ中心軸を振った溝SD062があるが、検出面が18年度調査区と東端で確認した地山の落ち込み9.5mに併行する。これより北にはSK060など数基の土坑・土器集中出土地点とビットしがなく、この溝がほぼ集落の北端を示すものと言えよう。SI051の西は1mほどで調査対象範囲外となるが、その間の調査区南西隅にかかるように弧状に土坑が検出され、堅穴住居(SI057)の可能性が高い。このような住居群の東には南北からやや西へ軸を振った幅の狭い溝2条(SD071・072)が平行し、その間は約3mを測る。さらに旧河道との間には、L字状の溝(SD079)を中心に土坑(SK076・077・078)やビットが集中し、堅穴住居以外のなんらかの居住の痕跡を求めることができる。旧河道の西側ではさらにビットなどの遺構がその肩にまで及び、その肩口には、土器もまとも出土している(SP075・080)。この集落の廃絶までに流路に削られるような時間があった想定される。西地区については東地区よりも堅穴住居の平面プランが判然としなかった。そこで途中からではあったが、調査区のほぼ中央に土層観察用のセクションベルトを残し、断面を確認しながら遺構の把握を行った。SI051については南側の壁は地山に縦く立ち上がることを確認したが、北と東の壁は明確には確認できなかった。SI052・053・054・055は2棟ほどの堅穴住居の切合いを想定していたが、結局4棟の切合いとなった。このように遺構の検出に困難を極めた理由は、C5からF5グリッドの調査区北側を中心に地山が砂質であることによる。これを集落廃絶後の地震による液状化によるものと考えるか、砂質の地山のところに遺構を掘削したのかは、まだ十分な検討を行っていないのでいずれかは決めかねる。しかしSI053・055の北側から東側の床面と壁が砂質であることや、SI056は完全に周辺の地山が砂質の範囲に掘削され、SX070は砂質中の粘質土に囲まれて多数の土器がまとも出土していることは、遺構の立地を考える上で欠くことのできない事実である。

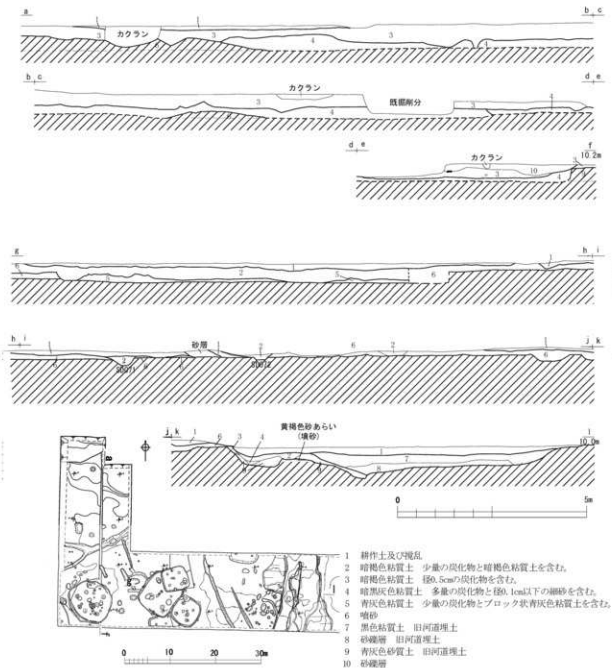


第37図 西地区主要遺構図 (縮尺 1/300)

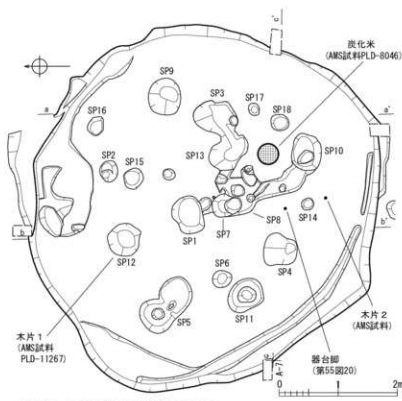
また東地区と同じく、西地区も調査区の概要で述べた中近世の井戸以外の小さなピットから出土する土器は、すべてここで取り上げたような弥生時代後期の土器の破片が出土している。北側の集落縁辺部の落ち込み、または東側の旧河道でもそれ以外に時期の土器は確認していない。つまり最初の概要で述べた中近世の井戸以外の遺構はすべて弥生時代後期と考えられる。

第2節 西地区で検出された遺構（第38～54図）

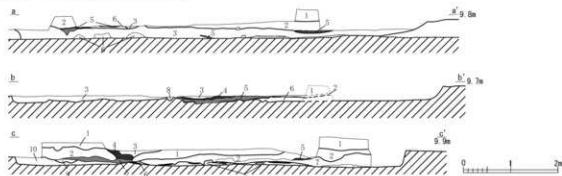
SI051(第39図) A6・7からB6・7グリッドにかけて位置し、平面形は不整形な楕円形を呈する。南西の壁が1ヶ所だけ角があり、壁から50cmほど離れて、幅30cm前後の溝が10mほど弧状に伸びることから、本来は隅丸方形か円形であったのが、多角形に建て替えられて不整形になったものと考えられる。ま



第38図 西地区南北・東西トレンチ図（縮尺 1/100）

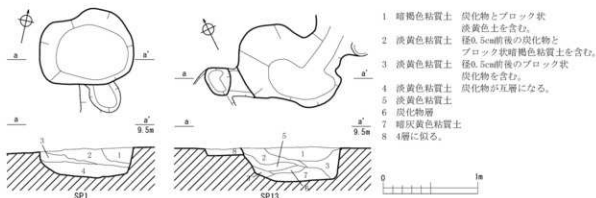


第39図 SI051 実測図 (縮尺 1/100)



- | | |
|----------------------------|--|
| 1 暗黒褐色粘質土 | 6 暗灰黄褐色粘質土 少量の炭化物を含む。 |
| 2 暗褐色粘質土 少量の炭化物を含む。 | 7 暗褐色粘質土 少量の炭化物を含む。 |
| 3 暗褐色粘質土 少量の径0.5cmの炭化物を含む。 | 8 暗褐色粘質土 SI051覆土 |
| 4 炭化物層 | 9 暗褐色粘質土 SI051堆設後覆土 |
| 5 暗褐色粘質土 多量の炭化物と焼土を含む。 | 10 暗褐色粘質土 少量の炭化物とブロック状
灰白色粘質土を含む。SI051堆設後覆土 |

第40図 SI051 土層断面図 (縮尺 1/80)



第41図 SI051内SP1・13 実測図 (縮尺 1/40)

先に述べたように北と東の壁の立ち上がりが判然とせず、途切れる壁溝や床面に広がる炭化物などの散布などを頼りに床面を広げて壁を決めたこともその一因にあると考えられる。東西長9.4m、南北長9.0mを測る。壁高は深いところで確認面から約30cm残り、北側では削平を受けたためやや浅くなる。立ち上がりは東西で垂直に近いが、他では緩やかである。床面は標高9.3m前後にあり、ほぼ平坦である。炉跡と想定される土坑は1基が建物の中心に、もう1基は建物の中心より東側にずれたところに位置する。前者のSP1(第41図)は長軸0.97

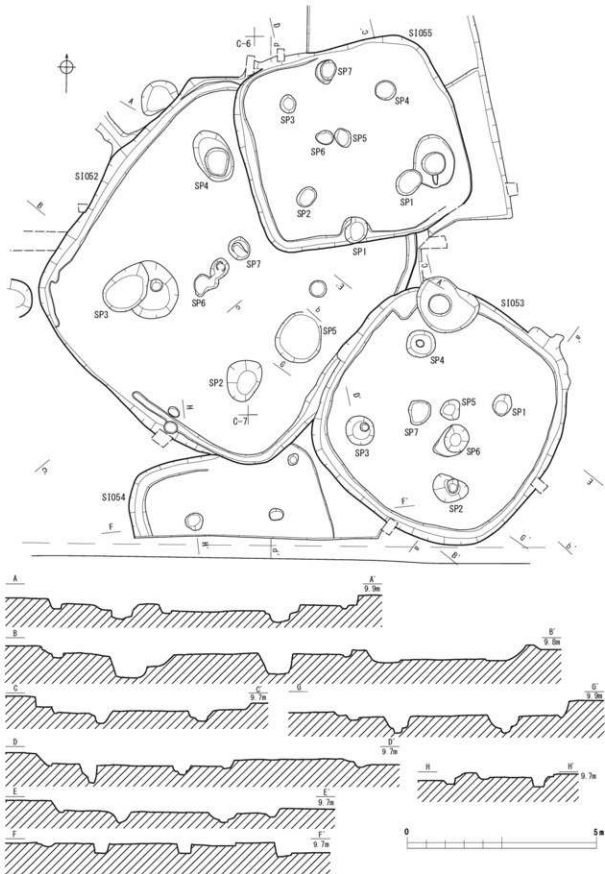
m、短軸0.7m、深さ0.3mを測る。後者のSP13(第41図)は長軸1.12m、短軸0.7m、深さ0.34mを測る。これらの土坑の周辺では大量の炭化物や焼土が確認されている。柱穴は4本柱とすると、2組の柱穴群が想定される。柱穴群1としてSP9～12の径約0.76～1.1m、深さ約0.45～0.5mを測る4本と、柱穴群2としてSP2～5の径約0.5～0.9m、深さ約0.4～0.6mを測る4本である。覆土全体から土器が出土し、多くの土器を図化した。床面近くで出土したものは器台の脚部の1点(第55図20)である(図版第10⑤)。

SI052・053・054・055(第43図) SI052から055の4棟の住居はSI052を中心として切り合うか、接している。土層観察用に残したセクションベルトでは、SI052の覆土に食い込むようにして、SI054の立ち上がりが明確に確認されたのと、SI053の覆土がSI052の覆土の上層に広がることが伺えた2点のみで、その他の住居の切りあいは土層では確認されなかった。その理由として、SI055の南側には井戸があり、この井戸を中心に液状化して、切り合うSI052の断面層序が不明瞭となったことなどが挙げられる。このような状況からこの住居について明らかなことは次のとおりである。SI053の壁はSI052の壁溝をつぶしていること、明確ではないが先のセクションの状況から、SI052が古く、その廃絶後にSI053がある。またSI052の北壁を大きく浸食するように、SI055があることから、後者が新しいことは間違いない。またのちに述べる土器からはSI052から出土した土器が最も古く、SI055から出土した土器が最も新しい。SI053とSI054からは出土した土器は少ないがその両者ともSI052とSI055の間に納まりそうな時期の土器である。住居の平面形の時期の変遷が隅丸方形から小型の方形である傾向を考えれば、これからこの4棟の住居の時期はSI052が最も古く、その次にSI053で、SI054がSI055と並存するか、SI055が単独で新しくなると考えられる。

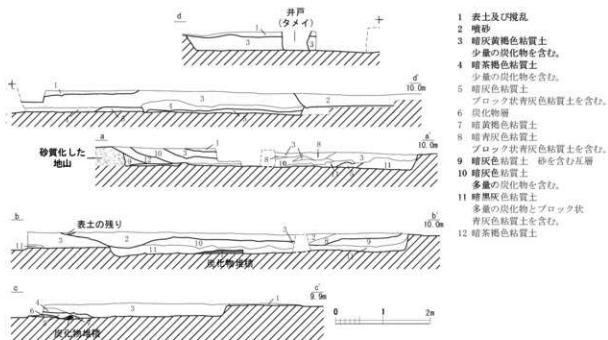
SI052(第42図) C6・7からD6・7グリッドにかけて位置し、平面形は長軸を北東から南西とする隅丸長方形を呈する。長軸で8.1m、短軸で7.6mを測る。壁高は確認面から約28cm残る。北東壁をSI055に切られ、南東の壁際をSI053に切られる。壁の立ち上がりは垂直に近い。壁溝は約22～55cmで深さ約10cmである。床面は標高9.5m前後に位置し、床面はほぼ平坦である。炉跡と想定されるものは小さいが中心に2基ある。ほぼ中心に位置する円形の土坑(SP7)は長軸0.58m、短軸0.52m、深さ0.1mを測る。その南に瓢箪形の土坑のSP6(第44図)があり、長軸1.14m、短軸0.44m、深さ約0.2mを測る。柱穴と考えられるもの(SP1～4)は径約0.95～1.45m、深さ約0.4～0.5mを測る4本で、西側の2本(SP3・4)には拡張か掘り直しの可能性がある。東側の柱穴間の壁近くに楕円形の土坑のSP5(第45図)があり、長軸1.38m、短軸1.19m、深さ0.2mを測る。この土坑から壺などがまとまって出土している(図版第11④)。また床面でも装飾器台などが出土し、覆土出土のものあわせて多くの土器が図化できた。

SI053(第42図) D6・7グリッドに位置し、平面形は隅丸方形を呈し、一辺6.2mを測る。壁高は確認面から約42cm残る。北側隅を後世の井戸に切られる。立ち上がりは垂直に近い。壁溝は幅約30～45cmで、深さ約5～10cmを測る。床面は標高9.2mにあり、床面は南側にやや下がる。ほぼ中央に不整形の土坑が3基(SP5～7)あり、この周辺で炭化物が大量に確認されたことから炉跡と考えられる(第44図)。それぞれの大きさは、SP5が長軸0.52m、短軸0.48m、深さ0.26mを、SP6が長軸0.90m、短軸0.66m、深さ0.28mを、SP7が長軸0.66m、短軸0.60m、深さ0.08mを測る。柱穴(SP1～4)は径約0.48～0.9m、深さ約0.3～0.5mを測る4本である。この住居は井戸のある北側の壁を中心として、液状化のため地山が砂質となっている。この住居からの土器の出土は少なく、図化できたのも破片の数点である。

SI054(第42図) CD7グリッドに位置し、北側半分程度が検出された。方形を呈し、東西の一辺が5.0mを測る。壁高は確認面から約5～10cmが残る。壁の立ち上がりは残りが悪いが、ほぼ垂直に近いと推定



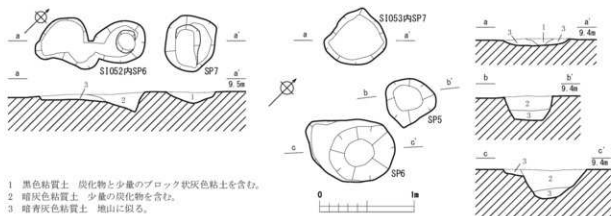
第42図 S1052・S1053・S1054・S1055 実測図 (縮尺 1/100)



第43図 SI052・SI053・SI054・SI055 土層断面図 (縮尺 1/80)

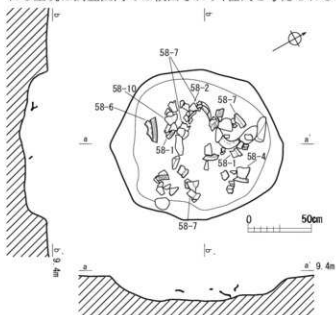
される。壁溝は西側でよく残り幅40cm前後で深さ約5cmを測る。床面は標高9.6mに位置し、ほぼ平坦である。炉跡と考えられるものは調査区内には検出されず、柱穴も調査区内で径約0.3~0.45m、深さ約0.3mを測る2本のみが検出された。この住居も土器の出土は少なく、図化できたのも破片の数点である。

SI055(第42図) D6グリッドに位置し、平面形はほぼ方形を呈し、東西長5.7m、南北長5.2mを測る。壁高は深いところで確認面から32cmほど残り、南東隅において中世の井戸に切られる。立ち上がりは南側で垂直に近いが、他では緩やかである。壁溝は南西側のみ検出され、幅20~42cm、深さ約5~10cmを測る。床面は標高9.4mに位置し、ほぼ平坦である。柱穴間に2基(SP5・6)と、北壁際の真ん中に1基(SP7)の土坑があり、SP5が長軸0.55m、短軸0.4m、深さ約0.1mを、SP6が長軸0.45m、短軸0.35m、深さ約0.1mを、SP7が長軸0.6m、短軸0.5m、深さ0.2mを測る。柱穴(SP1~4)は4本確認され、径約0.4~0.75m、深さ約0.3~0.5mを測る。この住居は井戸のある東側半分の地山が砂質となっており、北西の壁や壁溝が不明瞭であるのは、ここに大きな理由があると考えられる。この住居の床面から甕・壺・高坏・小型器台(第46図)など、この調査で最も新しい一括資料の一群が出土している(第60図)。



第44図 SI052内SP6・7、SI053内SP5・6・7 実測図 (縮尺 1/40)

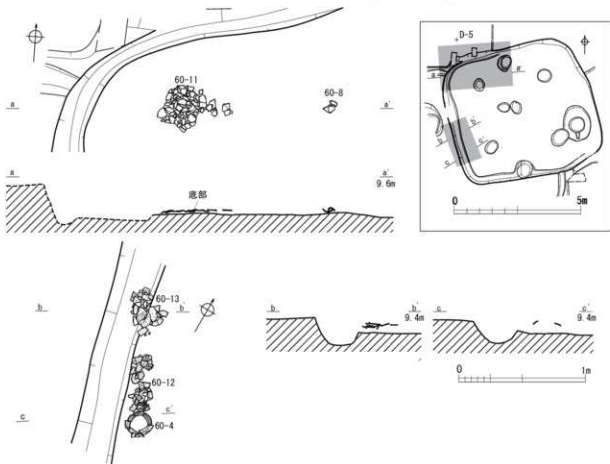
SI056(第47図) EF 5グリッドに位置し、検出されたのが南側壁のみのため、平面形は確定できないが南辺が少しふくらみをもつので、小判形か隅丸方形と推定される。その南辺は東西6.4mを測る。壁高の立ち上がりは緩やかで、確認面から約42cmを残す。床面は標高9.1mに位置し、ほぼ平坦である。炉跡と考えられる土坑は調査区内では検出されず、柱穴と考えられるのは径0.49m、深さ0.38mを測る2基(SP1・2)で、そのうち1基(SP2)は調査区の壁にかかり、半分を検出したのみである。この住居周辺は全体に砂質化した地山で、壁や床面など明確なものではない。土器も少なく、覆土から出土した2点のみ図化できた(第73図16・17)。



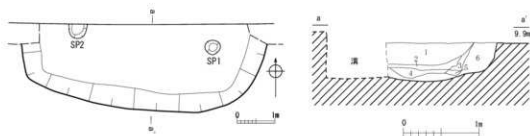
第45図 SI052内SP 5 土器出土状況図 (縮尺 1/30)

で、そのうち1基(SP2)は調査区の壁にかかり、半分を検出したのみである。この住居周辺は全体に砂質化した地山で、壁や床面など明確なものではない。土器も少なく、覆土から出土した2点のみ図化できた(第73図16・17)。

SI057 SI051の西側のA6・7グリッドに位置し、その大部分は南西の調査区外へ広がりがり、そのため平面形は不明であるが、立ち上がりが弧状に巡ることから、小判形か隅丸方形の堅穴住居と推定される。検出された弧状の大きさは東西長2.2m、南北長5mを測る。壁高は10cm以下で、床面と想定される標高は9.37mに位置する。炉跡や柱穴と考えられる土坑や柱穴は確認されなかった。出土した土



第46図 SI055 床面土器出土状況図 (縮尺 1/30・全体図 1/150)



- 1 暗灰褐色粘質土 多量の炭化物を含む。
 2 暗灰色粘質土 少量の炭化物を含む。
 3 青灰色砂質土 粗砂を含む。全体に互層になる。(噴砂の影響か)
 4 暗青灰色砂質土 全体に互層になる。(噴砂の影響か)
 5 暗灰色砂質土 少量の炭化物を含む。
 6 灰褐色粘質土

第47図 SI056 実測図(縮尺 1/100・断面図 1/40)

器は少なく、図化できたのは蓋1点(第61図17)のみである。

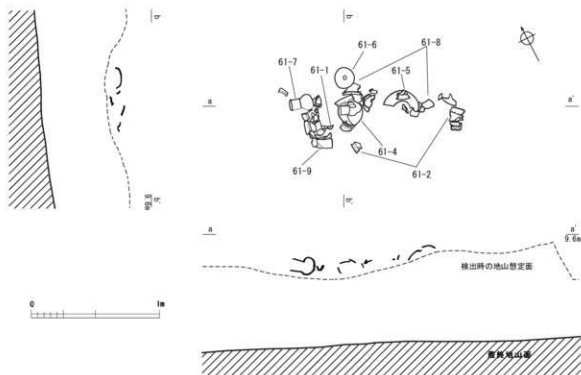
SX058(第48図) B4グリッドに位置し、集落縁辺部への落ち込みにまともに出て出土した土器群である。遺構としての明確なプランは確認されなかった。甕や台付壺などの完形に復元できた土器がまともに出て出土し(図版第14③)、その範囲は不整形な楕円形に広がり、長軸12.36m、短軸5m、その中心は標高9.4m付近に位置する。

SX059 B・C4グリッドに位置し、集落縁辺部への落ち込みにまともに出て出土した土器群である。

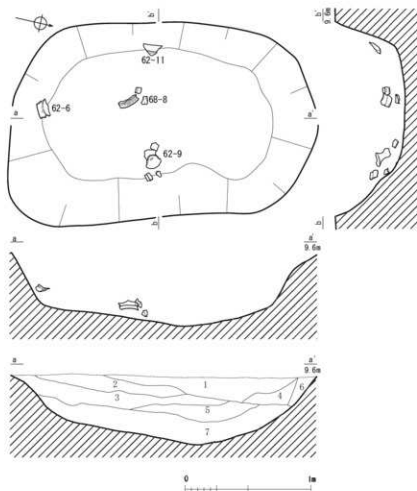
SK060(第49図) B5グリッド、二股に分かれたSD062の北に位置する。ほぼ南北に長軸となり平面形が隅丸方形を呈し、長軸2.46m、短軸1.55mで深さ0.53mを測る。上層の覆土では土器の出土がほとんどなく、底面近くで甕や高坏などの破片が出土している(図版第14④)。井戸であった可能性を残す。

SK061 B5グリッド、SD062の北に位置する。平面形は楕円形で、長軸1.17m、短軸1mで深さ約0.3mを測る。出土した土器は少なく、図化できたのは壺の口縁部1点である(第61図16)。

SD062(第50図) A・B・C5グリッドに位置し、調査区を東西に横切る溝である。西側で二股に分岐し

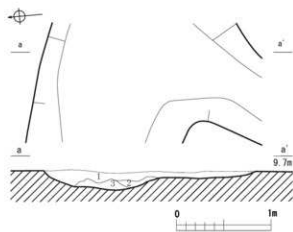


第48図 SX058 土器出土状況図(縮尺 1/30)



- | | |
|-----------|------------------------|
| 1 暗灰色粘質土 | 少量の炭化物を含む。 |
| 2 暗灰色粘質土 | |
| 3 暗灰色粘質土 | 中量の炭化物を含む。 |
| 4 暗黒灰色粘質土 | 土器片を含む。 |
| 5 暗黒灰色粘質土 | ブロック状青灰色粘質土と多量の炭化物を含む。 |
| 6 暗灰色砂質土 | 地山崩壊土 |
| 7 暗黒灰色粘質土 | 中量の青灰色粘質土と多量の炭化物を含む。 |

第49図 SK060 土器出土状況図・土層断面図 (縮尺 1/30)



- | | |
|----------|---------------------|
| 1 暗褐色粘質土 | 少量の炭化物を含む。 |
| 2 暗褐色粘質土 | 少量の礫0.5cm前後の炭化物を含む。 |
| 3 暗褐色粘質土 | 多量の礫0.1cm前後の砂粒を含む。 |

第50図 SD062 実測図 (縮尺 1/40)

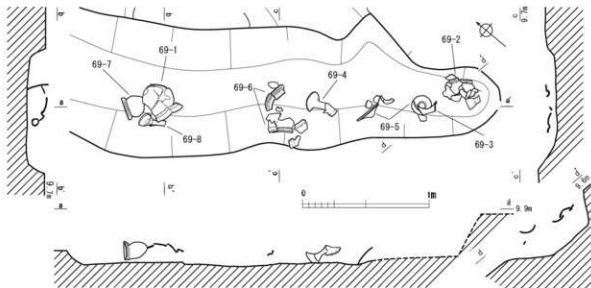
で、調査区外の西に延びる。検出された長さは約17m、幅0.6m～2.2m、分岐するところで深さ0.18mを測る。標高は調査区の西側で二股に分岐した北溝が9.4m、南溝が9.25m、ほぼ中央で9.27m、東端で9.32mとなり、東から西の南溝へ低くなる。しかし溝は浅い上に、少なくとも調査区の範囲では土器が覆土の土より多い、つまり溝の上から底まで土器が充満した状況で出土している。この覆土全体に炭化物が含まれて(第50図)、水が流れていたとは考えられない。つまりある時期に集落域を区切る区画溝であったと考えられる。この溝から出土した土器は多数復元され、図化できた土器も多数ある。

SD063 C5グリッドに位置し、SD062の南側に延びる溝である。長さ6.6m、幅0.5m前後、深さ0.2mを測る。出土した土器は少なく、図化できたのは注口の一部の1点である(図61図13)。

SK064 B6グリッドに位置し、平面形が短い溝である。長軸3.02m、短軸0.66m、深さ0.2mを測る。出土した土器は少なく、図化できたのは有孔鉢の底部1点(図61図15)である。

SK065 A6グリッドに位置し、平面形は楕円形を呈する。長軸0.76m、短軸1.24m、深さ約0.4m程度を測る。土器の出土は多くはないが、甕の口縁部などやや大きな破片が出土した。

SD066(第51図) C6グリッドに位置し、SI052の西側に独立した溝である。長さは5.6m、幅1.07m、深さは南側で最も深くなり深さ0.22mを測る。断面は横長の逆台形を呈す。この溝からは甕・高坏など完形



第51図 SD066 土器出土状況図 (縮尺 1/30)

近くになる土器が多く出土した(図版第13①~⑥)。

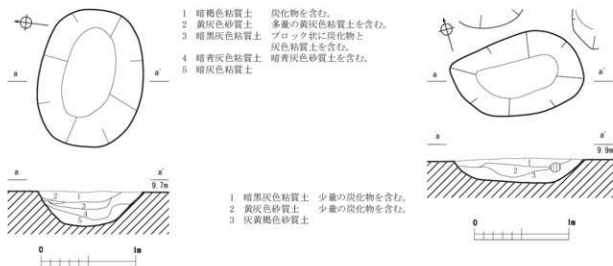
SE067(第52図) C6グリッドに位置し、平面形は小判形を呈する。長軸1.46m、短軸1.1m、深さ0.36mを測る。地山の湧水帯に達していないが、井戸であったとも考えられる。完形となる甕が1点出土している(第69図9)。

SE068 C6グリッドに位置し、平面形は小判形を呈する。長軸1.14m、短軸0.94m、深さ0.19mを測る。地山の湧水帯に達していないが、井戸であったとも考えられる。主に甕が出土している。

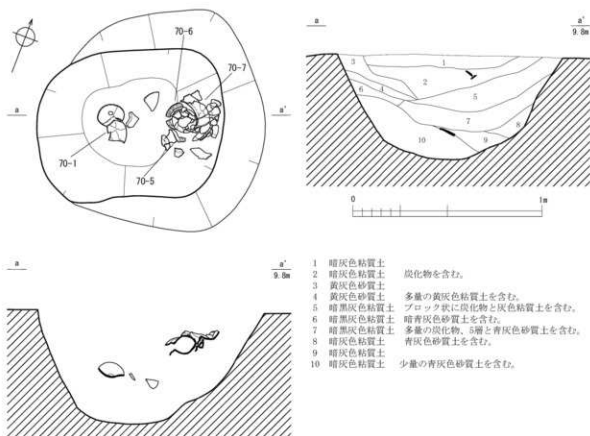
SE069(第53図) C6・7グリッドに位置し、平面形は楕円形を呈する。長軸1.21m、短軸1.13m、深さ0.53mを測る。湧水は確認されなかったが、井戸の可能性はある。完形に復元できる甕などが出土している(図版第14②)。

井戸の可能性を考えたSE067・068・069の3基は、竪穴住居SI051とSI052の間にまとまる。

SX070 D5グリッドの調査区北側の排水溝掘削の際に出土し、5つのまとまり(群)で取り上げた土器群である。排水の掘削を優先したため、出土状況を確認して取り上げていない。よって遺構に含まれる



第52図 SK067・SK078 実測図 (縮尺 1/40)



第53図 SE069 土器出土状況図・土層断面図 (縮尺 1/20)

かは不明であるが、土坑、または土器の出土範囲が広いため堅穴住居であった可能性もある。大型の壺や装飾器台など大量の土器が出土している(図版第14⑤⑥)。

SD071 D5・6、E6・7グリッドに位置し、西にやや傾き南北方向に流れる溝である。検出された長さは17.9m、幅0.3~1m、深さ0.32mを測る。断面はやや逆台形を呈す。この溝に平行して同じような溝(SD072)があるが、北側は地震のためか不明瞭となる。甕や蓋などが出土している。

SD072 E6・7グリッド、SD071から3mほど東側に離れ、北で自然となくなる以外はSD071とほぼ同じで、この2本の溝一組で機能していたものと考えられる。検出された長さは9.04m、幅0.30~0.76m、深さ0.27mを測る。弥生土器は出土しているが、図化できた土器はない。

SK073 E・F6グリッド、SI056の南に位置する。平面形は不整形な小判形で、長軸1.08m、短軸0.64m、深さ0.1mを測る。甕などが出土している(図版第15②)。

SK074 E6グリッド、SI056の南に位置する。平面形は小判形で、長軸1.60m、短軸0.86m、深さ0.1mを測る。蓋などが出土している。

SP075 F6グリッド、河道の肩口に位置する。平面形は不整形な小判形で、長軸0.8m、短軸0.4m、深さ0.1mを測る。器台などが出土している(図版第15④)。

SK076 E6グリッド、SD072の東に位置する。平面形は小判形で、長軸1.5m、短軸0.84m、深さ0.17mを測る。器台などが出土している。

SK077(第54図) F6グリッド、SD079の南に位置する。平面形は小判形で、長軸1.68m、短軸1.08m、深さ0.47mを測る。甕や高坏などが出土している(図版第15③)。

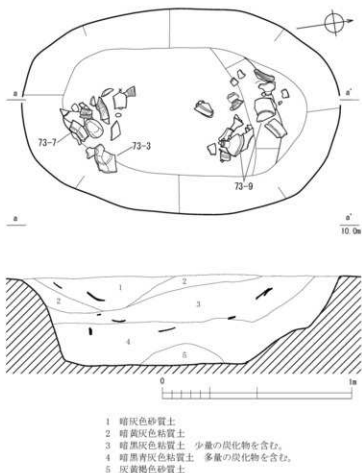
SK078(第52図) F6・7グリッド、SK077の南に位置する。長軸1.32m、短軸0.83m、深さ0.3mを測る。

弥生土器は出土しているが、図化できた土器はない。

SD079 F6グリッドに位置し、旧河道から北西へL字状に伸びる。延長約5.5m、幅0.5m前後、深さ0.1mを測る。弥生土器は出土しているが、図化できた土器はない。ちなみにこの溝が囲む南側と西側のSD072の間には、列状になるなどの規則性はないが、小さなピットが10基ほどある。同時期と判断できるなど明確な根拠はないが、取り囲む溝とともに周溝を巡らす平地式住居であった可能性も高い。

旧河道 FGグリッドを中心に、調査区を南北に横断する旧河道である。この河道を挟んで東西に遺構が分かれる。この検出された長さは17m、幅8.8～13mで、最も深いところで0.64mを測る。西側でなだらかに傾斜し、その岸は台形状に突き出した肩が検出された。長さ約2.8m、幅1.6mを測る。土器の出土は西肩に多く、底に大量に堆積した状況ではなく、全体の出土量も少ない。特に東側では土器の破片そのものが少なかった。このなかで復元できた土器を中心に図化したが、数は少なく壺など大型の土器を中心に6点である。

以上、西地区の遺構について述べてきたが、それらの時期の前後などについて述べておく。西地区は調査区を東西に分断する旧河道のすぐ西から遺構が広がり、その中央で4種類の堅穴住居以外に切り合う遺構はなく、調査区全体に遺構が点在する。旧河道の脇にあるSD079と囲まれたピット群を住居であったと考え、溝が河道で削られていること、居住域を水辺近くに求めることは考えられないことなどから、この河道は当初の集落を削るように新しく生じたものと考えたい。河道で出土した土器で図化できた土器も西地区では比較的新しい時期であることもつじつまは合う。堅穴住居はすべてSD062の南側にあり、北側では遺構が少なくなることから、この溝は集落の北側を区画する性格があったようである。この溝はさらに調査区外の東西へ延びるが、その東側の延長ではSD071・072と直交する。SD071とSD0072は平行する溝で、2本の溝の間にはピットなど明確な遺構は確認されていない。この弥生集落内の「道」のような性格も考えられる。また東地区では井戸と考えられるような深い土坑はなかったが、西地区では個々の遺構の記述で井戸である可能性を残す土坑として、丸い形状のSE067・068・069の3基をあげた。しかしSE067・068の2基は深さが40cm以下で、底の標高も近接する堅穴住居の床面とほぼ同じか、9.4m前後とむしろ高い。SE069のみが深さ50cmを超えてその底も9.1mとやや深くに位置する。また平面は隅丸長方形で典型的な井戸の形状ではないが、堅穴住居群を区画すると考えたSD062の北側にあるSK060は50cmの深さがあり、井戸と判断するに相応しいかもしれない。



第54図 SK077 土器出土状況図 (縮尺 1/20)

第3節 西地区の遺物（第55～77図、第3表）

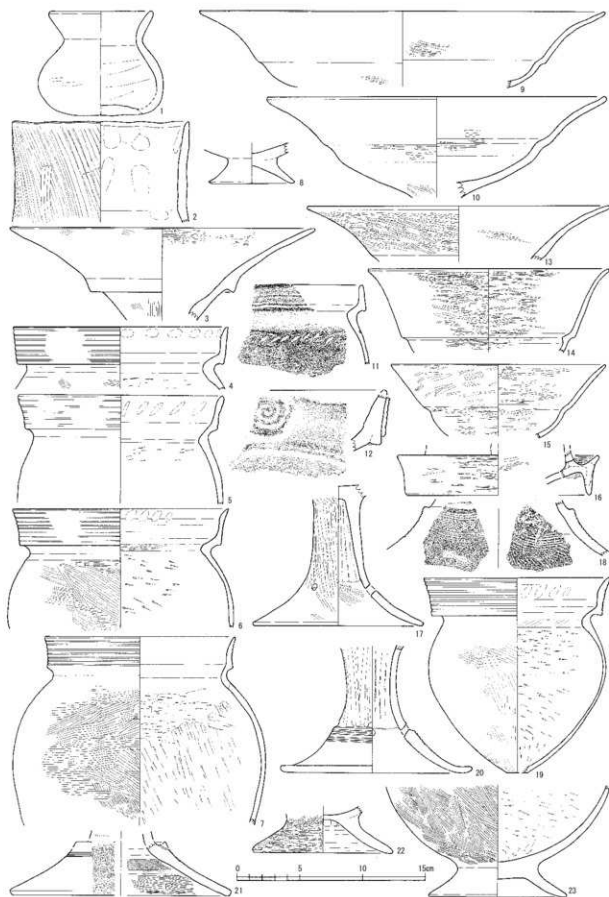
1 遺物の概要

竪穴住居・土坑・溝、そして包含層出土の土器の一部の合計345点を図化した。土器全体の出土量においてもSD062からのものが圧倒的に多く、ここで図化した土器の約1/4を占める。すべての遺構で最も出土量が多いと思われるのは甕であるが、その多くは典型的な月形式の有段口縁で、ほとんどに擬凹線文がある。口縁部だけでは甕か壺か判断できないものもあるが、他の類例などから甕か壺かを極力判断することとした。また包含層の土器に遺構出土より特殊なものも多く目立つが、これは多くあるタイプは除いて、より特殊なものを選んだ結果による。また個々の遺構について器種ごとに説明するが、脚としたものは高坏か器台いずれのものか判断できないもの、脚台としたものもその上へ付くものが特定できないものとした。

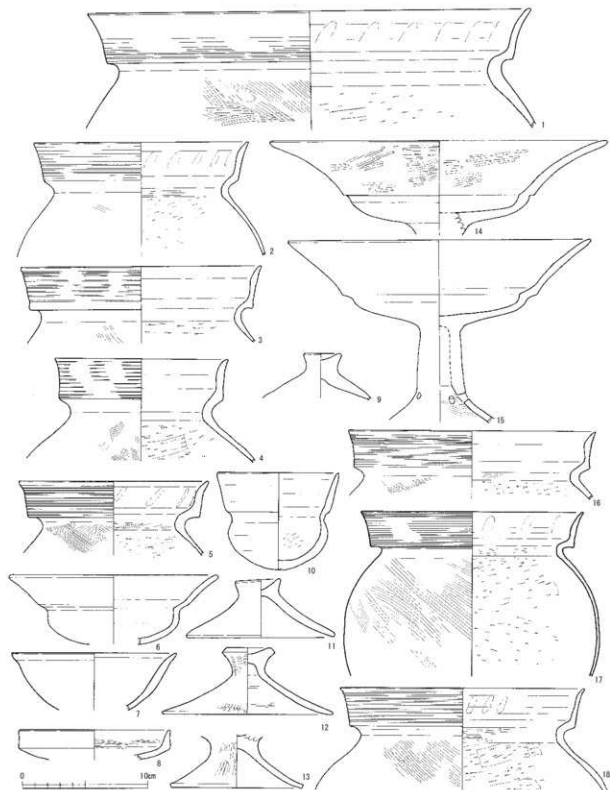
2 各遺構出土の土器

SI051 甕7点、壺3点、高坏6点、器台2点、装飾器台1点、脚2点、台付壺の脚台に特定できるもの3点、蓋1点の合計25点を図化した。このなかで床面に張付くように出土したのは器台の脚（第55図20）の1点で、多くの土器は覆土一括である。甕は叩き甕の胴部片1点（第59図12）のほか、いずれも擬凹線文がある有段口縁である（第55図4～7・19）。肩部に刺突列点文のあるもの（第55図11）は、口縁の立ち上がりが短くこれを除けば、その他の甕の口縁は立ち上がりが長く端部が先細りする。壺は長い頸部をハケ調整するもの（第55図2）、幅広の口縁帯に浮文を貼り付けるもの（第55図12）、平底の小型のもの（第55図1）である。高坏は口縁が大きく開き有段となるもの（第55図9・10・13）と、立ち上がりが強く口径が小さいもの（第55図14・15）の2種類である。器台は大きく開く有段の受部と有段の脚である（第55図3・20）。高坏や器台の脚には無段のもの（第55図17）と有段のものがある。後者には有段部に沈線を挟んでヘラ刺突を施文したり（第55図21）、沈線の間にS字スタンプを施文したりする（第55図18）。装飾器台はミガキ調整の受部のみである（第55図16）。台付壺の脚台としたもの（第55図8・22・23）は、胴部からくの字に屈曲した脚がハの字に大きく開くものである。

SI052 甕15点、壺6点、高坏5点、器台1点、装飾器台5点、脚3点、鉢3点、蓋3点の計41点である。甕はSI051と同じく有段口縁のもの（第56図1～3・5・16～18、第57図1、第58図2～7・9）であるが、1点のみ擬凹線文がないヨコナデの厚手の口縁のもの（第58図9）がある。壺には甕の口縁と同じ有段口縁（第56図4、第58図8）と、太い頸部から口縁がわずかに立ち上がるもの（第57図2、第58図1）に、丸い胴部のみもの（第57図4）もある。完形となった壺の頸部には刺突を加えた凸帯が貼付く（第57図3）。高坏は有段の坏部から口縁が大きく開くもの（第56図14・15、第58図10）と、皿状の坏部のやや小型のもの（第56図8）である。後者の坏部の立上りには刺突を加えた小さな凸帯が貼付く（第57図5）。器台の受部はなく、その有段の脚がある（第58図13）。脚には無段のもの（第58図12）と有段のもの（第58図11）のほか、壺か鉢につくと考えられるもの（第56図13）がある。装飾器台は垂下帯に擬凹線文を巡らせるもの（第57図6・8）と、ミガキもしくはヨコナデのもの（第57図7・9・10）である。受部の透かしが残るもの（第57図6・7）は水滴形が6箇所へ復元される。鉢は有段の口縁のもの（第56図10）、その有段の口縁が大きく開くもの（第56図6）、坏部がハの字状に開いて碗状のもの（第56図7）である。蓋は「ハ」の字に開く中型のもの3点（第56図9・11・12）である。ここで図化できたものの多くは、床面近くや壁溝で出土したもので一括性が高い状態で出土している。この住居の柱穴などと考えられるピットから出土した土器が多く図化できた。SP1から甕（第58図5）、SP2からは甕3点（第58図3・8・9）と脚部片（第58図11）、

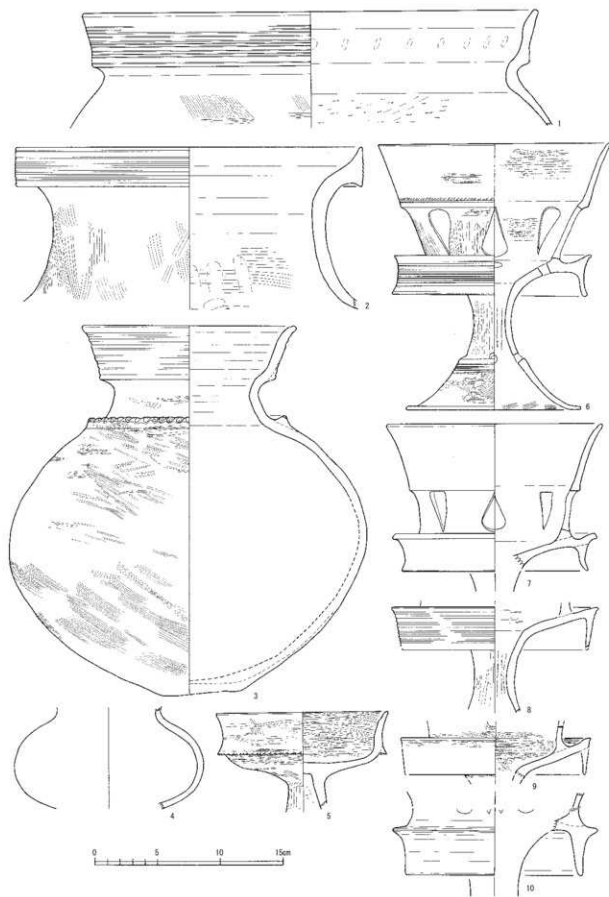


第55圖 弥生土器実測図(縮尺 1/3)

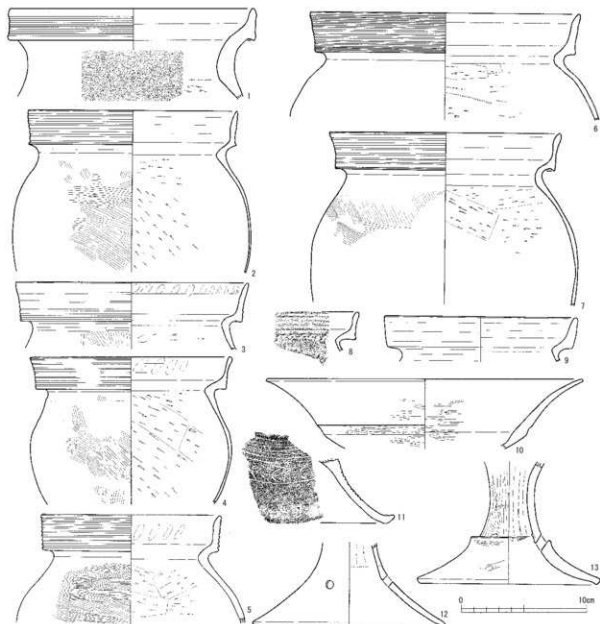


第56図 弥生土器実測図(縮尺 1/3)

SP3からは器台脚(第58図13)、SP5からは甕(第58図2・4・6・7)、壺(第58図1)、高坏(第58図10)、脚(第58図12)など7点がまとめて出土している。この竪穴住居から出土した土器は甕・壺・高坏・鉢に蓋である。小片などの一部はともかく、その他の器形がある程度分かる土器は、一括性が高い豊富な器種組成を示し、今後の基準資料となるものであろう。



第57圖 弥生土器実測図(縮尺 1/3)

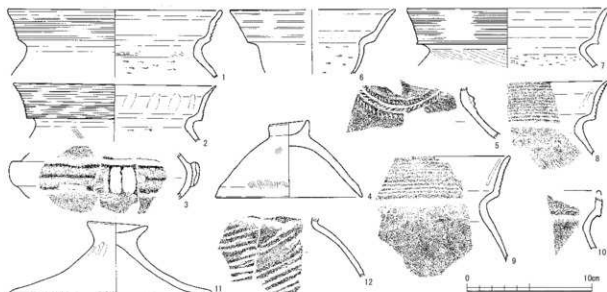


第58図 弥生土器実測図(縮尺 1/3)

S1053 甕2点、壺1点、脚1点、蓋1点の計5点を図化した。甕は有段口縁で擬凹線文のあるもの(第59図1・2)である。壺は胴部片であるが棒状浮文を2本加えた凸帯文のあるもの(第59図3)である。脚は沈線を挟み刺突列点を有段部分に施文する(第59図5)。蓋は小さな摘みに内湾する口縁となるもの(第59図4)で、上下逆の鉢にもなるものである。

S1054 甕4点、鉢1点の計5点を図化した。甕は有段口縁で擬凹線文のあるもの(第59図7～9)である。壺は有段口縁で、沈線の下に円形竹管と刺突列点を加える(第59図10)。鉢は擬凹線文のある有段口縁で、破片が小さいがおそらく小型のもの(第59図6)であろう。

S1055 甕6点、壺4点、高坏1点、裝飾器台1点、小型器台1点の計13点を図化した。甕は擬凹線文がある有段口縁が3点(第60図1～3)と、1点は擬凹線文のない無文の有段口縁(第60図4)である。また2点が「く」の字甕(第60図5・13)であるが、1点の頸部の屈曲(第60図5)は「く」の字と呼ぶには違和感のある丸味のあるものである。口縁内面にヨコハケのあるもの(第60図13)は、やや長胴となる。胴部に対して



第59図 弥生土器実測図（縮尺 1/3）

口径が小さいためここでは壺とした2点も、「く」の字甕となる可能性がある。下半を欠くもの(第60図7)は、屈曲する頸部直下に接合痕を残し、短い口縁はやや厚い。完形に復元できたもの(第60図11)は、丸底に輪高台状に粘土を貼付け、上げ底の底部とする。この時期の甕に通用の尖底のように小さな底部との関連が想定できる。口縁を僅かに内湾し、布留式甕を連想させるものである。胴部のみのは甕となる可能性もある。高坏は大きな坏底部から伸びる口縁部が開くもの(第60図6)で、北陸北東部の越中などに多いタイプのもと考えられる。また壺の口縁部とした破片(第60図9)の立ち上がりには羽状の刺突があるが、先の高坏の口縁部となる可能性もある。小型器台(第60図8)は「ハ」の字に開く脚から口縁部が小さく開く。中央に孔はない。裝飾器台(第60図10)は口縁部片で立上りに刻みが、口縁帯には擬凹線文がある。この堅穴住居から出土した土器は、有段口縁甕に、「く」の字甕が加わり、小型器台が出現し土器の様相が変化する時期の一括資料である。また西地区はもちろん東地区も含めた本遺跡の遺構出土の土器では最も新しく位置付けられる一群でもあり、布留式を連想させる口縁など、近隣資料との併行に注目される。

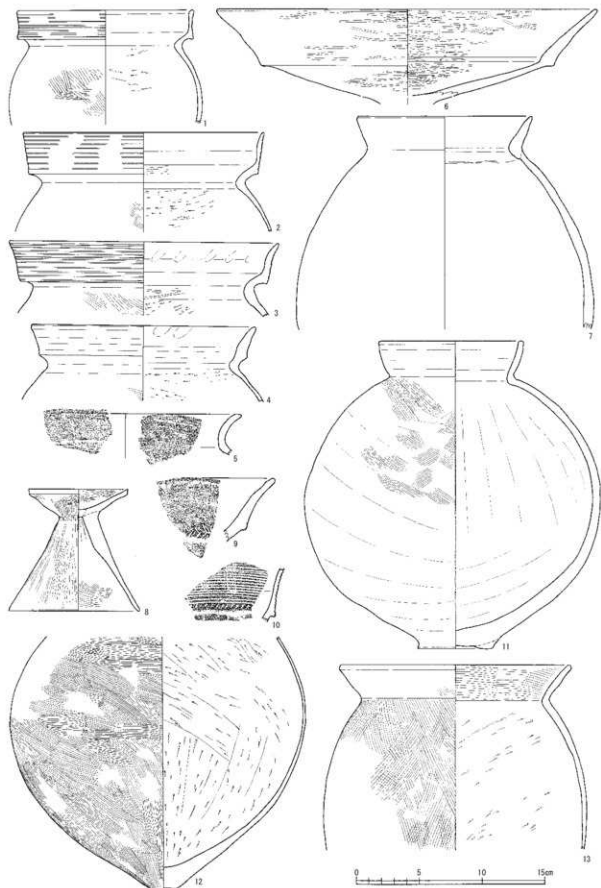
SI056 甕と壺1点ずつ、計2点を図化した。甕(第73図16)は擬凹線文のある有段口縁、壺(第73図17)は長い頸部から無文の口縁帯が立上るものである。

SI057 「ハ」の字状に開く天井部に小さな摘みがつく蓋(第61図17)を1点図化した。

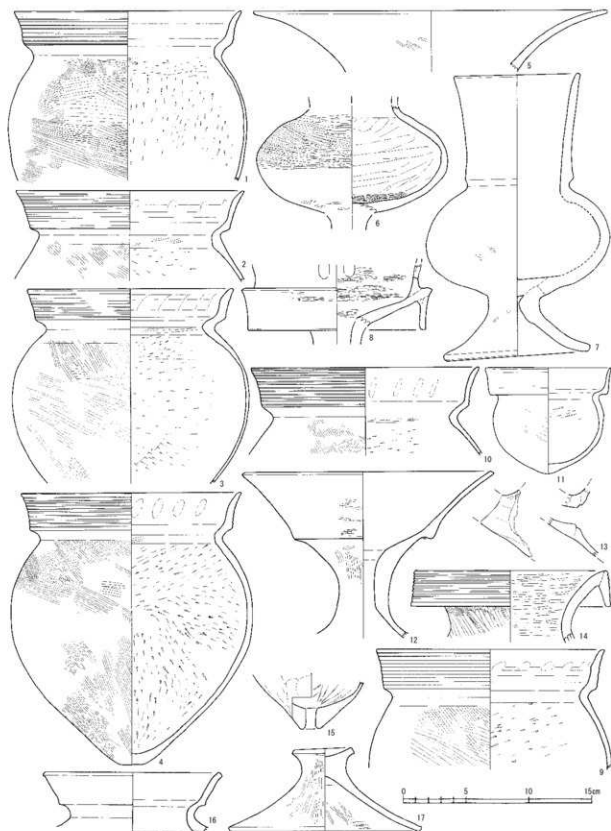
SX058 甕5点、壺3点、器台1点、裝飾器台1点の計10点を図化した。甕(第61図1～4・9)はいずれも擬凹線文がある有段口縁である。壺は小さく開いた口縁に、擬凹線文のある垂下帯(第61図14)と、完形に復元できたものは口縁が長く直立して伸びるもの(第61図7)で台付となる。胴部のみのも(第61図6)も同様に台付壺となるであろう。器台(第61図5)は「ハ」の字に大きく開く口縁部のみである。

SX059 甕・器台・鉢の各1点の計3点を図化した。甕は有段口縁に擬凹線文があるもの(第61図10)、器台は脚の下半を欠き、「ハ」の字に口縁部が大きく開くもの(第61図12)、鉢は口縁が有段となる完形に復元されたもの(第61図11)である。

SK060 甕3点と高坏・器台・鉢の各1点の計6点を図化した。甕は有段口縁に擬凹線文があるもの3点(第62図5・6・8)、高坏は口縁が大きく開き有段の坏部となるもの(第62図11)、器台は「ハ」の字に開く脚部(第62図9)、鉢は口縁に擬凹線文がある有段となるもの(第62図10)である。



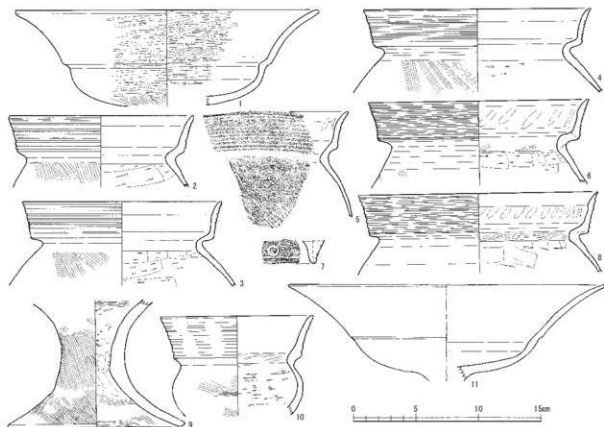
第60圖 弥生土器実測図(縮尺 1/3)



第61図 弥生土器実測図(縮尺 1/3)

SK061 無文の口縁部が直線に開く壺の口縁部1点(第61図16)を図化した。

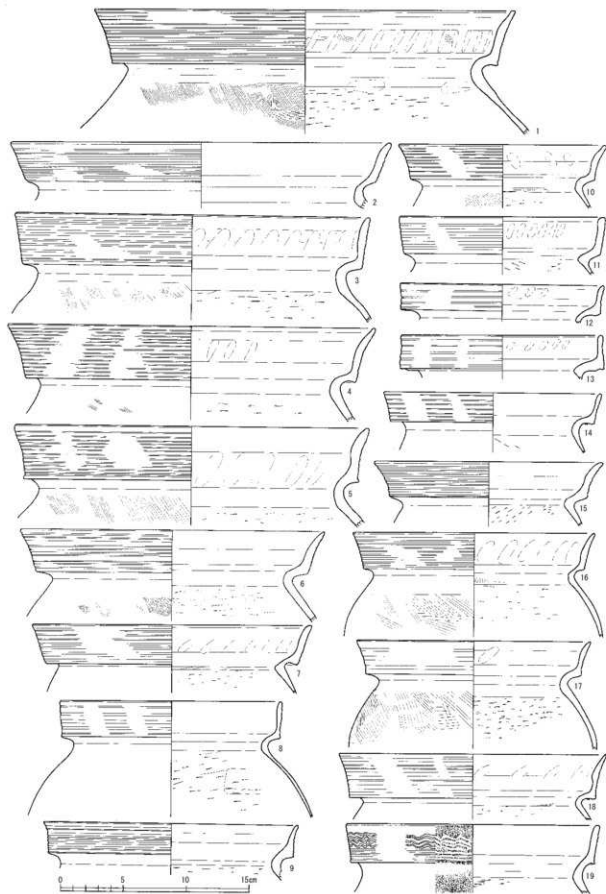
SD062 大量の土器が出土しているが、器形がわかるまで復元できたものと、他の遺構ではなかったよ



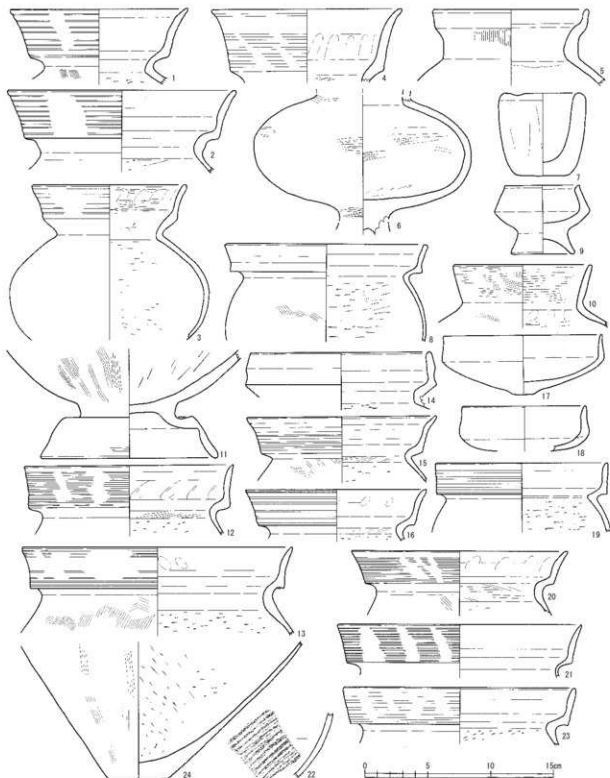
第62図 弥生土器実測図(縮尺 1/3)

うな土器を中心に、甕35点、壺17点、高坏14点、器台7点、高坏か器台いずれかの脚2点、裝飾器台8点、鉢2点、脚台3点、蓋1点、小型土器2点の計91点を図化した。小型土器を除き完形に復元できたものは高坏や器台など3点ほどで、特に点数が多い甕について口縁部が中心となったのは器壁が薄いことにもよるが、遺構のところで述べたように密集した出土状況にもよると考えられる。

甕は底部1点、胴部片1点のほか口縁部が33点で、そのすべてが有段口縁である。そのうち擬凹線文があるのは31点を占め(第63図1～19、第64図12・13・15・16・19～21・23、第65図2、第66図1・2・5)、有段口縁で無文のもの(第64図8・14)が2点と極端に少ない。また擬凹線文が直線ではなく、波状となるもの(第63図19)が1点ある。胴部片は叩き甕の胴部下半である(第64図22)。壺は甕と同じような形状の有段口縁のタイプが多いが、特に甕の口縁と区別がしにくい。頭部が強くすばまり口縁の幅に比して口径の小さいもの(第64図1～4、第66図7・10)は有段口縁の壺と認識できる。有段口縁で無文のもの(第65図1)は口縁が厚手で、全体に開いて二重口縁の形状に近いもの(第65図6)には肩部に刺突列点が巡る。頭部に凸帯が貼付くのはこの時期に特徴的な大型のもの(第65図5)である。また幅広い立ち上りの脚台(第64図11)はこれらの壺のものであろう。大型の高坏は口縁が大きく開き有段の坏部となるもの(第67図3・4・13)の他に、口縁内面が肥厚するもの(第67図1・4)もある。小型の高坏は口縁が大きく開かないで上へ伸びる有段の坏部となるもの(第66図9)と、坏部が直立して皿状のもの(第66図12、第67図8・10)があり、後者には刻みを加えるもの(第66図12)と、坏部の立上りを突出させるもの(第67図10)がある。器台は口縁が大きく「ハ」の字状に開くもの(第66図3・4、第67図5・6・9)と、口縁帯を貼付け有段にするもの(第67図7)がある。類例が確認できなかったものにも、大型の坏部が「ハ」の字状に開くタイプをそのまま小型にした有段脚のもの(第66図8)がある。脚としたものは高坏や器台の脚であるが、その

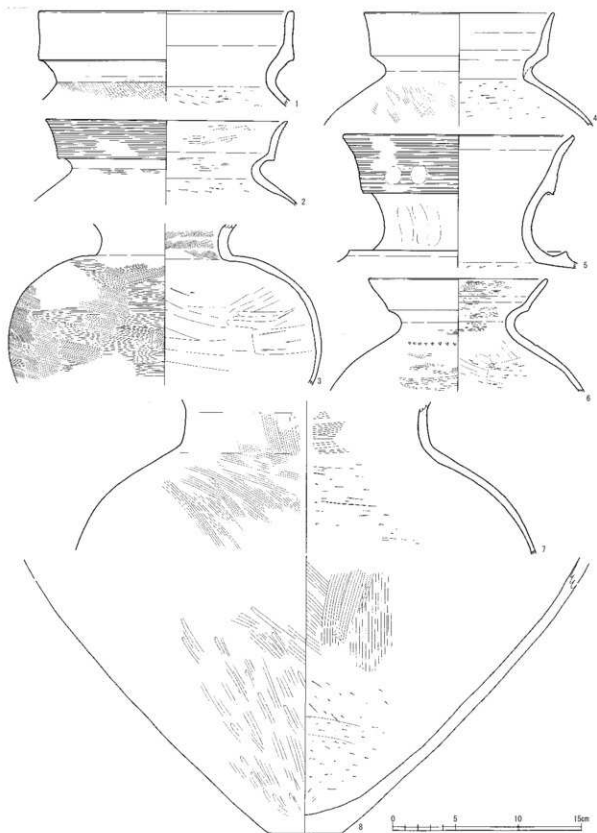


第63圖 弥生土器実測図（縮尺 1/3）



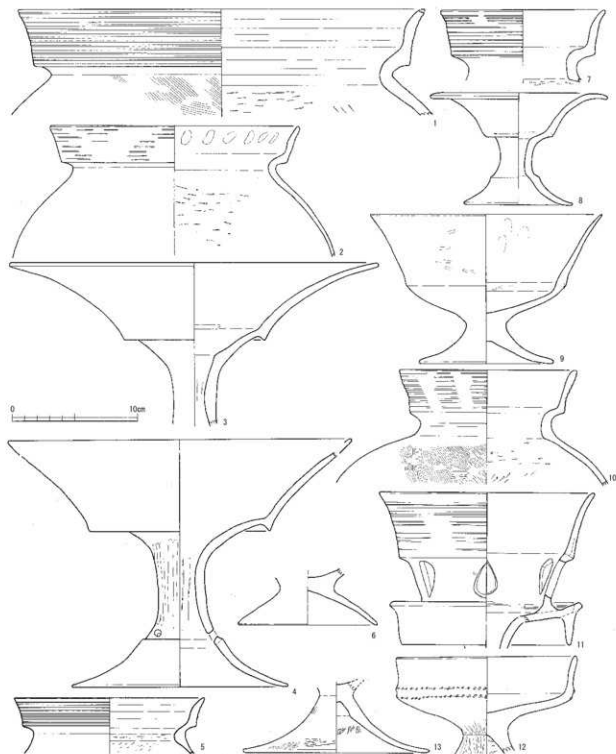
第64図 弥生土器実測図（縮尺 1/3）

いずれにも有段のものと「ハ」の字状に開いてそのまま裾端部となるものがある。坏部との接合の状況で高坏と判断できるもの（第67図11・14、第68図8～10）には後者が多いようである。有段部だけではいずれかは判断できない（第67図12・15）。裝飾器台は8点あるが、受部の垂下帯を中心とした部分でしか認識できなかったものが多い。垂下帯には擬門線文が入るもの（第68図6・7）とヨコミガキのもの（第66図



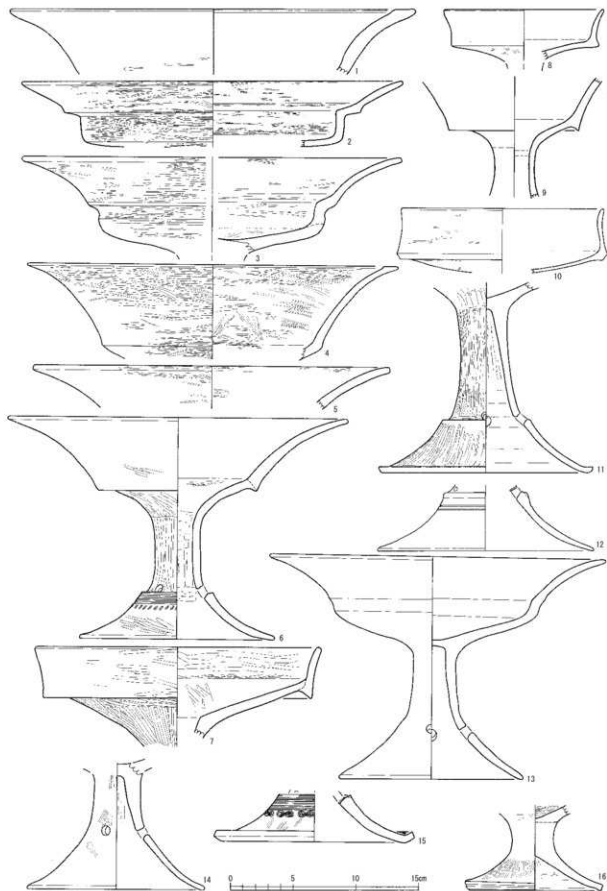
第65図 弥生土器実測図（縮尺 1/3）

11. 第68図1～5)に加え、水滴形の透かしが入るもの(第68図3・7)がある。受部の立上りの透かしが大小の水滴形が交互に入るもの(第68図4)は垂下帯との接合部に刻みを加えるが垂下帯の下端に刻み

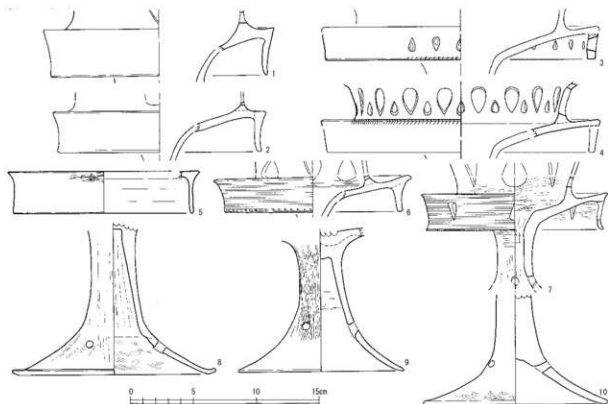


第66図 弥生土器実測図（縮尺 1/3）

を加える破片(第68図3)がある。この2点は透かしの部分に赤彩が僅かに残り、大きさや胎土・色調からも同一個体の可能性が高い。このタイプは口径も大きく古いタイプと考えられる。鉢で明確に有段口縁となるものは図化できなく、小型の高坏の坏部と同じようなタイプがいくつかある(第64図17・18)。脚台としたもの(第66図6・13、第67図16)は高坏か台付鉢となると考えられるが、上の形状が不明である。このほかに小型土器が2点ある(第64図7・9)。



第67圖 弥生土器実測図(縮尺 1/3)



第68図 弥生土器実測図(縮尺 1/3)

SD063 注口土器の注口の付け根部分(胴部への接合部分)の1点(第61図13)を図化した。

SK064 有孔鉢の底部片の1点(第61図15)を図化した。

SK065 甕3点と高坏坏部と裝飾器台の垂下帯の各5点を図化した。甕は擬凹線文のある有段口縁の3点(第62図2～4)、高坏は口縁が大きく開き有段の坏部となるもの(第62図1)、小片ではあるが裝飾器台の垂下帯の破片となるもの(第62図7)である。

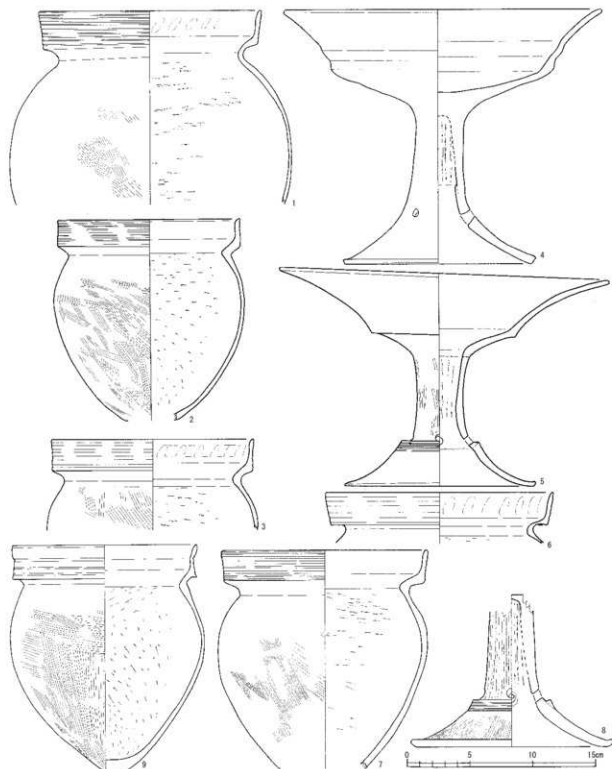
SD066 いずれも出土状況がよく、器形が分かるまで大きく復元できたもので、甕、高坏、器台の計8点で、壺と鉢は見当たらなかった。甕は擬凹線文のある有段口縁の5点(第69図1～3・6・7)で、口縁はいずれも直立気味に立ち上がる。高坏は口縁が大きく開き有段の坏部となる完形に復元されたものと、有段の脚のみのもの(第69図4・8)である。器台も完形に復元された有段の脚に「ハ」の字に口縁部が大きく開くもの(第69図5)である。西地区の遺構でまとまって土器が出土した中では最も古く位置付けられる可能性のある一括資料の一群である。

SE067 完形に復元された擬凹線文がある有段口縁の甕1点(第69図9)を図化した。SD066と接合関係ある。

SE068 擬凹線文のある有段口縁の甕4点(第70図2～4・8)を図化した。うち1点は小型で鉢とも分類できるもの(第70図8)である。

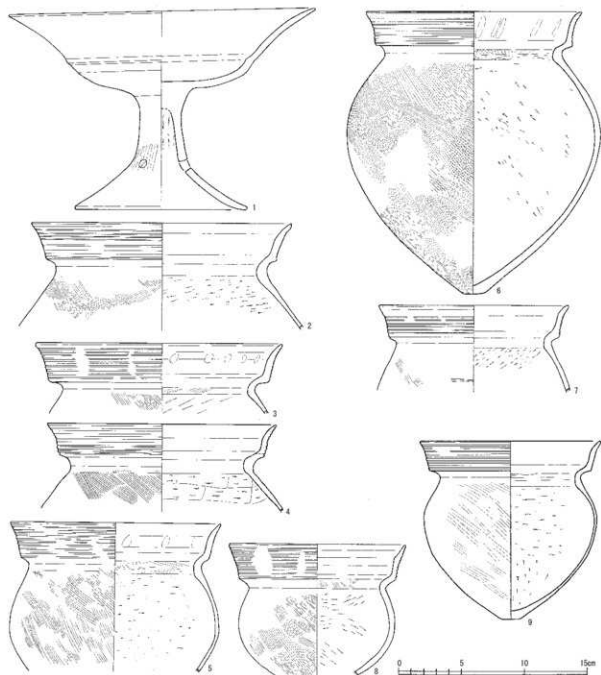
SE069 甕4点と高坏1点の計5点を図化した。甕は擬凹線文のある有段口縁の4点(第70図5～7・9)、高坏は口縁が大きく開き有段の坏部となる完形に復元されたもの(第70図1)である。これと甕1点(第70図5)はSE068と接合関係にある。

SX070 甕10点、壺2点、高坏2点、器台1点、裝飾器台1点、鉢1点、蓋1点の合計18点を図化した。甕はいずれも擬凹線文のある有段口縁の甕で小型のもの(第71図1～8、第72図3・7)で、1点(第72図



第69図 弥生土器実測図(縮尺1/3)

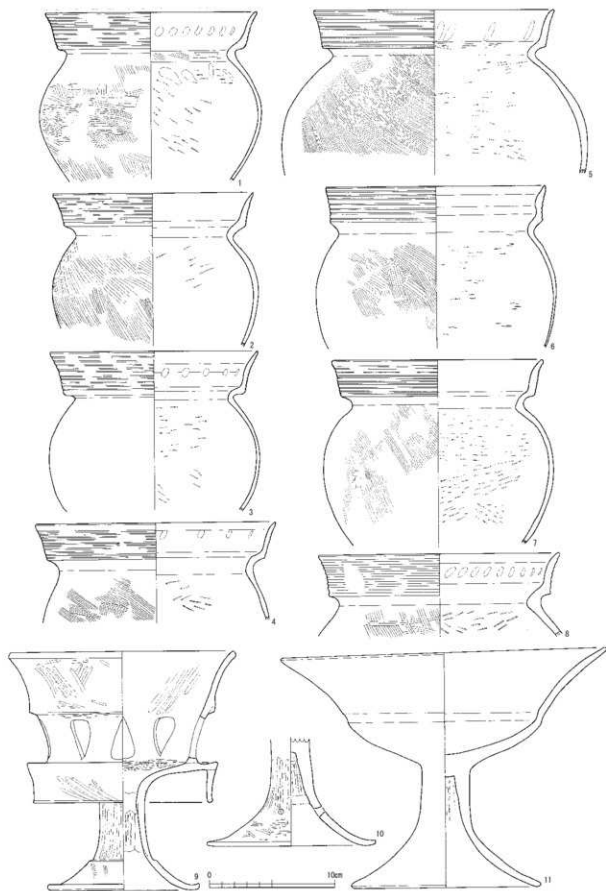
7)は壺となる可能性を若干残す。壺として明らかなのは1点のみで、口縁部の口径が30cm前後に復元できる大型のものである。有段に立上る口縁に擬凹線文のあるものと、頸部に刻み目のある凸帯文を巡らす胴部上半が胎土や色調が非常に類似し、おそらく同一個体となる(第72図1・2)と考えられる。高坏は口縁が大きく開き有段の坏部となる完形に復元されたもの(第71図11)と、この高坏の脚と同じような「ハ」の字に開く脚である(第71図10)。器台は「ハ」の字に口縁部が大きく開くもの(第72図5)である



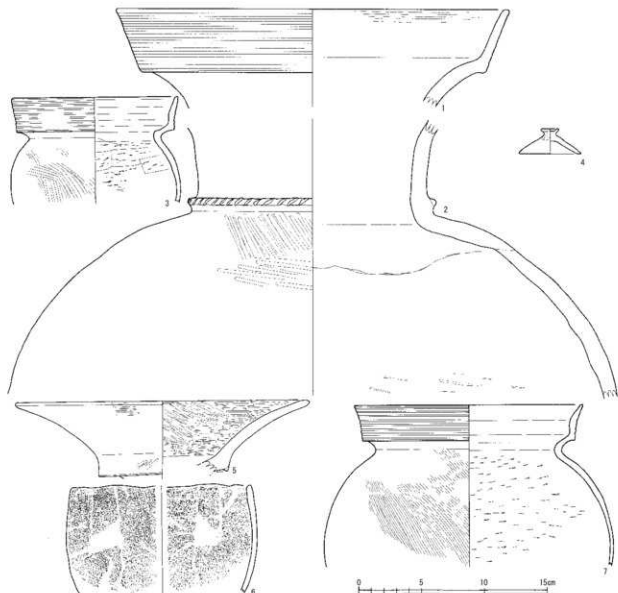
第70図 弥生土器実測図(縮尺 1/3)

が、他のものと比較すると厚手で重厚なものである。完形に復元できた装飾器台(第71図9)には口縁帯にも垂下帯にも施文がなく、ミガキ調整のみである。鉢は丸い胴部がそのまま口縁となるもの(第72図6)で、口縁端部も面取りやヨコナデの調整を加えない、弱いハケ調整のちヨコナデのみのやや異質なものである。蓋は非常に小型のもの(第72図4)で、口径の小さい細頸の壺に伴うものと考えられる。ここでSX070出土とした土器は、明確な遺構に伴うものではないことはすでに述べた。その出土状況とともに、図化した甕の口縁部の形状が非常に類似し、同一の時期であることも、これらの土器は一括性が高いまとまりのある一群と考えられる。

SD071 甕と壺と蓋の各1点の計3点を図化した。甕(第73図6)は擬凹線文のある有段口縁である。壺(第73図4)は頸部に近い胴部上半の破片で、胴部と頸部が屈曲する境目に凸帯を貼付け、それに接して梅描



第71圖 弥生土器実測図(縮尺 1/3)



第72図 弥生土器実測図（縮尺 1/3）

の直線文と波状文を重ねる。本遺跡、特に西地区では文様のあるものは珍しい。蓋(第73図5)は小さな立上りの口縁に拵みのない傘状の覆い部となり全面ミガキ調整の小型のもので、二孔一対の孔が焼成前に開けられる。おそらく壺に伴うものであろう。

SK073 図化できたのは甕が3点(第73図11~13)で、いずれも擬凹線文がある有段口縁である。

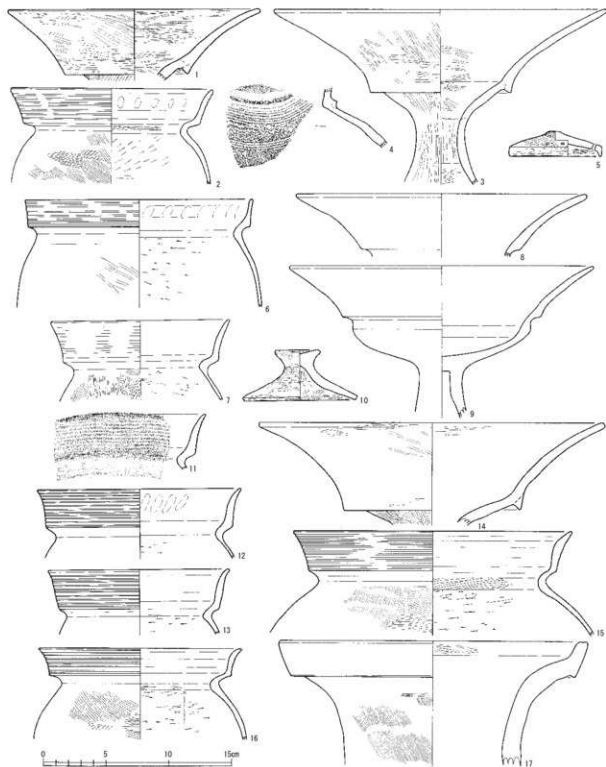
SK074 図化できたのは、完形となるミガキ調整の蓋1点(第73図10)の完形品である。小さく口縁が立ち上がり、天井部などを丁寧なミガキ調整でやや厚手である。

SP075 図化できたのは、口縁が大きくひらく器台受部の1点(第73図14)である。

SK076 図化できたのは口縁が大きく開く器台受部の1点(第73図1)である。

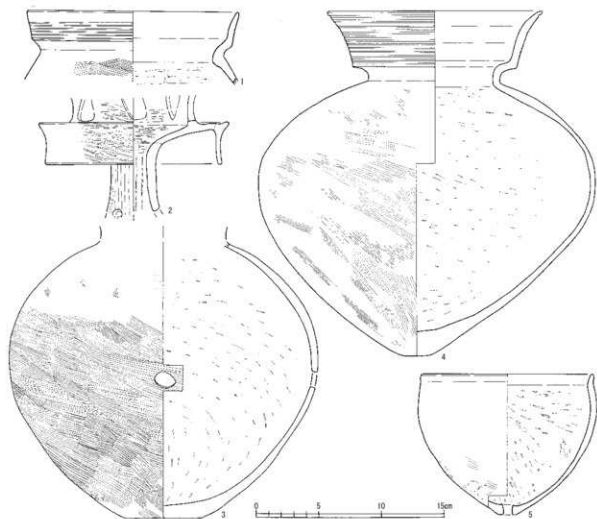
SK077 甕2点と高坏2点に器台1点が図化できた。甕は擬凹線文のある有段口縁の2点(第73図2・7)と、高坏は口縁が大きく開き有段の坏部となるもの2点(第73図8・9)、器台は「ハ」の字に口縁が開くもの1点(第73図3)である。

旧河道 旧河道から出土したもので、ここでは西地区側の肩で出土したものを5点を図化した。甕は擬



第73図 弥生土器実測図(縮尺1/3)

凹線文のある有段口縁の2点(第73図15、第74図1)で、完形に復元できた壺(第74図4)の口縁も類似する。頸部から上を欠く壺(第74図3)は球形に近い胴部でやや厚手の平底となる。胴部中央に焼成後の穿孔がある。このほかに裝飾器台の受部垂下帯を中心とした部分(第74図2)と、本遺跡では確認された個体が少ない有孔鉢(第74図5)などである。

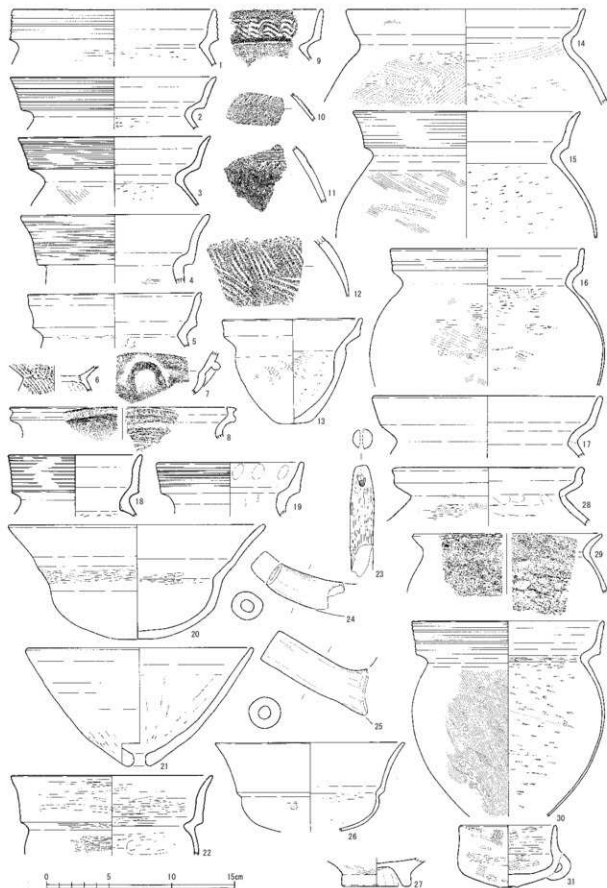


第74図 弥生土器実測図(縮尺 1/3)

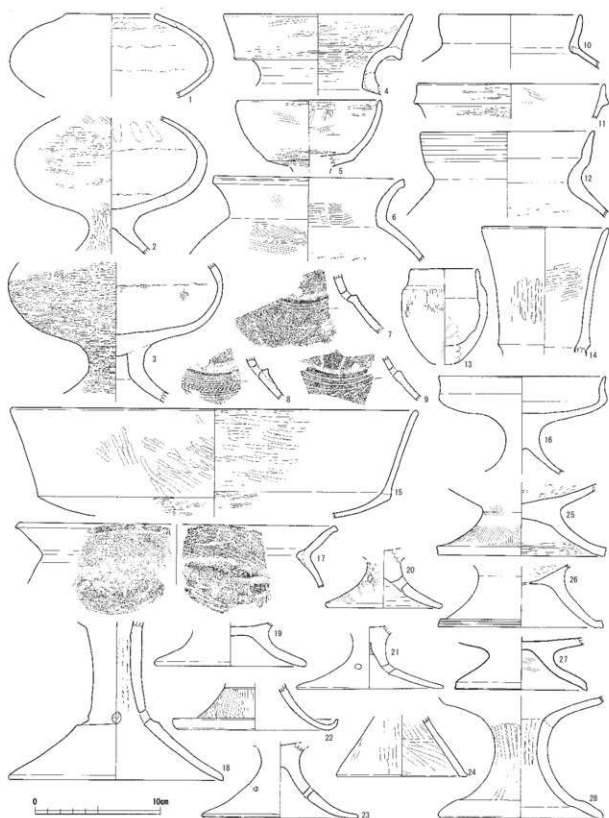
3 包含層出土の土器

包含層から出土した土器としたが、SI051やSD062が位置するAB4・5・6グリッドから出土したものが多く、これはこの2つの遺構の上層で土器が多数出土したが、明確にこれらの遺構に伴うとは確定できず、ここでは包含層からの出土として扱った。

甕は図化したもの以外にも多数あるが、西地区で主要となる擬凹線文のある有段口縁が6点(第75図1～3・15・16・30)である。有段口縁に擬凹線文でも波状のもの(第75図9)もある。有段口縁で無文のものは少なく4点(第75図5・14・17・28)である。「く」の字堿は3点(第75図29、第76図6・17)があるが、いずれも個体差が大きい。小片ではあるがS字口縁甕の口縁部(第75図8)と胴部と脚台の接合部(第75図6)が1点ずつある。また甕の胴部片(第75図12)で太く荒いハケ調整の甕であろう。壺は21点あるが、最も個体差が大きい。有段口縁のものが基本となるが、擬凹線文があるもの(第75図4・18・19)、無文のもの(第76図4・10、第77図12・15・18)であるが、その中でも個体差がある。ほぼ完形に復元できた壺は広口壺と呼べるもの(第77図13)で、水平に口縁の内面に凸帯を貼付け、延びた口縁帯を上下に拡張し、円形浮文が貼付いていた痕跡を残す。さらに頸部と胴部の境にも刻みを加えた凸帯を貼付ける。突出した底部は上げ底である。丸い胴部に脚台が付く壺(第76図2・3)は頸部より上がなく、口縁の形状が不明である。同じような器形に頸部がないいわゆる無形壺(第76図1)があるので、このタイプ、もしくは僅かに立ち上

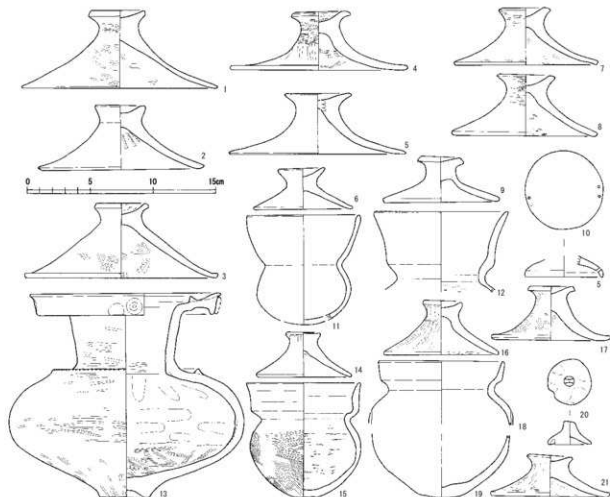


第75図 弥生土器実測図(縮尺 1/3)



第76図 弥生土器実測図（縮尺 1/3）

がるもの、さらには長い口縁部となるもの(第76図14)かも知れない。注口土器の注口も2点ある(第75図24・25)。胴部片には刺突列点文の下に櫛描直線文を施文するもの(第75図10)、櫛描直線文の下に櫛描波状文を施文するもの(第75図11)がある。古墳時代前期に多くなる丸い胴部から口縁が長く延びる小型壺



第77図 弥生土器実測図(縮尺 1/3)

(第77図11)も確認された。高坏には小型で皿状の坏部のもの(第76図16)や、これまで遺構出土で見えてきたタイプのほかに、直立する口縁部で大型のもの(第76図15)、逆に小さな碗状の坏部(第76図5)があり、前者は赤彩されており、SI055と同じく北陸北東部に特徴的なもの、後者は北陸南西部での出土が多い東海的なものである。器台には受部口縁がないが、脚端部外面を幅広に肥厚させるもの(第76図28)がある。脚には直線文の間にS字スタンプを連続させ(第76図7)、刺突列点文を施文する(第76図8・9)のに加え、脚端部を跳ね上げるもの(第76図22)もある。脚台としたもので形状から有段口縁の甕と同じの台付壺となるのが4点(第76図19・25・26・27)ある。このほかは上へどのようなものが付くか明確ではないもの(第76図20・21・23・24)が4点である。古代の碗などのように小さな高台となるもの(第75図27)は鉢の底部となると考えられる。小型土器には口縁がすぼまる鉢(第76図13)と傘状の蓋(第77図20)である。

このほかに土器ではないが、各地で銅鐸の舌とされているものに類似する形状で、棒状の土製品がある(第75図23)。断面形が円形で棒状の平面を呈し、一方向を欠失する。残された一端から1cmほどのところに焼成前の穿孔がある。孔の縦断面の中央が盛り上がり、両面から穿孔されたことが判る。孔の大きさは表面で4mm弱、中央では1mmである。重さ31.1gを測る。

以上のように西地区は、東地区と比較すると相対的に新しく、北陸の弥生時代後期末の土器の指標である月形式でも後半段階が中心となり、土坑とSD062の多くの土器などはほぼこの時期に納まる。竪穴住居でもSI055とSD062や包含層出土の土器などがやや新しくなる白江式に下る可能性がある。

第3節 西地区の遺物

種別番号	図号番号	出土遺物	タイプ	図類	図説	調査・図説・説明など	1層 出土 層位	出土 層位	形状	色澤	焼成	備考
第75-013	図版30	A5	葉	13層-銅板	外:銅板内:銅板	銅板(銅板) 銅板(銅板)	17.0	15.0	①	銅板	良好	内蔵保存(銅板-銅板)
第75-016	図版30	A5	葉	13層-銅板	外:銅板内:銅板	銅板(銅板) 銅板(銅板)	15.0	10.0	①	銅板	良好	
第75-017	図版30	B6	葉	13層-銅板	外:銅板内:銅板	銅板(銅板) 銅板(銅板)	17.0	4.0	①	銅板	良好	
第75-018	図版30	C6	葉	13層-銅板	外:銅板内:銅板	銅板(銅板) 銅板(銅板)	10.0	4.0	①	銅板	良好	
第75-019	図版30	D6	葉	13層-銅板	外:銅板内:銅板	銅板(銅板) 銅板(銅板)	11.0	4.0	①	銅板	良好	
第75-020	図版30	C6	葉	13層-銅板	外:銅板内:銅板	銅板(銅板) 銅板(銅板)	22.0	9.0	①	銅板	良好	
第75-021	図版30	A6	葉	銅板	銅板	銅板(銅板)	17.0	9.0	①	銅板	良好	
第75-022	図版30	F6	葉	13層-銅板	外:銅板内:銅板	銅板(銅板) 銅板(銅板)	15.0	6.0	①	銅板	良好	
第75-023	図版30	D6	葉	銅板	銅板	銅板(銅板)	—	18.0	①	銅板	良好	
第75-024	図版30	D7	葉	銅板	銅板	銅板(銅板)	—	13.7	①	銅板	良好	
第75-025	図版30	A5	葉	銅板	銅板	銅板(銅板)	—	15.0	①	銅板	良好	
第75-026	図版30	D6	葉	13層-銅板	外:銅板内:銅板	銅板(銅板) 銅板(銅板)	14.8	7.0	①	銅板	良好	内蔵保存(銅板-銅板)
第75-027	図版30	C6	葉	銅板	銅板	銅板(銅板)	5.0	2.3	①	銅板	良好	
第75-028	図版30	D7	葉	13層-銅板	外:銅板内:銅板	銅板(銅板) 銅板(銅板)	14.0	4.3	①	銅板	良好	
第75-029	図版30	D5	葉	13層-銅板	外:銅板内:銅板	銅板(銅板) 銅板(銅板)	13.0	4.7	①	銅板	良好	内蔵保存(銅板-銅板)
第75-030	図版30	B4	葉	13層-銅板	外:銅板内:銅板	銅板(銅板) 銅板(銅板)	15.0	13.0	①	銅板	良好	内蔵保存(銅板-銅板)
第75-031	図版30	C3	葉	13層-銅板	外:銅板内:銅板	銅板(銅板) 銅板(銅板)	17.0	4.0	①	銅板	良好	内蔵保存(銅板-銅板)
第75-032	図版30	D5	葉	13層-銅板	外:銅板内:銅板	銅板(銅板) 銅板(銅板)	6.8	6.0	①	銅板	良好	
第76-01	図版30	C3	葉	銅板	銅板	銅板(銅板)	—	10.0	①	銅板	良好	
第76-02	図版30	B7	葉	銅板	銅板	銅板(銅板)	—	11.0	①	銅板	良好	
第76-03	図版30	D6	葉	13層-銅板	外:銅板内:銅板	銅板(銅板) 銅板(銅板)	14.0	6.4	①	銅板	良好	
第76-04	図版30	D6	葉	13層-銅板	外:銅板内:銅板	銅板(銅板) 銅板(銅板)	11.2	5.0	①	銅板	良好	
第76-05	図版30	D6	葉	13層-銅板	外:銅板内:銅板	銅板(銅板) 銅板(銅板)	15.0	6.0	①	銅板	良好	
第76-07	図版30	D6	葉	銅板	銅板	銅板(銅板)	—	4.0	①	銅板	良好	中々不良
第76-08	図版30	K7	葉	銅板	銅板	銅板(銅板)	—	12.0	①	銅板	良好	中々不良
第76-09	図版30	C5	葉	銅板	銅板	銅板(銅板)	—	14.0	①	銅板	良好	中々不良
第76-10	図版30	D6	葉	銅板	銅板	銅板(銅板)	11.0	4.0	①	銅板	良好	中々不良
第76-11	図版30	A6	葉	銅板	銅板	銅板(銅板)	14.0	12.7	①	銅板	良好	
第76-112	図版30	D6	葉	銅板	銅板	銅板(銅板)	13.0	6.0	①	銅板	良好	中々不良
第76-113	図版30	A	中葉	銅板	銅板	銅板(銅板)	5.1	7.5	①	銅板	良好	
第76-114	図版30	A6	葉	銅板	銅板	銅板(銅板)	9.0	10.2	①	銅板	良好	
第76-115	図版30	F6	葉	銅板	銅板	銅板(銅板)	31.7	6.5	①	銅板	良好	内蔵保存
第76-116	図版30	D6	葉	銅板	銅板	銅板(銅板)	12.2	7.7	①	銅板	良好	
第76-117	図版30	E6	葉	13層-銅板	外:銅板内:銅板	銅板(銅板) 銅板(銅板)	24.0	5.0	①	銅板	良好	内蔵保存(銅板-銅板)
第76-118	図版30	E5	葉	銅板	銅板	銅板(銅板)	10.0	12.0	①	銅板	良好	中々不良
第76-119	図版30	C3	葉	銅板	銅板	銅板(銅板)	11.3	14.0	①	銅板	良好	
第76-120	図版30	B4	葉	銅板	銅板	銅板(銅板)	10.0	4.0	①	銅板	良好	中々不良
第76-121	図版30	A5	葉	銅板	銅板	銅板(銅板)	11.3	4.0	①	銅板	良好	中々不良
第76-122	図版30	A6	葉	銅板	銅板	銅板(銅板)	12.0	3.7	①	銅板	良好	中々不良
第76-123	図版30	D6	葉	銅板	銅板	銅板(銅板)	11.0	4.3	①	銅板	良好	中々不良
第76-124	図版30	D6	葉	銅板	銅板	銅板(銅板)	3.4	4.0	①	銅板	良好	
第76-125	図版30	D5	葉	銅板	銅板	銅板(銅板)	12.1	5.7	①	銅板	良好	
第76-126	図版30	A32	葉	銅板	銅板	銅板(銅板)	13.0	5.0	①	銅板	良好	
第76-127	図版30	D5	葉	銅板	銅板	銅板(銅板)	10.2	4.3	①	銅板	良好	
第76-128	図版30	C6	葉	銅板	銅板	銅板(銅板)	12.8	9.7	①	銅板	良好	
第77-01	図版30	E5	葉	銅板	銅板	銅板(銅板)	15.2	6.1	①	銅板	良好	
第77-02	図版30	C4	葉	銅板	銅板	銅板(銅板)	13.0	5.1	①	銅板	良好	
第77-03	図版30	D5	葉	銅板	銅板	銅板(銅板)	15.0	5.9	①	銅板	良好	
第77-04	図版30	A3	葉	銅板	銅板	銅板(銅板)	13.0	4.7	①	銅板	良好	
第77-05	図版30	D5	葉	銅板	銅板	銅板(銅板)	7.3	3.3	①	銅板	良好	中々不良
第77-07	図版30	SI002	銅板	銅板	銅板(銅板)	11.1	4.4	①	銅板	良好		
第77-08	図版30	B4	葉	銅板	銅板	銅板(銅板)	11.0	4.8	①	銅板	良好	内蔵保存(銅板)
第77-09	図版30	A3	葉	銅板	銅板	銅板(銅板)	8.9	1.6	①	銅板	良好	中々不良
第77-10	図版30	A6	葉	銅板	銅板	銅板(銅板)	10.0	1.7	①	銅板	良好	同一層
第77-11	図版30	D6	葉	銅板	銅板	銅板(銅板)	9.0	3.0	①	銅板	良好	
第77-12	図版30	A5	葉	銅板	銅板	銅板(銅板)	16.0	6.4	①	銅板	良好	
第77-113	図版30	AC4	葉	13層-銅板	外:銅板内:銅板	銅板(銅板) 銅板(銅板)	14.7	16.1	①	銅板	良好	
第77-114	図版30	D5	葉	銅板	銅板	銅板(銅板)	7.3	2.6	①	銅板	良好	
第77-115	図版30	D6	葉	銅板	銅板	銅板(銅板)	8.8	9.0	①	銅板	良好	内蔵保存(銅板-銅板)
第77-116	図版30	B4	葉	銅板	銅板	銅板(銅板)	8.8	4.3	①	銅板	良好	内蔵保存(銅板)
第77-117	図版30	D5	葉	銅板	銅板	銅板(銅板)	9.4	6.3	①	銅板	良好	
第77-118	図版30	D6	葉	銅板	銅板	銅板(銅板)	10.0	15.2	①	銅板	良好	内蔵保存
第77-119	図版30	D6	葉	銅板	銅板	銅板(銅板)	3.9	5.0	①	銅板	良好	
第77-120	図版30	D5	葉	銅板	銅板	銅板(銅板)	3.4	1.8	①	銅板	良好	内蔵保存
第77-121	図版30	AA-5	葉	銅板	銅板	銅板(銅板)	9.2	1.3	①	銅板	良好	中々不良

第6章 玉作関連の遺物と石製品

第1節 玉作関連の遺物（第78～88図、第4・5表）

1 構成と分布

玉作関係遺物の構成と分布を第4表で示す。剥片と破片で全体の9割以上を占め、特に破片が多い。管玉の製作が盛んに行われたと考えられる。剥片と破片以外は形割各類が多いが、調整や研磨・穿孔各類も比較的多くあり、管玉製作の各工程で生じる資料が組合わさる。つまり、管玉製作工程のほぼ全体が遺されている。また東地区では、施溝痕をもつ資料がごく少量だがみられた。石質は、緑色や淡緑色の緑色凝灰岩が大半である。また、鉄石英が18点と僅かにあり、主に荒割や形割、剥片と破片からなる。他に翡翠製の勾玉3点と形割1点、ガラス製の勾玉1点と小玉13点が出土した。工具では、玉錐や玉錐、鉄製品等はないが、砥石が少量ある。

分布は特に2箇所集中する。西地区B6・7区で検出したSI051の南西部の覆土から特に多く出土し、全体の7割を占める。床面直上は僅かであり、住居廃絶後に廃棄されたと考えられる。東地区M・N6区で検出したSB006の北東隅からも多く出土し、全体の2割を占める。隣在するSD022・023を境に北や東側は分布が疎らとなる。出土状況からSB006に伴うと推察される。他に、SI051東側やSB006西側の住居群でも覆土から少量出土している。

器種別の分布状況について記す。SI051の集中域では、製作工程全体の資料が多く出土し、偏りはみられない。対してSB006の集中域では、荒割や形割の大型品がなく、製作工程後半の資料からなる。管玉の製品もなく偏りがみられる。また、SI051東側の住居群の分布域は、荒割や形割大型品の割合が高く対照的である。他にSB006西側のSI001では、偏らず少量出土した。翡翠製やガラス製の玉類は、大半が2箇所の集中域だが、SI001でもやや出土した。

2 玉作関係遺物の形態

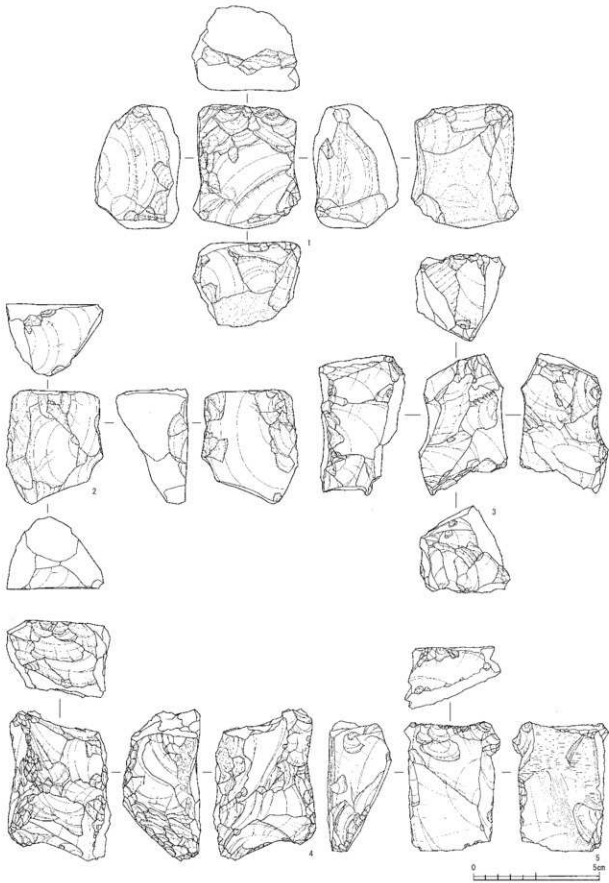
玉作関係遺物を主に剥離面の構成や形状の他、調整や研磨・穿孔等を基に類別し、管玉の製作工程における各類別の位置付けを行う。

荒割(第78～81図) 荒割は、遺跡に搬入された原石が剥片剥離等により分割され、不整ながら表裏や上下左右に面が作出される段階である。大型で不整な形状を呈す。以下のように類別した。

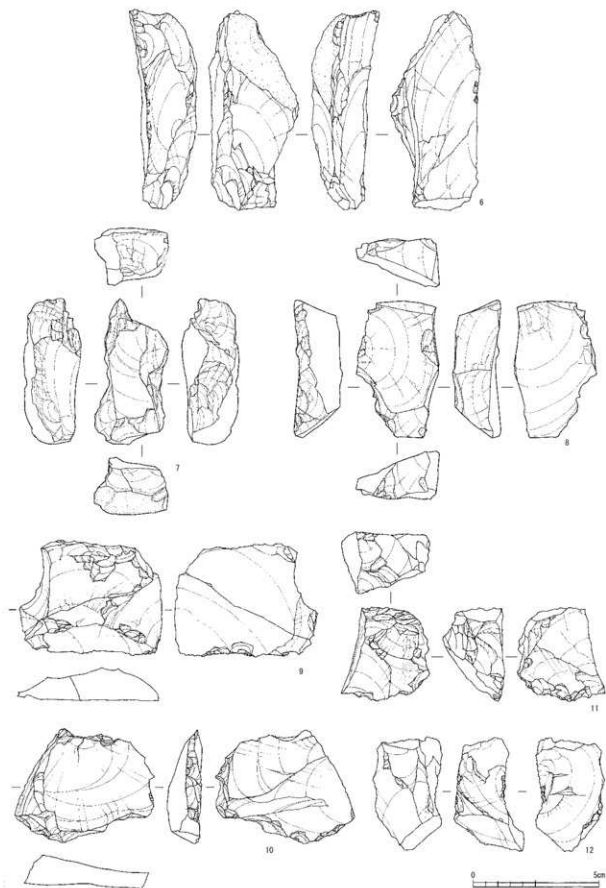
荒割1類(第78・79図) 資料中では製作工程の最も初期的な一群である。大型厚手の角形を呈す。1は、拳大程の楕円礫が素材で、下方から分割される。表面から剥離され上面と右側面、裏面から剥離されて左側面が作出される。2は、左端の礫面を打面とし、右方へ剥離される。また左端から剥離され、上面が作出される。断面が三角形となる。3と4は、裏面から剥離され、3は上下面と左側面、4は上面が作出される。また4は、表面の稜上が細かく調整される。5は、表面から剥離され、上面が作出される。裏面の上半は短軸方向、下半は斜行する研磨痕がみられる。6は、左端から分割される。裏面から剥離され右側面が作出される。表面上半に礫面を残し、上面は未作出である。7は、上方から分割される。表面から剥離され、上下左右の各面が作出される。8は、左側辺下半が調整される。

荒割2類(第79図) 荒割から形割へ至る過程で生じた板状の剥片である。9は表面上端と裏面下端、10は下端と右側辺が調整される。

荒割3類(第79・80図) 荒割1・2類が分割された一群で、端部や側面に表裏と直交する面が作出される。形割各類より大型の角形を呈す。11と12は幅広で、11は下方から分割される。表面から剥離され左右側



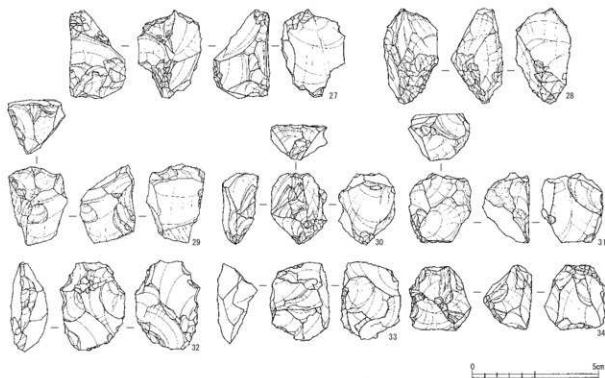
第78図 玉作関係遺物実測図1 (縮尺 2/3)



第79図 玉作関係遺物実測図2 (縮尺 2/3)



第80圖 玉作関係遺物実測図3 (縮尺 2/3)



第81図 玉作関係遺物実測図4 (縮尺 2/3)

面が作出される。また、上面は調整され、表面下半に斜行する研磨痕がみられる。12は、右端から分割され、裏面が大きく凹む。左側面は作出されず、下面は傾く。13と14は、縦長の形状を呈す。13は、上面中央と裏面下端に短軸方向の施溝痕をもち、下端から分割される。14は、裏面から分割され右側面が作出される。下面は未作出で、表面下半の稜上が調整される。15~19は、断面が三角形形状を呈す。15と16は、左端から分割され、左側面が作出される。16は、側辺がほぼ平行し、下面は調整される。17は表面の稜、18は右端から分割され、下面が作出される。19は、下面が未作出である。20~22は、側辺がほぼ平行し、縦長の形状を呈す。20は左端、21は右端から分割され、上下面は未作出である。21は、器体下半が大きく反る。22は、左端から分割され、裏面に打点と対向する小剥離面がある。左側面は凹み、上下面は傾く。23~26は、側辺がほぼ平行し細長で、角柱形に近い形状を呈す。23は左端、24は右端から分割され、裏面に打点と対向する小剥離面がある。共に下面は未作出である。24は、表面の稜が細かく調整される。25は、器体上半が厚手で、僅かに下面をもつ。26は、左端から分割され、表面に打点と対向する小剥離面がある。上面は調整されるが、下面は未作出である。

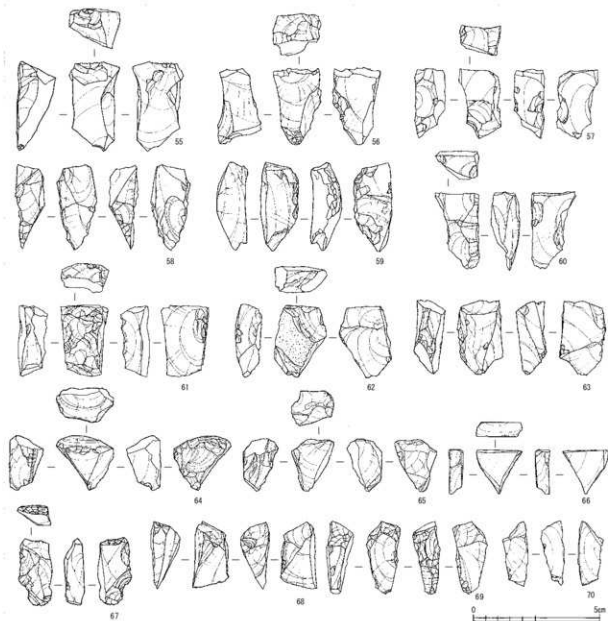
荒割4類(第81図) 荒割から形割へ至る過程で生じた楔形状の剥片である。多くは上下面が未作出で、断面は三角形形状を呈す。また、側辺は平行せず、裏面と側面が直交しない。27は、上端から分割され、表面下端が調整される。28は下方、29は上方から分割される。29は、上下に面をもつが大きく傾く。30は上端、31は右端から分割される。共に表面の稜が細かく調整される。32は左下端、33は左上端から分割される。32は、上下左右に面をもたない。33は、表面から剥離されて上面が作出される。34は、表面稜上から上方へ向け分割される。

形割(第82~84図) 荒割3・4類が長軸、短軸方向に分割され、表裏と上下左右に面が作出される段階である。各面が平行、直交するよう分割され、角柱形に成形される。以下のように類別した。

形割1類(第82図) 製作工程で荒割各類の次に位置する。荒割3・4類が分割された一群で、幅広い角柱形を呈す。35は、左方から分割される。次に表面稜上から剥離され右側面が作出される。36は、下方



第82圖 玉作関係遺物実測図5 (縮尺 2/3)



第83図 玉作関係遺物実測図6 (縮尺 2/3)

から分割される。表面の上下端に対向する複数の剥離面がみられ、楔形石器状を呈す。37は、右端から分割される。上面は調整され、下面は大きく傾く。断面が三角形状を呈す。38は、下端から分割される。やや薄手で左側面に凹凸がある。39～41は、左端から分割される。39は、裏面に打点と対向する小剥離面がみられる。また下面は傾き、断面が厚手の三角形状を呈す。41は、側辺が平行し表裏と直交するが、上面が傾く。42は、表面の稜上から分割され、上面と左側面が作出される。断面が厚手の三角形状を呈す。43～45は、右端から分割される。43は、表裏が平行せず器体上半に厚みをもつ。44は、左側面が凹み、断面は厚手の三角形状を呈す。45は、僅かに下面をもつ。46は、上端から分割される。上面は調整されるが、下面と左側面が傾く。47は、右方から分割され、上面と側面が調整される。表裏が平行せず、下面が傾く。48と49は、上方から分割される。48は、下面が大きく凹み、断面が三角形状を呈す。50と51は、左端から分割され、僅かに下面をもつ。52と53は、下方から分割され、下面が傾く。54は、右上端から分割される。

形割2類(第83図) 製作工程で荒割3・4類や形割1類の次に位置し、これらが分割された一群である。多くは断面が扁平な台形状になり、縦長の角柱状を呈す。55と56は、上端から分割される。55は、表裏が平行せず、器体上半に厚みをもつ。56は、分割により表面が作出され、下面は調整される。57～63は、左端から分割される。57と60は裏面、62は左側面に打点と対向する小割離面がある。57と63は、表裏と側面がほぼ平行するが、上下面は傾く。59は分割により左側面、63は下面が作出される。61は、側面や各面がほぼ平行、直交する。62は、右側面が屈曲し、下面は傾く。64～66は、平面が三角形状を呈す。上端から分割され、64と66は上面、65は表面が作出される。64は、表面左端に施溝痕をもつ。66は、表裏が平行し、断面は薄手の板状を呈す。67～70は、側面がほぼ平行する。67は、右端から分割され、右側面が作出される。上面は調整され、僅かに下面をもつ。68は、上端から分割され、上面が作出されるが傾く。器体上半に厚みをもつ。69は、右端から分割される。上面は傾き、僅かに下面をもつ。右側面に調整される。70は、左端から分割され、裏面に打点と対向するバルブがある。上面は傾き、僅かに下面と左側面をもつ。

形割3類(第84図) 形割1・2類が長軸、短軸方向に分割された一群。多くは断面が扁平となり、側面はほぼ平行して細長の角柱形を呈す。71～74は、表面に稜をもち、断面が三角形を呈す。71と72は、右端から分割され、上面と右側面が調整される。72は、裏面に打点と対向するバルブがある。73は、上端から分割される。側面は未作出で、上下面が傾く。74は、左端から分割される。左側面は調整されるが、大きく凹む。75と76は、表面に稜をもち、断面が多角形となる。75は、左端から分割される。表面以外の各面はほぼ平行、直交する。76は、表面の稜上から分割され上面が傾く。77～87は、断面が扁平な台形や長方形を呈す。77は、上端から分割され、上面が作出される。器体上半が厚く、僅かに下面をもつ。78～83は、左端から分割される。78は、分割により表面が作出される。上面は調整され下面は傾く。79は、上下面が大きく傾く。80は、左側面が調整されるが、下面と右側面は未作出である。81は、分割により左側面が作出される。表面の稜上から調整されるが、器体中央に厚みをもつ。82は、下面が未作出で、器体上半に厚みをもつ。83は、右側面が屈曲し、僅かに下面をもつ。84は、下端から分割され、下面が作出される。右側面は調整されるが、下面が傾く。85～87は細身の一群で、右端から分割される。85と86は、裏面に打点と対向するバルブがある。86と87は、上下面が傾く。

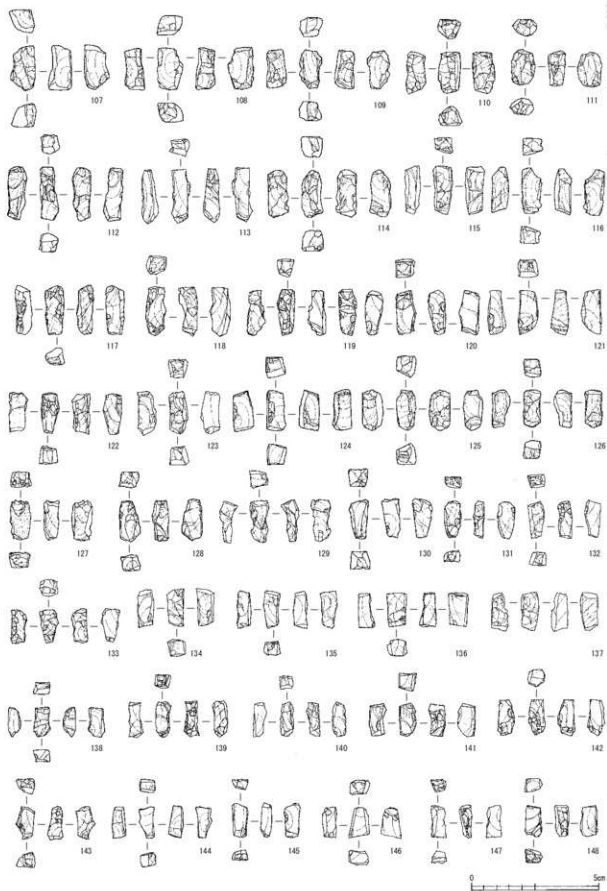
形割4類(第84図) 形割2・3類が分割された一群。形割3類と同様、多くは断面が扁平で側面はほぼ平行するが、幅広い角柱形を呈す。88～96は、やや大型で断面が厚みをもつ。さらに分割されて形割3類が作出されたとも考えられる。88と89は、右端から分割され、88は右側面、89は表面が作出される。88は、断面が多角形だが上面は傾く。89は、表面以外の各面がほぼ平行、直交するが、器体上半に厚みをもつ。90は、左端から分割され、表面が作出される。表面に打点と対向するバルブがある。91は、下端から分割される。器長に対し厚手なため、形割の過程で生じた調整薄片とも考えられる。92、94、96は、上端から分割され、上面が作出される。92と94は、裏面が調整されるが、92は下面と左側面が傾く。93は右端、95は左端から分割される。95は、各面がほぼ平行、直交する。96は、断面が厚手の台形で、表面に稜をもつ。97～106は、小形で断面が扁平である。97～99と102、103、106は、右端から分割される。分割により97は裏面、他は右側面が作出される。97は、裏面に打点と対向するバルブがある。下面が大きく傾く。98は、各面がほぼ平行、直交する。99は、左側面が大きく傾く。100と101は、上端から分割され、上面が作出される。100は、左側面が調整されるが、右側面が傾く。103は、右側面に打点と対向するバルブがある。表裏が平行せず、左側面が湾曲する。104は、左端から分割され、左側面が作出される。上面が大きく傾く。105は、下端から分割され、下面が作出される。106は、上下面が傾き、左側面が屈曲する。



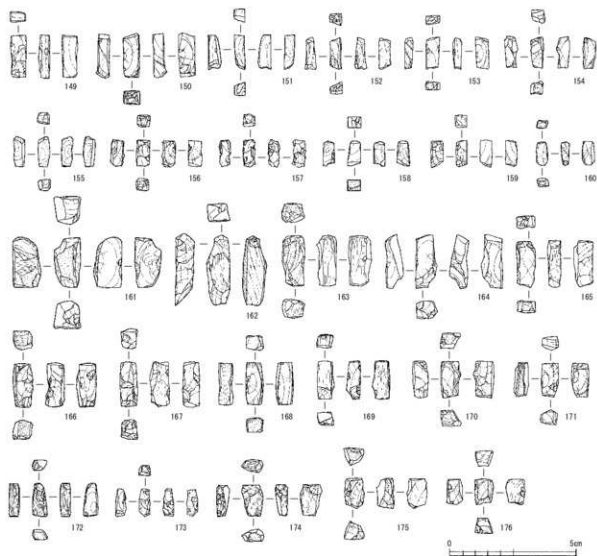
第84図 玉作関係遺物実測図7 (縮尺 2/3)

調整(第85図) 形割3・4類の各面が平行、直交するよう調整され、整った角柱形に作出される段階である。また、研磨も施されはじめる。

調整1類(第85図) 製作工程で形割3・4類の次に位置する。多くは細身で各面がほぼ平行、直交するが、器体に凹凸や反りがある。107~109, 115, 121~123, 126~128, 130, 131, 137, 147, 148は、左端から分割される。分割により、108, 121, 123は左側面, 126, 137は表面が作出される。107は、上下面と左側面が傾く。108, 109と122, 123は、右側辺が屈曲する。130と131は、裏面に打点と対向するバルブがある。137は、上下面が傾く。110~113, 116~120, 124, 132~136, 138, 141~145は、右端から分割される。分割



第85圖 玉作関係遺物実測図8 (縮尺 2/3)



第86図 玉作関係遺物実測図9 (縮尺 2/3)

により、118、120、136は表面、124、134、143、144は右側面が作出される。110と111は、断面が多角形を呈す。116と134、138は、上下面が傾く。120と133、141は右側面、143は左側面が屈曲する。132、138、141は、裏面に打点と対向するバルブがある。114、125、146は、上端から分割される。分割により、125は表面、146は上面が作出される。129、139、140は下端から分割され、分割により139は表面が作出される。140は、下面が傾く。

調整2類(第86図) 調整1類と同様に製作工程で形制3・4類の次に位置する。細身で器体に凹凸や反りが少なく、各面がほぼ平行、直交する。149と159、160は、左端から分割される。分割により、149は表面、159は左側面が作出される。159は、下面が傾く。150～158は、右端から分割される。分割により、155と156、158は右側面が作出される。また、150は表面、154は裏面、155は右側面に打点と対向するバルブがある。150～153は上下面、157は下面が僅かに傾く。

調整3類(第86図) 製作工程で調整1・2類の次に位置し、調整段階の後半にあたる。研磨後も剥離調整されており、併用して調整されたと考えられる。161～164は、作出が不十分で、器体に凹凸や反りがある。161は、表面右端に長軸方向の施溝痕をもつ。右端から分割されて右側面が作出され、打点と対向

する小剥離面がある。厚手で幅広い形状を呈す。162は上端、163は左端から分割され、左側面が作出される。162は、僅かに上面をもち、下面が傾く。163は、上面が調整後に研磨される。164は、右端から分割され、表面が作出される。表面に打点と対向するバルブがある。下面を調整後、右側面が研磨される。165～173は細身で、各面がほぼ平行、直交する。165と166は、右端から分割される。165は、分割により右側面が作出される。166は、裏面に打点と対向するバルブがある。166は表裏面と右側面、167は表裏面の稜も研磨により円滑になっている。168、171、172は左端から分割され、168と171は分割により表面が作出される。171は、表面に打点と対向するバルブがある。172は、左右側面が研磨により稜が作出され、断面は多角形に近い形状となる。173は、裏面が研磨後に調整される。174～176は、幅広い角柱形で形割4類に近い形状を呈す。174は、左側面の稜が研磨により円滑となっており、右側面は研磨後に調整される。175は、左端から分割され、左側面が作出される。176は、右端から分割され、表面が作出される。裏面は研磨後に調整される。

研磨(第87図) 製作工程で調整3類の次に位置する。表裏左右の各面は長軸方向、上下面は表裏や短軸方向に研磨され、整った多角柱形に作出される段階である。

研磨1類(第87図) 多くは表裏左右各面の稜線が平行せず、やや不整な多角柱形を呈す。177～182はやや大型の一群。178は、上下面に稜をもつ。179は、稜線がほぼ平行し、整った多角柱形となる。180は、やや扁平な形状を呈す。181は、側辺が平行せず、下端が細くなる。182は、細身で整った多角柱形を呈す。上面は円滑となっている。183～186は、小形だがやや幅広い一群。183は、やや扁平な形状を呈す。184は、側辺が平行せず、上端が細くなる。また、表裏面と上面の稜上も研磨される。185は、上下面に丸みをもつ。186は、下端がやや細くなる。187～189は、小形で細身の一群。187は、上端がやや細くなる。188は、上下面に稜をもつ。

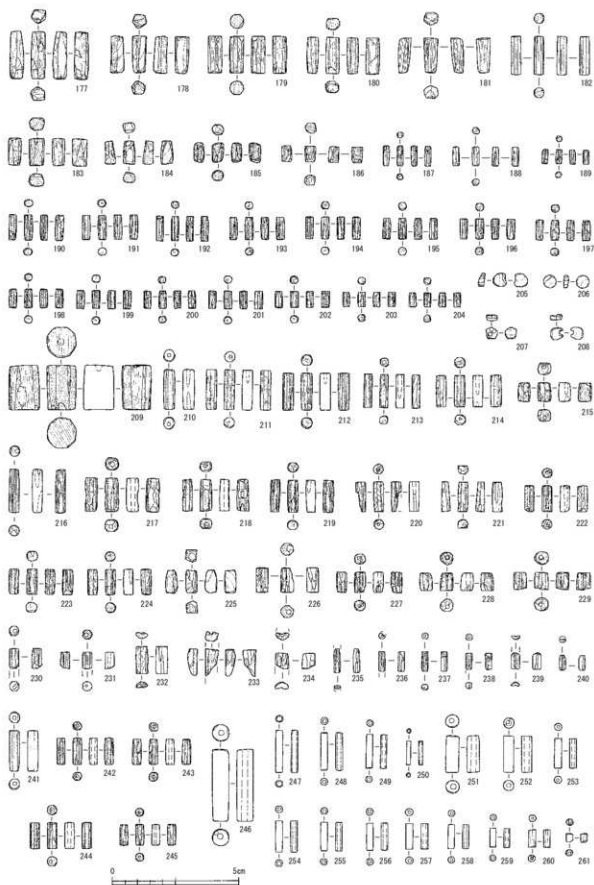
研磨2類(第87図) 表裏左右各面の稜線がほぼ平行し、整った多角柱形を呈す。いずれも小形で細身だが、198～204は短小である。上下面中心に点状痕があり、穿孔直前に付されたと考えられる。

研磨3類(第87図) 調整3類から研磨や穿孔へ至る過程で、上下端を輪切りにするように側方から剥離された一群である。側面全周に多角柱形の長軸にあたる方向で研磨痕があり、平面は多角形、断面は盤状を呈す。穿孔の段階で上下面の調整等により生じたと推察される。205と206は、端面にあたる表面が未研磨である。207と208は、表面が研磨され穿孔される。207は未貫通、208は穿孔が側方へずれている。

穿孔(第87図) 製作工程で研磨2類の次に位置する。整った多角柱形の上下面から両方向に穿孔されている。

穿孔1類(第87図) 穿孔途中で貫通せず、209と211、212は下面中心に点状痕が残る。209は、やや大型で幅広いである。上面から僅かに穿孔される。210～214は、やや大型の一群。210と214は、上下面から両方向に穿孔されるが未貫通である。また214は上面からは深く、下面は僅かに穿孔される。211～213は上面からだが、211と212は浅く、213は深く穿孔される。また211は穿孔が中心からややずれ、213は孔径が大きい。215は、小形でやや幅広くあり、不整な多角柱形を呈す。上下面の中心からずれて両方向に穿孔されるが未貫通である。また、上面からは深く、下面は浅く穿孔される。

穿孔2類(第87図) 多くは上下面の中心からずれて穿孔され、器体が破損した失敗品である。216～229は器体一部が破損し、216～224はやや大型の一群。216は裏面下半と右側面上端、217は裏面中央が破損。217は、上面から2回穿孔される。218は裏面中央と上下端、219は右側面上端、220は裏面が破損。219は、下面中心に点状痕がある。221は、裏面破損後に再度長軸方向に研磨される。また、下面中心に点状痕



第87図 玉作関係遺物実測図10 (縮尺 2/3)

がある。222は裏面下端と右側面上端、223と224は裏面上半が破損。222は、下面から2回穿孔される。また223は上下面、224は下面中心に点状痕がある。225～229は、小形だがやや幅広いの一群。225は表面上半、226は右側面が破損。また226は、上面から2回穿孔される。227～229は、裏面下半が破損。227は、下面から2回穿孔される。228と229は、側辺が平行せず上端が細くなる。229は、下面に貫通した孔とは別の穿孔痕が僅かにある。230と231は、下半が破損。230は、下面から2回穿孔される。231は、左側面にも穿孔痕がある。232～240は、裏面側が破損し半載している。232～234は、やや大型の一群。232と233は、上下面からの穿孔が交差する。233は上下端、234は下端も破損。234は孔断面が漏斗状となる。235～240は、小形で細身の一群。235～237は、上下面からの穿孔が交差する。236は、下端も破損。238は、孔中程も破損。239と240は、孔断面が直線状となる。

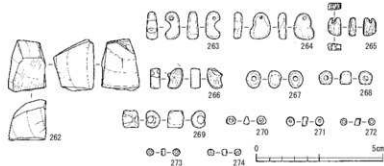
穿孔3類(第87図) 穿孔は貫通するが仕上げの研磨はされておらず、断面が多角形を呈す。241は、やや大型のもの。242は上下面、244は下面が中心からずれて穿孔される。また242は、上面の孔周辺が縁取りされる。245は、表面の稜上が研磨されており、仕上げに至る過程を示すと考えられる。

仕上げ(第87図) 製作工程で穿孔3類の次に位置する。多角柱形の稜上を研磨して円滑に仕上げ、整った円柱形の管玉が作出される。多くは、法量が器長1.0～1.5cmで径0.3cmを測る。246は大型で、下面は中心からずれて穿孔される。研磨や穿孔の各類に246の未製品に相当する資料がみられない。247～250は、細身の一群。247は鉄石英製。長身に孔径がやや大きい。250は、やや小形である。251と252は、やや幅広いの一群。252は、上面の孔径がやや大きい。253～258は中形で、製品の多くを占める。253は、器体に稜が僅かに残る。259と260は、短小の一群。260は鉄石英製。上面がやや傾き、器体に稜が僅かに残る。261は、小玉状を呈す。上下面とも研磨されて仕上げられ、下面は傾く。

翡翠製形割(第88図) 形割4類に相当する。側辺がほぼ平行し、幅広い角柱形を呈す。やや大型で断面が厚みをもつ。また、表面が研磨される。

勾玉(第88図) いずれも平面がD字形を呈し、断面は扁平である。片側から一方に穿孔される。263～265は翡翠製。263はやや細身に、腹部が明瞭に凹む。尾部に向け肥厚して丸みをもつ。また、表面から穿孔される。264は幅広く、腹部が緩く凹む。裏面から穿孔される。265は、頭部と尾部の境が不明瞭で、垂玉状を呈す。また側面も平坦で、断面は扁平な板状となる。下端に孔の一部が残る、裏面から穿孔される。再加工され、頭部の表面から穿孔される。266は、良質のガラス製で透明な青色を帯びる。腹部は緩く凹み、頭部の孔周辺は面取りされる。また、表面中央が僅かに穿孔される。

小玉(第88図) いずれもガラス製。267～269は、良質で透明な紺色を帯びる。平面は稜をもつ楕円形を呈し、表裏とも孔周辺に面をもたない。269は、器体左半が薄手で、ガラス材が僅かに一周する。また、上端に表裏方向の条痕をもつ。270～274は粟玉で、270～272は良質で透明な紺色、273と274は青色を帯びる。270と271は平面が楕円形で、器体に凹凸や反りをもつ。272は表裏とも面が傾く。273と274は平面が円形で整った形状である。共に表裏の孔周辺が面取りされる。



第88図 玉作関係遺物実測図11 (縮尺 2/3)

3 高柳・下安田遺跡における管玉製作技術

以上の各類別を管玉の製作工程に位置付けると以下の通りである。

越前には足羽山周辺や竹田川上流域等に緑色凝灰岩の産地がある。礫面をもつ剥片は少量なため分割礫や大型の板状剥片の状態では、何らかの方法や経路により遺跡に搬入されたと考えられる。

荒削の段階では、原石が剥片剥離等により分割され、不整ながら表裏や上下左右に面が作出される。荒削1類は大型厚手の角形、荒削2類は板状を呈し、資料中では製作工程の最も初期的な一群である。荒削3類は縦長の形状を呈し、端部や側面に表裏と直交する面が作出される。荒削4類は楔形状を呈す。上下面は未作出で側辺が平行せず、表裏と側面が直交しない。

形削の段階では、各面が平行・直交するよう長軸・短軸方向に荒削3・4類が分割され、表裏と上下左右に面が作出される。形削1類は幅広の角柱形、形削2類は縦長の角柱形で断面が扁平な台形状を呈す。形削2類は、形削1類からも分割して得られたと考えられる。形削1・2類を分割して形削3類へ至る。形削3類は、側辺がほぼ平行する細長の角柱形で、断面が扁平な台形や長方形を呈す。形削4類は、小形で幅広の角柱形となる。

形状や法量からみて、形削3・4類が管玉の素材と考えられる。荒削から形削は、各面が平行・直交するよう長軸・短軸方向に分割を繰り返して、管玉の素材を作出していく段階と考えられる。また、分割で器体に凹凸や反りが生じないように配慮されたかと推察される。形削の段階では、短軸方向に分割された主剥離面に打点と対向する小剥離面やバルブをもつ例が多くある。分割時に打点と対向する位置に当て具を据え、加撃の反作用で生じたかと推察される。また、荒削段階から研磨痕をもつ例がみられた。

調整の段階では、形削3・4類で器体の凹凸や反りを除去するよう調整される。後半には研磨も施される。調整1・2類は、各面がほぼ平行・直交し細身で整った角柱形を呈す。調整3類は、調整段階の後半にあたる。研磨後も剥離調整されており併用される。

研磨の段階は、調整3類の次に位置する。表裏左右各面は長軸方向、上下面は表裏や短軸方向に研磨され、整った多角柱形となる。研磨1類は、表裏左右各面の稜線が平行せずやや不整だが、研磨2類は整形が進み整った形状となる。また研磨2類は、上下面中心に穿孔の目印となる点状痕が付されており、穿孔段階の直前にあたる。研磨3類は、多角柱形の上下端を輪切りにするよう側方から剥離される。研磨や穿孔の段階で上下面の調整により生じたと考えられる。

穿孔の段階は、整った多角柱形の上下面から両方向に穿孔される。上面から三分の二ほど穿孔した後、下面から穿孔される。穿孔1類は、穿孔途中の未貫通で下面に点状痕が残る。穿孔2類は、上下面の中心からずれて穿孔され、器体が破損した失敗品である。器体の一部や下半、裏面側が破損した半製品等がある。穿孔3類は、穿孔が貫通している。

仕上げの段階は、穿孔3類の次に位置する。多角柱形の稜上を研磨し円滑に仕上げ、整った円柱形の管玉が作出される。管玉は、器長1.0～1.5cmで径0.3cmが多いが、大型や細身の一群もある。

東地区のSB006集中域の一群と西地区のSI051集中域の一群は、伴出した土器群からみて時期差がある。共に弥生時代後期後半だが、前者は法仏式、後者は月形式でも後半に位置付けられる。各類別と管玉製品の形態的特徴や製作技術で大きな相違は看取できないが、SB006集中域の一群には施溝痕をもつ資料が僅かにみられた。施溝により分割する技術が、法仏式まで残存していたとも考えられる。

第1節 玉作関連の遺物

第4表 玉作関係遺物組成表

地区	実測1	実測2	実測3	実測4	印刷1	印刷2	印刷3	印刷4	調査1	調査2	調査3	観測1	観測2	観測3	観測4	観測5	学孔1	学孔2	学孔3	上坪1	通存	録行	計		
A4								1															1	3	
A5					1																	1		2	
A6	1	1	4	1	4		2	1		1	1											21	68	105	
A7									1		1			1								5	31	39	
B3																							1	1	
B5	1	1	1		1		2	1														14	31	52	
B6		1	10	3	15	15	22	31	22	5	8	5	13	6	4	39	2	5	446	3367		4019			
B7	1	2	2		3	7	14	25	10	2	4	1				1	11	1	3	178	1138	1400			
C1								1														1	1	2	
C4																						1	1	2	
C5				1	2	1											1					10	8	23	
C6	1			1	1	1	1	3									1	1	2			29	19	58	
C7																						5	3	8	
D5				1	2	1	1	3														9	5	21	
D6				2	2	1	1	3	4					2							1	4	12	31	
D7				1	2	1			1								1					6	1	12	
E3				1	1	1	1	4	1	1												12	11	32	
E6				1	2	2	2	1	1													11	8	27	
K7								1														1	1	2	
K9																	1	1				1	1	2	
F6						2					1	1										6	6	16	
F7																						1	1	1	
G5																						1	1	1	
G6					1																			1	
J6									1															1	
J6				1					3													9	2	15	
K5																	1							1	
K6	2	1	2	1			3	4	4	1	4	1		2				1	2	18	119	165			
K7									1										1	1	1	2	6		
L3																							1	1	
L6	1		2	1	3				1								2			6	20	30	66		
L7									1								1							2	
M6					1			1	1	3	1	1								1	9	158	176		
M7	1																					1	2	2	
N5																							2	2	
N6							3	4	2					3		1	1	9				82	1231	1336	
O5																						1	1	1	
Q7																							1	1	
玉作																	2	2				2	6	29	51
計	8	5	22	10	39	34	52	81	53	13	20	14	14	30	10	10	69	6	21	911	6295	7387			

第5表 玉作関係遺物観察表

番号	探出番号	図録番号	地区	遺物	種類	形	色	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)
1	第78区	図録41	K6	S1001	印刷1型	下段は右側と左側から脱落される。裏面に線画を多く残す。	図録48 線画写真	4.9	4.3	2.4	89.5
2	第78区	図録41	L6	S1001	印刷1型	僅かに下段を欠す。	図録48 線画写真	4.6	3.6	2.9	43.6
3	第78区	図録41	A6	S1001	印刷1型	膠漆に凹凸や反り。上段は脱落。		5.6	3.5	3.4	47.9
4	第78区	図録41	B7	S1001	印刷1型	膠漆に凹凸や反り。裏面左端上下に遺れ。	図録48 線画写真	6.9	3.9	3.1	87.0
5	第79区	図録41	D5	包含型	印刷1型	僅かに下段を欠す。	図録48 線画写真	5.1	3.8	2.5	52.5
6	第79区	図録41	C6	包含型	印刷1型	僅かに下段を欠す。		7.9	3.5	2.7	47.3
7	第79区	図録41	K6	S1002	印刷2型	膠漆に凹凸や反り。裏面に線画。		5.8	2.9	2.3	36.7
8	第79区	図録41	M7	包含型	印刷1型			5.5	3.3	1.9	39.1
9	第79区	図録41	A6	S1001	印刷2型			4.5	5.4	1.3	32.3
10	第79区	図録41	B7	S1001	印刷2型			4.5	5.5	1.3	39.3
11	第79区	図録41	B7	S1001	印刷3型	下段に線画を残す。		3.7	3.5	2.4	39.2
12	第79区	図録41	A6	S1001	印刷3型	右へ上段は脱落。		4.4	2.7	2.7	20.3
13	第80区	図録41	K6	S1002	印刷3型	膠漆に凹凸や反り。厚減が大きい。	図録48 線画写真	3.5	1.9	2.0	11.3
14	第80区	図録41	A6	包含型	印刷3型	右側面に凹む。		9.0	2.6	1.7	17.1
15	第80区	図録41	J6	S1003	印刷3型	右側面に凹む。僅かに下段を欠す。		2.6	1.9	1.6	6.1
16	第80区	図録41	L6	S1001/SK1	印刷3型			2.1	2.6	1.6	7.1
17	第80区	図録41	K6	S1003	印刷3型			3.2	3.3	1.5	30.0
18	第80区	図録41	B6	包含型	印刷3型	上段と左側面が全面脱落。		3.9	2.6	1.9	11.2
19	第80区	図録41	B6	包含型	印刷3型	膠漆に凹凸や反り。		3.9	2.6	1.9	11.2
19	第80区	図録41	B6	包含型	印刷3型	裏面に平頭状が。左側面に凹む。		3.2	2.7	1.4	8.6
20	第80区	図録42	B6	包含型	印刷3型			3.9	2.1	1.2	15.6
21	第80区	図録42	A6	包含型	印刷3型	右側面に脱落。		4.6	2.0	1.5	9.8
22	第80区	図録42	D6	S1001	印刷3型	右へ下段脱落。		4.6	1.9	1.5	14.1
23	第80区	図録42	B6	S1001	印刷3型	裏面に凹む。		4.3	1.5	1.5	10.0
24	第80区	図録42	B6	S1001	印刷3型	膠漆に凹凸や反り。		4.9	1.3	1.0	6.4
25	第80区	図録42	B6	S1001	印刷3型	裏面に脱落。		3.9	1.6	1.9	10.4
26	第80区	図録42	B6	包含型	印刷3型	膠漆が下段に欠す。裏面に脱落。		3.9	1.4	1.1	5.9
27	第81区	図録42	E6	包含型	印刷4型	膠漆に凹凸や反り。膠漆下段は厚みを欠す。		3.4	2.5	2.2	13.7
28	第81区	図録42	C7	包含型	印刷4型	裏面に下段に遺れ。		3.6	2.2	2.0	14.2
29	第81区	図録42	A6	S1001	印刷4型	上へ下段は脱落。		3.1	2.3	2.3	12.6
30	第81区	図録42	C5	包含型	印刷4型	裏面に下段に遺れ。		2.8	2.3	1.4	8.0
31	第81区	図録42	D5	包含型	印刷4型	右へ上段は脱落。		2.7	2.4	1.9	10.4
32	第81区	図録42	B6	S1001	印刷4型	中央を欠す。		3.5	2.6	1.5	11.6
33	第81区	図録42	B6	S1001	印刷4型	膠漆に凹凸や反り。		3.1	2.3	1.6	9.9
34	第81区	図録42	C6	S1002/P4	印刷4型	上段から左側面にかけ遺れ。膠漆に凹凸や反り。		2.5	2.4	1.9	10.4

第6章 玉作関連の遺物と石製品

番号	採出番号	調査番号	地区	遺物	説明	形 態	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重量(g)
25	82	42	D6	S1051	形跡1跡	管中に土層をもつ。管身に凹凸や反り。	2.4	2.8	1.5	12.6
26	82	42	D6	S1051	形跡1跡	管中に土層をもつ。右側面に線道を残す。	3.1	3.0	1.3	13.7
27	82	42	D6	S1051	形跡1跡	右側面に線道を残す。	1.9	1.9	1.2	6.7
28	82	42	D7	S1051	形跡1跡	右側面に線道を残す。	2.9	2.5	1.2	6.7
29	82	42	E4	結合部	形跡1跡	右側面に線道を残す。	2.8	2.1	1.8	10.1
40	82	42	D6	S1051	形跡1跡	管中に土層をもつ。管身に凹凸や反り。	2.6	1.4	1.5	6.1
41	82	42	D4	S1055	形跡1跡	裏面と下面が凹む。	2.6	2.4	1.9	15.4
42	82	42	A6	S1051	形跡1跡	管中に土層をもつ。	1.9	2.3	2.3	13.6
43	82	42	A5	結合部	形跡1跡	管中に土層をもつ。	1.9	2.6	1.8	8.0
44	82	42	C6	結合部	形跡1跡	下面に線道を残す。	2.1	2.1	2.0	7.9
45	82	42	D5	結合部	形跡1跡	管身に凹凸や反り。	2.0	2.6	1.3	5.7
46	82	42	B6	S1051	形跡1跡	管身に凹凸や反り。	2.1	2.0	1.4	5.5
47	82	42	C5	結合部	形跡1跡	右側面に線道を残す。	2.7	2.3	1.7	6.1
48	82	42	D6	S1051	形跡1跡	右側面に凹凸や反り。	2.1	1.9	1.3	6.1
49	82	42	D2	結合部	形跡1跡	下面に線道を残す。管身に凹凸や反り。	2.0	2.0	1.4	5.5
50	82	42	C3	結合部	形跡1跡	管身に土層をもつ。凹凸や反り。	2.2	1.9	1.5	6.8
51	82	42	D5	結合部	形跡1跡	管身に土層をもつ。表面上下の段上に溝あり。	2.2	2.0	1.4	6.1
52	82	42	D4	S1051	形跡1跡	管身に凹凸や反り。	2.1	1.7	1.3	6.2
53	82	42	D6	結合部	形跡1跡	管身に凹凸や反り。	1.9	1.8	1.5	9.4
54	82	42	D6	S1051	形跡1跡	管身に土層をもつ。表面上下は段理面。	2.0	2.2	1.7	6.8
55	83	43	B6	結合部	形跡2跡	下面に線道を残す。裏面は凹む。	3.5	2.0	1.6	7.7
56	83	43	F4	結合部	形跡2跡	管身に凹凸や反り。	3.0	1.9	1.7	9.1
57	83	43	B6	結合部	形跡2跡	裏面と左側面に凹凸。	2.8	1.6	1.2	5.7
58	83	43	B6	S1051	形跡2跡	上下面に線道をもつ。	3.4	1.6	1.2	5.5
59	83	43	E5	結合部	形跡2跡	下面に線道を残す。管身に凹凸や反り。	3.5	1.5	1.2	6.0
60	83	43	B6	S1051	形跡2跡	下面に線道を残す。管身に凹凸や反り。	3.1	1.8	1.1	5.3
61	83	43	F6	穴蓋	形跡2跡	管身に凹凸や反り。	2.8	1.9	1.2	6.6
62	83	43	B6	S1051	形跡2跡	管中に土層をもつ。表面中は段理面。	2.9	2.1	1.0	6.1
63	83	43	D6	S1051	形跡2跡	裏面に凹凸や反り。	2.9	1.8	1.2	6.2
64	83	43	K3	S1002	形跡2跡	下面に線道を残す。左側面は凹む。 図録第6巻 図録写真有	2.2	2.3	1.4	5.3
65	83	43	L4	S1001	形跡2跡	管中に土層をもつ。下面に線道を残す。	2.1	1.7	1.4	3.5
66	83	43	K6	結合部	形跡2跡	下面に線道を残す。	1.8	1.8	0.6	1.9
67	83	43	C4	S1052	形跡2跡	左側面に線道を残す。	2.7	1.3	0.8	2.9
68	83	43	B7	S1051	形跡2跡	下面に線道を残す。	2.6	1.4	1.1	2.8
69	83	43	B7	S1051	形跡2跡	左側面に凹凸や反り。	2.9	1.3	1.1	4.0
70	83	43	E5	S1056	形跡2跡	管身に凹凸や反り。	2.5	1.6	1.0	2.9
71	83	43	D5	S1051	形跡2跡	管中に土層をもつ。管身に凹凸や反り。	2.3	1.3	0.9	2.1
72	84	43	K6	S1002	形跡2跡	左側面に線道を残す。	2.2	1.0	0.7	1.7
73	84	43	K3	S1002	形跡2跡	左側面に線道を残す。	2.0	0.9	0.6	1.1
74	84	43	N6	結合部	形跡2跡	管身に凹凸や反り。	1.7	0.9	0.9	1.4
75	84	43	E6	S1007	形跡2跡	上面と裏面に凹凸や反り。	1.5	0.7	0.7	1.1
76	84	43	D4	S1051	形跡2跡	右側面に線道を残す。	1.6	0.8	0.8	0.8
77	84	43	D6	S1051	形跡2跡	上面に凹凸や反り。	1.9	0.9	0.9	1.3
78	84	43	D6	結合部	形跡2跡	裏面は段理面。下面に凹凸や反り。	2.0	1.0	0.8	1.8
79	84	43	B6	S1051	形跡2跡	管中に土層をもつ。	2.0	0.8	0.6	0.9
80	84	43	B7	S1051	形跡2跡	上面に凹凸や反り。	1.8	0.8	0.7	0.8
81	84	43	B7	S1051	形跡2跡	下面に線道を残す。管身に凹凸や反り。	1.8	0.7	0.9	1.0
82	84	43	B6	結合部	形跡2跡	表面に凹凸や反り。	1.8	0.9	0.8	1.0
83	84	43	D7	S1051	形跡2跡	管身に土層をもつ。凹凸や反り。	1.6	0.9	0.6	0.7
84	84	43	E3	結合部	形跡2跡	下面と右側面に凹凸や反り。	1.4	0.9	0.6	0.9
85	84	43	D6	S1051	形跡2跡	管中に土層をもつ。管身に凹凸や反り。	1.6	0.6	0.6	0.5
86	84	43	B6	S1051	形跡2跡	管中で。表面面に凹凸や反り。	1.7	0.6	0.4	0.4
87	84	43	C6	S1052	形跡2跡	下面と右側面に凹凸や反り。	1.6	0.6	0.3	0.7
88	84	43	A4	結合部	形跡4跡	表面と下面に凹凸や反り。	1.9	1.2	1.1	3.2
89	84	43	D6	S1051	形跡4跡	表面に凹凸や反り。	1.5	1.2	1.2	2.7
90	84	43	D4	S1051	形跡4跡	表面と下面に凹凸や反り。	1.5	1.1	0.9	1.8
91	84	43	N6	S1006SP2	形跡4跡	管中に土層をもつ。表面と左側面に凹凸や反り。	1.2	1.0	1.0	1.5
92	84	43	B7	S1051	形跡4跡	表面は段理面。	1.4	1.2	0.8	1.6
93	84	43	B7	S1051	形跡4跡	管中に土層をもつ。	1.3	1.1	0.8	1.3
94	84	43	B6	結合部	形跡4跡	上下面に凹凸や反り。	1.3	1.2	0.8	1.6
95	84	43	D6	結合部	形跡4跡	上面と右側面に凹凸や反り。	1.1	1.0	0.7	1.1
96	84	43	D6	結合部	形跡4跡	表面に凹凸や反り。	1.2	1.0	0.9	1.1
97	84	43	D4	結合部	形跡4跡	裏面と下面に凹凸や反り。	1.2	1.0	0.7	1.0
98	84	43	C6	結合部	形跡4跡	裏面と左側面に凹凸や反り。	1.2	0.9	0.7	1.2
99	84	43	N4	結合部	形跡4跡	管身に凹凸や反り。	1.1	0.9	0.7	0.9
100	84	43	E7	S1007	形跡4跡	上面に凹凸や反り。	1.1	0.8	0.6	0.9
101	84	43	D6	S1051	形跡4跡	上下面に凹凸や反り。	1.1	0.8	0.6	0.6
102	84	43	B7	結合部	形跡4跡	下面に凹凸や反り。	0.9	0.7	0.6	0.5
103	84	43	N6	結合部	形跡4跡	表面と下面に凹凸や反り。	0.9	0.8	0.6	0.5
104	84	43	M4	結合部	形跡4跡	裏面と下面に凹凸や反り。	0.9	0.6	0.5	0.1
105	84	43	C6	結合部	形跡4跡	管身に凹凸や反り。	0.9	0.6	0.6	0.5
106	84	43	D6	結合部	形跡4跡	裏面と右側面に凹凸や反り。	0.9	0.6	0.6	0.4
107	85	44	L6	S1060	調整1跡	表面に調整。凹みに凹凸や反り。	1.6	1.0	0.9	0.5
108	85	44	K3	S1002	調整1跡	下面と左側面に調整。左側面に凹凸や反り。	1.7	1.0	0.9	1.0
109	85	44	J6	結合部	調整1跡	下面と左側面に調整。管身に凹凸や反り。	1.5	0.9	0.8	1.4
110	85	44	B6	結合部	調整1跡	上面に調整。右側面に凹凸や反り。	1.6	0.9	0.8	1.3
111	85	44	E6	S1007	調整1跡	上面と左側面に調整。	1.4	1.0	0.7	1.1
112	85	44	J6	結合部	調整1跡	表面に調整。左右側面に凹凸や反り。	2.1	0.8	0.8	1.5
113	85	44	D6	S1051	調整1跡	裏面と左側面に凹凸や反り。	2.1	0.8	0.6	1.3
114	85	44	K7	S1003	調整1跡	表面と下面に調整。管中に土層をもつ。左右側面に凹凸や反り。	1.9	0.9	0.9	0.4

第1節 玉作関連の遺物

番号	探検番号	調査番号	地区	遺物	遺物	形	類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)
115	昭 45 Ⅱ	昭 45 44	D6	S101	遺物 1 期	表面と上面に調整。裏面に凹凸や反り。		1.9	0.7	0.6	1.1
116	昭 45 Ⅱ	昭 45 44	D6	S101	遺物 1 期	上面と左右側面に凹凸や反り。		1.6	0.8	0.7	1.3
117	昭 45 Ⅱ	昭 45 44	D6	S101	遺物 1 期	表面と右側面に調整。上面に凹凸や反り。		1.9	0.8	0.7	1.2
118	昭 45 Ⅱ	昭 45 44	D6	S101	遺物 1 期	表面と右側面に調整。表面と右側面に凹凸や反り。		1.9	0.8	0.7	1.3
119	昭 45 Ⅱ	昭 45 44	D6	S101	遺物 1 期	表面に調整。僅かに下面をもつ。裏面と左側面に凹凸や反り。		1.8	0.7	0.7	0.9
120	昭 45 Ⅱ	昭 45 44	D6	S101	遺物 1 期	右側面に調整。下面と右側面に凹凸や反り。		1.7	0.8	0.7	1.3
121	昭 45 Ⅱ	昭 45 44	D6	S101	遺物 1 期	下面に調整。右側面は磨面。		1.3	0.8	0.7	1.3
122	昭 45 Ⅱ	昭 45 44	D6	S101	遺物 1 期	表面に調整。裏面と右側面に凹凸や反り。		1.6	0.8	0.7	1.0
123	昭 45 Ⅱ	昭 45 44	D6	S101	遺物 1 期	表面に調整。上面と右側面に凹凸や反り。		1.7	0.8	0.8	1.2
124	昭 45 Ⅱ	昭 45 44	J6	S101	遺物 1 期	表面と右側面に調整。右側面に凹凸や反り。		1.6	0.8	0.8	1.3
125	昭 45 Ⅱ	昭 45 45	J6	河沼	遺物 1 期	右側面に調整。僅かに下面をもつ。上下面に凹凸や反り。		1.6	0.8	0.8	1.4
126	昭 45 Ⅱ	昭 45 45	N6	SR006SP2	遺物 1 期	表面と上面に調整。表面と上下面に凹凸や反り。		1.5	0.7	0.7	1.0
127	昭 45 Ⅱ	昭 45 45	D7	S101	遺物 1 期	上面に調整。上面と左側面に凹凸や反り。表面は磨面。		1.6	0.8	0.6	1.1
128	昭 45 Ⅱ	昭 45 45	D6	S101	遺物 1 期	表面に調整。右側面に凹凸や反り。		1.6	0.8	0.7	1.1
129	昭 45 Ⅱ	昭 45 45	D7	S101	遺物 1 期	表面に調整。僅かに下面をもつ。表面に凹凸や反り。		1.7	0.7	0.7	0.7
130	昭 45 Ⅱ	昭 45 45	D7	S101	遺物 1 期	上面に調整。裏面に凹凸や反り。		1.6	0.8	0.7	1.0
131	昭 45 Ⅱ	昭 45 45	D7	S101	遺物 1 期	下面と右側面に調整。裏面と右側面に凹凸や反り。		1.5	0.7	0.5	0.6
132	昭 45 Ⅱ	昭 45 45	D6	S101	遺物 1 期	表面に調整。裏面に凹凸や反り。		1.5	0.6	0.5	0.5
133	昭 45 Ⅱ	昭 45 45	D6	S101	遺物 1 期	表面側と左右側面に調整。僅かに下面をもつ。表面と右側面に凹凸や反り。		1.4	0.8	0.7	0.7
134	昭 45 Ⅱ	昭 45 45	D6	S101	遺物 1 期	表面に調整。表面に凹凸や反り。		1.5	0.7	0.7	1.1
135	昭 45 Ⅱ	昭 45 45	D7	S101	遺物 1 期	下面に調整。右側面と下面に凹凸や反り。		1.5	0.7	0.6	0.8
136	昭 45 Ⅱ	昭 45 45	D7	S101	遺物 1 期	表面と上面に調整。裏面に凹凸や反り。		1.4	0.7	0.6	1.0
137	昭 45 Ⅱ	昭 45 45	D6	S101	遺物 1 期	左側面に調整。表面に凹凸や反り。		1.5	0.7	0.7	1.0
138	昭 45 Ⅱ	昭 45 45	M6	S101	遺物 1 期	表面に調整。裏面に凹凸や反り。		1.2	0.7	0.5	0.5
139	昭 45 Ⅱ	昭 45 45	D7	SR015SP6	遺物 1 期	下面と上面に調整。表面と下面をもつ。裏面に凹凸や反り。		1.4	0.6	0.5	0.6
140	昭 45 Ⅱ	昭 45 45	D6	S101	遺物 1 期	表面に調整。表面に凹凸や反り。		1.3	0.5	0.5	0.4
141	昭 45 Ⅱ	昭 45 45	D6	S101	遺物 1 期	表面に調整。表面に凹凸や反り。		1.3	0.7	0.7	0.7
142	昭 45 Ⅱ	昭 45 45	D7	S101	遺物 1 期	表面と下面に調整。左右側面に凹凸や反り。		1.4	0.7	0.7	0.7
143	昭 45 Ⅱ	昭 45 45	D6	S101	遺物 1 期	左側面に調整。上面と左側面に凹凸や反り。		1.3	0.8	0.6	0.5
144	昭 45 Ⅱ	昭 45 45	K3	S101	遺物 1 期	左右側面に凹凸や反り。		1.2	0.6	0.6	0.5
145	昭 45 Ⅱ	昭 45 45	D6	S101	遺物 1 期	下面に調整。上面に凹凸や反り。		1.3	0.6	0.5	0.5
146	昭 45 Ⅱ	昭 45 45	A7	S107	遺物 1 期	裏面と左側面に調整。裏面に凹凸や反り。		1.2	0.8	0.6	0.7
147	昭 45 Ⅱ	昭 45 45	D7	S101	遺物 1 期	右側面に調整。僅かに下面をもつ。		1.3	0.6	0.5	0.3
148	昭 45 Ⅱ	昭 45 45	D7	S101	遺物 1 期	右側面に調整。表面側が平行しない。		1.2	0.7	0.6	0.6
149	昭 45 Ⅱ	昭 45 45	D7	S101	遺物 2 期	表面に調整。右側面は磨面。		1.7	0.6	0.5	0.8
150	昭 45 Ⅱ	昭 45 45	K6	S101	遺物 2 期	裏面と下面に調整。		1.7	0.7	0.6	0.9
151	昭 46 Ⅱ	昭 45 45	M6	SR048	遺物 2 期	下面に調整。表面に凹凸や反り。		1.4	0.4	0.5	0.5
152	昭 46 Ⅱ	昭 45 45	A5	S101	遺物 2 期	表面と上面に調整。		1.3	0.5	0.5	0.4
153	昭 46 Ⅱ	昭 45 45	D6	S101	遺物 2 期	上面に調整。		1.3	0.6	0.5	0.4
154	昭 46 Ⅱ	昭 45 45	D6	S101	遺物 2 期	下面に調整。右側面に凹凸や反り。		1.2	0.5	0.5	0.5
155	昭 46 Ⅱ	昭 45 45	K3	S103	遺物 2 期	上面に調整。表面と右側面に凹凸や反り。		1.2	0.5	0.5	0.3
156	昭 46 Ⅱ	昭 45 45	K3	S106	遺物 2 期	表面と下面に調整。		1.0	0.5	0.5	0.6
157	昭 46 Ⅱ	昭 45 45	D7	S101	遺物 2 期	表面側と下面に調整。右側面に凹凸や反り。		1.1	0.5	0.5	0.3
158	昭 46 Ⅱ	昭 45 45	M6	S101	遺物 2 期	上面に調整。上面に凹凸や反り。		1.0	0.5	0.5	0.4
159	昭 46 Ⅱ	昭 45 45	D6	S101	遺物 2 期	下面に調整。		1.1	0.5	0.5	0.3
160	昭 46 Ⅱ	昭 45 45	D7	S101	遺物 2 期	上面に調整。		0.9	0.5	0.3	0.3
161	昭 46 Ⅱ	昭 45 45	K3	S102	遺物 2 期	下面に調整。右側面に長軸方向の研磨面。裏面と上面に凹凸や反り。		2.0	1.1	1.1	2.5
162	昭 46 Ⅱ	昭 45 45	D7	S101	遺物 2 期	表面に長軸。右側面に斜行する研磨面。裏面は磨面。		2.8	0.9	0.9	2.4
163	昭 46 Ⅱ	昭 45 45	D7	S101	遺物 2 期	上面に長軸。裏面と右側面に長軸方向の研磨面。表面と上面に凹凸や反り。		2.0	0.9	0.9	1.9
164	昭 46 Ⅱ	昭 45 45	D6	S101	遺物 2 期	裏面と右側面に長軸方向の研磨面。表面に凹凸や反り。		2.2	0.8	0.7	1.3
165	昭 46 Ⅱ	昭 45 45	D6	S101	遺物 2 期	上面に調整。右側面に長軸方向の研磨面。裏面は磨面。		1.9	0.7	0.5	1.1
166	昭 46 Ⅱ	昭 45 45	D6	S101	遺物 2 期	表面と右側面に調整。下面は長軸。左側面は長軸方向の研磨面。		1.8	0.8	0.7	1.7
167	昭 46 Ⅱ	昭 45 45	D6	S101	遺物 2 期	表面と上面に調整。左右側面に長軸方向の研磨面。		1.8	0.7	0.8	1.7
168	昭 46 Ⅱ	昭 45 45	A0	S101	遺物 2 期	表面と左右側面に長軸方向。下面に表面方向の研磨面。		1.7	0.7	0.6	1.1
169	昭 46 Ⅱ	昭 45 46	D7	S101	遺物 2 期	右側面に調整。表面側と左側面に長軸方向。上面に表面方向の研磨面。		1.5	0.7	0.5	0.9
170	昭 46 Ⅱ	昭 45 46	A7	S107	遺物 2 期	下面と右側面に調整。上面に長軸方向の研磨面。		1.4	0.8	0.6	0.9
171	昭 46 Ⅱ	昭 45 46	F7	河沼	遺物 2 期	左右側面に長軸方向の研磨面。		1.3	0.7	0.6	0.7
172	昭 46 Ⅱ	昭 45 46	M6	S101	遺物 2 期	表面と左右側面に長軸方向。上面は表面方向の研磨面。		1.3	0.6	0.4	0.5
173	昭 46 Ⅱ	昭 45 46	D7	S101	遺物 2 期	表面側と上下面。右側面に長軸方向の研磨面。		1.1	0.4	0.4	0.3
174	昭 46 Ⅱ	昭 45 46	D6	S101	遺物 2 期	左右側面に調整。表面側と右側面に長軸。上面は磨面。下面は表面方向の研磨面。		1.3	0.5	0.5	0.8
175	昭 46 Ⅱ	昭 45 46	D6	S101	遺物 2 期	右側面に調整。表面と右側面に長軸方向の研磨面。摩す。		1.2	0.5	0.7	0.8
176	昭 46 Ⅱ	昭 45 46	D6	S101	遺物 2 期	表面と下面に調整。表面は長軸方向。上面は長軸方向の研磨面。		1.0	0.7	0.6	0.7
177	昭 47 Ⅱ	昭 45 46	F7	河沼	研物 1 期	表面と左右側面に調整。表面は長軸方向の研磨面。		1.9	0.6	0.5	0.9
178	昭 47 Ⅱ	昭 45 46	D6	A47	研物 1 期	表面側に調整面を多く残す。		1.5	0.6	0.5	0.7
179	昭 47 Ⅱ	昭 45 46	G7	A17	研物 1 期	表面上面に調整面を僅かに残す。		1.5	0.6	0.5	0.8
180	昭 47 Ⅱ	昭 45 46	D6	S101	研物 1 期	表面側の下面に調整面を残す。		1.4	0.5	0.5	2.4
181	昭 47 Ⅱ	昭 45 46	M6	S101	研物 1 期	下面に調整面を残す。		1.4	0.6	0.5	0.7
182	昭 47 Ⅱ	昭 45 46	K3	S103	研物 1 期	下面に調整面をもつ。		1.5	0.4	0.4	0.8
183	昭 47 Ⅱ	昭 45 46	D6	S101	研物 1 期	表面に斜行する研磨面。		1.1	0.6	0.5	0.6
184	昭 47 Ⅱ	昭 45 46	D7	S101	研物 1 期	表面側に調整面を残す。		0.9	0.5	0.4	0.3
185	昭 47 Ⅱ	昭 45 46	D6	S101	研物 1 期	表面側に調整面を残す。		0.8	0.5	0.4	0.2
186	昭 47 Ⅱ	昭 45 46	N6	S101	研物 1 期	表面側の上面に調整面を僅かに残す。		0.6	0.4	0.4	0.1
187	昭 47 Ⅱ	昭 45 46	D6	S41	研物 1 期	左側面に上面に調整面を残す。		0.6	0.3	0.3	0.1
188	昭 47 Ⅱ	昭 45 46	N6	S101	研物 1 期	下面に調整面を残す。		0.8	0.3	0.3	0.1
189	昭 47 Ⅱ	昭 45 46	D6	S102	研物 1 期	表面と左側面に下面に調整面を残す。		0.6	0.3	0.2	0.1
190	昭 47 Ⅱ	昭 45 46	D6	S101	研物 2 期	表面上面に調整面を残す。		1.0	0.3	0.3	0.2
191	昭 47 Ⅱ	昭 45 46	中川	S101	研物 2 期	表面中央に調整面を残す。		1.0	0.3	0.3	0.2
192	昭 47 Ⅱ	昭 45 46	D6	S101	研物 2 期	表面上面に調整面を残す。		1.0	0.3	0.3	0.2
193	昭 47 Ⅱ	昭 45 46	D6	S101	研物 2 期	表面中央と表面下面に調整面を残す。		0.9	0.3	0.3	0.2
194	昭 47 Ⅱ	昭 45 46	D6	S101	研物 2 期	表面中央と表面下面に調整面を残す。		0.9	0.3	0.3	0.2

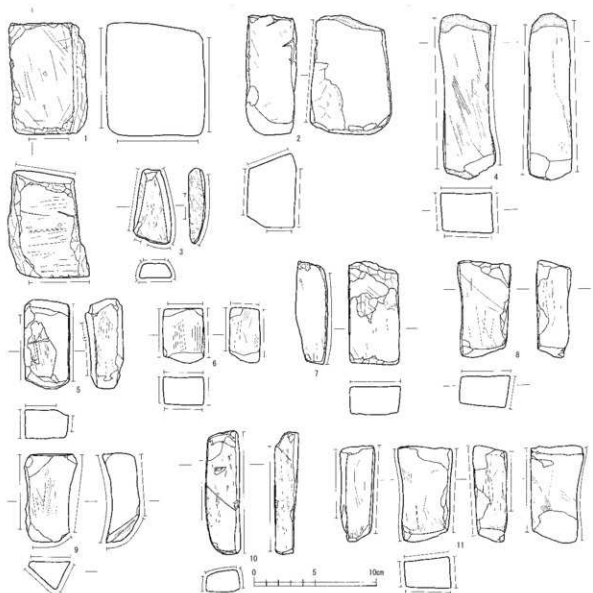
第6章 玉作関連の遺物と石製品

番号	採出番号	調査番号	地区	遺物	説明	形 態	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
195	昭 47 Ⅱ	昭46 46	D6	S1051	研削 2期		0.9	0.3	0.3	0.1
196	昭 47 Ⅱ	昭46 46	D6	S1051	研削 2期	表面中央に溝線跡を有す。	0.6	0.3	0.3	0.2
197	昭 47 Ⅱ	昭46 46	D6	S1051	研削 2期	表面中央に溝線跡を有す。	0.6	0.3	0.3	0.2
198	昭 47 Ⅱ	昭46 46	D6	S1051	研削 2期	表面下部に溝線跡を有す。	0.8	0.3	0.3	0.1
199	昭 47 Ⅱ	昭46 46	D6	S1051	研削 2期		0.7	0.3	0.3	0.1
200	昭 47 Ⅱ	昭46 46	A7	辻合型	研削 2期	表面上部に溝線跡を有す。	0.7	0.3	0.3	0.1
201	昭 47 Ⅱ	昭46 46	D6	S1051	研削 2期		0.7	0.3	0.3	0.1
202	昭 47 Ⅱ	昭46 46	D6	S1051	研削 2期	表面上部に溝線跡を有す。	0.6	0.3	0.3	0.1
203	昭 47 Ⅱ	昭46 46	D6	S1051	研削 2期	表面上部に溝線跡を有す。	0.6	0.3	0.3	0.1
204	昭 47 Ⅱ	昭46 46	D6	S1051	研削 2期	表面上部に溝線跡を有す。	0.6	0.3	0.3	0.1
205	昭 47 Ⅱ	昭46 46	D6	S1051	研削 3期	右側に差柄の残存を有す。	0.5	0.5	0.3	0.1
206	昭 47 Ⅱ	昭46 46	D6	S1051	研削 3期	平面が整った多角形を有す。	0.6	0.5	0.2	0.1
207	昭 47 Ⅱ	昭46 46	K6	S1062	研削 3期	中央不整な多角形を有す。表面に溝線跡を有す。	0.5	0.5	0.3	0.1
208	昭 47 Ⅱ	昭46 46	K6	S1062S&L	研削 3期	中央不整な多角形を有す。	0.5	0.5	0.3	0.1
209	昭 47 Ⅱ	昭46 46	I7	S1053	研削 1期	表面下部に左側面に溝線跡を有す。	1.8	1.2	1.2	1.6
210	昭 47 Ⅱ	昭46 46	中Ⅲ	S1052	研削 1期	上下面が平坦になっている。	1.6	0.4	0.5	0.5
211	昭 47 Ⅱ	昭46 46	D6	S1051	研削 1期	右側面中央に溝線跡を有す。	1.6	0.4	0.4	0.5
212	昭 47 Ⅱ	昭46 46	D6	S1051	研削 1期	右側面下部に僅かに溝線跡を有す。	1.5	0.4	0.4	0.5
213	昭 47 Ⅱ	昭46 46	D6	S1051	研削 1期	右側面に溝線跡を有す。	1.3	0.3	0.3	0.3
214	昭 47 Ⅱ	昭46 46	D6	辻合型	研削 1期		1.3	0.4	0.4	0.4
215	昭 47 Ⅱ	昭46 46	C6	辻合型	研削 1期	上面に鋭くさる。	0.8	0.5	0.5	0.4
216	昭 47 Ⅱ	昭46 46	B7	辻合型	研削 2期	未研磨。断面の形状。	1.7	0.4	0.4	0.5
217	昭 47 Ⅱ	昭46 46	B7	S1051	研削 2期	貫通。中央部平坦。	1.4	0.5	0.5	0.5
218	昭 47 Ⅱ	昭46 46	B6	辻合型	研削 2期	貫通。中央部平坦。	1.3	0.5	0.4	0.4
219	昭 47 Ⅱ	昭46 46	J5	S1057	研削 2期	未研磨。表面下部に溝線跡を有す。	1.5	0.4	0.4	0.4
220	昭 47 Ⅱ	昭46 46	D6	S1051	研削 2期	貫通。上面に溝線跡を僅かに有す。	1.2	0.4	0.4	0.4
221	昭 47 Ⅱ	昭46 46	D6	S1051	研削 2期	未研磨。中央部平坦。	1.2	0.4	0.4	0.4
222	昭 47 Ⅱ	昭46 47	D6	S1051	研削 2期	貫通。表面下部に溝線跡を僅かに有す。	1.1	0.4	0.4	0.2
223	昭 47 Ⅱ	昭46 47	D6	S1051	研削 2期	未研磨。表面に溝線跡を大きく有す。	1.0	0.4	0.4	0.3
224	昭 47 Ⅱ	昭46 47	B7	辻合型	研削 2期	未研磨。	1.0	0.4	0.4	0.3
225	昭 47 Ⅱ	昭46 47	D6	辻合型	研削 2期	未研磨。不整な多角形を有す。表面に溝線跡を有す。	0.9	0.5	0.5	0.3
226	昭 47 Ⅱ	昭46 47	L6	S1062	研削 2期	未研磨。	1.0	0.5	0.5	0.3
227	昭 47 Ⅱ	昭46 47	D6	S1051	研削 2期	貫通。	0.8	0.5	0.4	0.3
228	昭 47 Ⅱ	昭46 47	B7	S1051	研削 2期	貫通。	0.7	0.5	0.5	0.3
229	昭 47 Ⅱ	昭46 47	B7	S1051	研削 2期	貫通。右側に溝線跡を大きく有す。	0.7	0.6	0.5	0.4
230	昭 47 Ⅱ	昭46 47	K5	辻合型	研削 2期	貫通。	0.3	0.4	0.4	0.2
231	昭 47 Ⅱ	昭46 47	K5	辻合型	研削 2期	貫通。	0.7	0.4	0.4	0.2
232	昭 47 Ⅱ	昭46 47	C6	貫通	研削 2期		1.1	0.5	0.7	0.2
233	昭 47 Ⅱ	昭46 47	D6	S1051	研削 2期	右側面に溝線跡を有す。	1.1	0.5	0.4	0.3
234	昭 47 Ⅱ	昭46 47	L6	辻合型	研削 2期	表面上部に溝線跡を有す。	0.6	0.5	0.3	0.1
235	昭 47 Ⅱ	昭46 47	N6	辻合型	研削 2期	貫通。上面を僅かに有す。	1.0	0.3	0.2	0.1
236	昭 47 Ⅱ	昭46 47	N6	S1062	研削 2期	貫通。	0.8	0.3	0.2	0.1
237	昭 47 Ⅱ	昭46 47	N6	辻合型	研削 2期	貫通。上面が浅い。	0.8	0.3	0.3	0.1
238	昭 47 Ⅱ	昭46 47	N6	辻合型	研削 2期	貫通。上面が浅い。	0.7	0.3	0.3	0.1
239	昭 47 Ⅱ	昭46 47	N6	辻合型	研削 2期	貫通。	0.7	0.3	0.2	0.1
240	昭 47 Ⅱ	昭46 47	N6	辻合型	研削 2期	貫通。	0.6	0.3	0.1	0.1
241	昭 47 Ⅱ	昭46 47	K7	辻合型	研削 3期		1.6	0.4	0.4	0.1
242	昭 47 Ⅱ	昭46 47	B7	辻合型	研削 3期	左側に溝線跡を有す。	1.1	0.4	0.3	0.3
243	昭 47 Ⅱ	昭46 47	D6	辻合型	研削 3期	裏面に溝線跡を有す。	1.0	0.3	0.4	0.2
244	昭 47 Ⅱ	昭46 47	D6	S1051	研削 3期	表面に溝線跡を有す。	1.1	0.4	0.4	0.3
245	昭 47 Ⅱ	昭46 47	H5	辻合型	研削 3期		0.9	0.4	0.4	0.2
246	昭 47 Ⅱ	昭46 47	K7	辻合型	貫通		2.9	0.7	0.7	3.5
247	昭 47 Ⅱ	昭46 47	M4	辻合型	貫通	鉄石莖製。	1.7	0.3	0.3	0.3
248	昭 47 Ⅱ	昭46 47	中Ⅲ	辻合型	貫通		1.5	0.3	0.3	0.2
249	昭 47 Ⅱ	昭46 47	D6	S1051	貫通		1.4	0.3	0.3	0.2
250	昭 47 Ⅱ	昭46 47	L6	L36	貫通		1.0	0.2	0.2	0.1
251	昭 47 Ⅱ	昭46 47	L6	S1062	貫通	中央部鋭。	1.5	0.4	0.4	0.4
252	昭 47 Ⅱ	昭46 47	D6	S1051	貫通		1.5	0.4	0.4	0.4
253	昭 47 Ⅱ	昭46 47	B6	S1051	貫通		1.2	0.3	0.3	0.2
254	昭 47 Ⅱ	昭46 47	L6	S1061	貫通		1.3	0.3	0.3	0.2
255	昭 47 Ⅱ	昭46 47	K6	S1062	貫通		1.3	0.3	0.3	0.2
256	昭 47 Ⅱ	昭46 47	L6	S1062	貫通		1.1	0.3	0.3	0.2
257	昭 47 Ⅱ	昭46 47	D6	S1051	貫通	表面下部に鋭角を有す。	1.0	0.3	0.3	0.2
258	昭 47 Ⅱ	昭46 47	M6	辻合型	貫通		1.0	0.3	0.3	0.1
259	昭 47 Ⅱ	昭46 47	D6	辻合型	貫通		1.0	0.3	0.3	0.1
260	昭 47 Ⅱ	昭46 47	D6	S1051	貫通	鉄石莖製。	0.7	0.3	0.3	0.1
261	昭 47 Ⅱ	昭46 47	D6	S1051	貫通		0.4	0.3	0.3	0.1
262	昭 47 Ⅱ	昭46 47	C6	S10066	初期 4期	鉄莖製。	2.0	1.5	1.6	8.1
263	昭 47 Ⅱ	昭46 47	A6	S10065	与玉	鉄莖製。	1.1	0.6	0.5	0.5
264	昭 47 Ⅱ	昭46 47	L6	S1062	与玉	鉄莖製。中央部整。	1.0	0.6	0.3	0.5
265	昭 47 Ⅱ	昭46 47	L6	S1062	与玉	鉄莖製。断面一部欠。	0.7	0.5	0.3	0.2
266	昭 47 Ⅱ	昭46 47	L6	S1062	与玉	与玉大型。断面欠。	0.8	0.6	0.4	0.3
267	昭 47 Ⅱ	昭46 47	D6	S1051	小玉	与玉大型。	0.7	0.6	0.5	0.3
268	昭 47 Ⅱ	昭46 47	D6	S1051	小玉	与玉大型。	0.5	0.5	0.4	0.2
269	昭 47 Ⅱ	昭46 47	D6	辻合型	小玉	与玉大型。	0.7	0.6	0.6	0.3
270	昭 47 Ⅱ	昭46 47	N6	辻合型	小玉	与玉大型。	0.3	0.4	0.2	0.1
271	昭 47 Ⅱ	昭46 47	N6	辻合型	小玉	与玉大型。	0.4	0.3	0.2	0.1
272	昭 47 Ⅱ	昭46 47	D6	S1051	小玉	与玉大型。	0.3	0.3	0.3	0.1
273	昭 47 Ⅱ	昭46 47	K6	S1061	小玉	与玉大型。	0.3	0.3	0.2	0.1
274	昭 47 Ⅱ	昭46 47	B7	辻合型	小玉	与玉大型。中央部整。	0.3	0.3	0.2	0.1

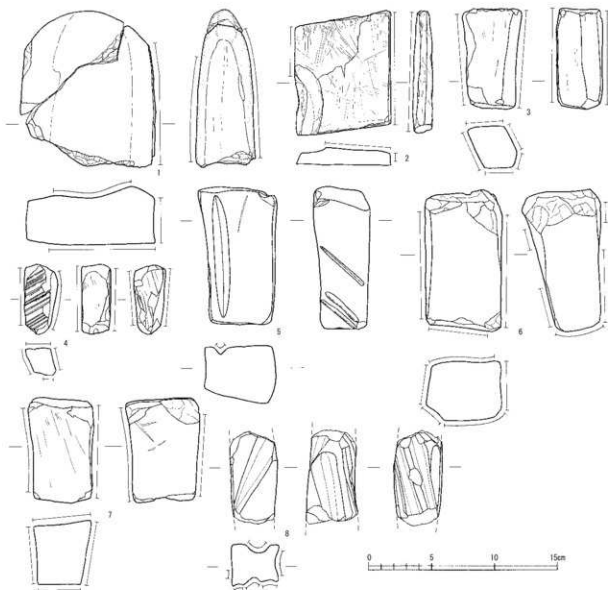
第2節 石製品(砥石) (第89・90図, 第6表)

砥石は出土した約25点のうち、特徴的なもの、残存状況が良好なものうち、東地区9点、西地区11点の計20点を図化した。(第89・90図)

ここには玉作関連のものも含まれると思うが、鉄器に用いたものと区別できないためすべてをここにまとめた。砥石に大小はあるものの中心となるものは方形、もしくは長方形の平面に、断面も同様かやや不整形のものである。断面が三角形や五角形のものもあるが、使用方法が大きく異なるものとは考えられない。平面形の両端が大きく、中央がやや細くなるものも多く、使用面が直線のは少ない。形状が磨製石斧に類似するものがあるが、石材の種類から転用とは考えられない。筋状の溝があるもので小型のものが2点と大型のものが1点ある。扁平な砥石は他の砥石と石材が明らかに異なり、出土地点も調査区東端の落ち込みであることから、弥生時代ではなく中近世まで下る可能性が高い。出土した砥石のなかで、注目されるのはSI001とSI002から出土し、接合して長い石皿ようになったもので、長辺の中央が窪んでその両側が残る。



第89図 石製品実測図1



第90図 石製品実測図2 (縮尺 1/3)

第6表 石製品観察表

図録番号	図録章	出土地層 - 遺構		最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	磨り面	石材	備考	
		層位	遺構								
0089 10 1	図録章 40	西	D 6	包含層	9	6.15	7.9	755	3面	磨削面	
0089 10 2	図録章 40	西	A 6	S801	9.7	6.6	6.05	411	1面	磨削面	
0089 10 3	図録章 40	西	B 7	S801	6	3.1	1.2	34	4面	磨削面	
0089 10 4	図録章 40	西	A 4	包含層	13.3	4.2	3.2	349	4面	磨削面	
0089 10 5	図録章 40	西	B 4	包含層	7.2	3.7	2.35	135	3面	磨削面	
0089 10 6	図録章 40	西	E 5	S806	4.45	3.35	2.3	69	5面	磨削面	
0089 10 7	図録章 40	西	C 6	包含層	8.3	4.2	2.25	132	1面	磨削面	
0089 10 8	図録章 40	西	D 6	包含層	7.65	2.8	2.6				
0089 10 9	図録章 40	西	B 5	包含層	7.1	4.3	2.25	82	4面	磨削面	
0089 10 10	図録章 40	西	A 6	包含層	10	2.2	1.75	84	3面	磨削面	
0089 10 11	図録章 40	西	D 6	包含層	7.8	4.4	2.55	135	4面	磨削面	
0090 10 1	図録章 40	東	L 6	S800 1	12.1	10.3	4.5	860	3面	磨削面	2点程分
		東	K 6	S800 3							
0090 10 2	図録章 40	東	T 6	包含層	8.9	7.45	1.35	159	3面	磨削面	中継か?
0090 10 3	図録章 40	東	K 6	S800 1	7.8	4.7	3.25	229	5面	磨削面	
0090 10 4	図録章 40	東	M 7	包含層	5.5	2.6	1.15	49	4面	磨削面	
0090 10 5	図録章 40	東	L 6	S800 1	39.8	6.1	4.5	369	3面	磨削面	
0090 10 6	図録章 40	東	L 6		11.2	5.9	4.65	640	5面	磨削面	
0090 10 7	図録章 40	東	N 7	S8006 ?	8.2	5.1	4.9	389	4面	磨削面	
0090 10 8	図録章 40	西	N 6	包含層	7.3	3.8	3.3	160	4面	磨削面	

第7章 まとめ

第1節 出土した遺物について

土器について 東地区の土器は北陸の弥生時代後期の指標である法仏式から月影式の前半が中心となり、一部が月影式後半に下る。西地区の土器は月影式でも後半が中心となり、一部がやや新しい白江式に下ることから、相対的に東地区が古く、西地区が新しいことは明瞭である。東地区の有段口縁の甕は擬凹線のある有文のものが主体ではあるが、無文の甕も一定量存在するのに対し、西地区では図化した有段口縁の甕のほとんどに擬凹線が施文され、無文のものはほんの少数、しかも甕ではなく壺となり、脚台が付くものもある。壺は東地区では個体差が大きく、分類が困難であるのに対して、西地区では壺そのものの数が少ない。この時期の周辺の各地、特に東海地方などでは壺や高坏に赤彩が顕著であるのに対して、本遺跡では赤彩された土器は数点のみで、北陸南西部の越前では赤彩土器が少ないことを反映している。胎土や色調などから明らかに搬入と考えられる土器はないものの、包含層から出土した内外面に赤彩された大型の高坏(第76図15)は本県などの北陸南西部に本来ある器形ではなく、北陸北東部でも越中の婦負郡を中心とした付近に特徴的なもの(このような高坏は富山県では盤状高坏と呼ばれている)で、赤彩こそないもののSI055の大型高坏(第60図6)も同様の系譜であろう。SI055の出土遺物には「く」の字甕や小型器台があるなど、北陸のみならず周辺も含めた地域の土器様相が大きく変化し、時代も古墳時代へ変化する時期の基準となる一群である。またSI001出土の壺(第19図12)は端部を欠く口縁内面に櫛波状文が巡り、胴部上半には櫛波直線文の間に刺突列点文を加える。また西地区包含層出土で完形に図化できた壺(第77図13)は開いた口縁内面と、頸部に近い胴部に突帯を貼付け、幅広の口縁帯に浮文貼付の痕跡を残し、底部を押し上げて上げ底とする。この2点は搬入品とは言えないが、東海や近江の影響をうかがわせる。

銅鐸と玉作関連遺物について 今回出土した銅鐸は、小さな破片が3片ではあるが、全国で30例余になるとされる破片で出土したものと異なり、明らかに再加工されているなど問題は大きい。銅鐸のタイプは突線の数から突線鈕3式を含むそれ以降の型式のものと判断された。これは鉛同位体比の分析成果と合致する。同じタイプの銅鐸として、大阪府(河内)羽曳野市西浦遺跡出土の高さが90cm近い突線鈕3式の銅鐸が近いものとして考えられる(難波洋三氏が突線のカーブなどの検討を重ねた結果のご指摘による)。福井県は日本海側の銅鐸分布の東端で、若狭で4個4遺跡(うち1個は若狭出土の伝承)、越前では4個3遺跡(さらに坂井市井ノ向では従来知られている2個に加え、もう1個出土している可能性も指摘されている)と10個にも満たなく、周辺の滋賀や京都などの近畿圏と比較すると少ない。しかもいずれも突線鈕2式以前であり、大きさが80cmを超え大型のいわゆる「見る銅鐸」の典型である突線鈕3式以降の銅鐸は北陸では出土していない。つまり、日本海側では京都府丹後の比叡城遺跡の突線鈕5式と舞鶴市匂ヶ崎遺跡の突線鈕3式以外はすべて突線鈕2式以前の銅鐸である。少なくとも若狭・越前の福井では突線鈕以前の扁平鈕式の「聞く銅鐸」が主体であり、突線鈕2式の使用で銅鐸祭祀が終焉し、祭祀に使われなくなった銅鐸が越前に破砕されて持ち込まれたと考えられる。また破砕された銅鐸として著名な兵庫県久田谷遺跡も日本海側では珍しく、復元される高さが1mを超えると推定されている突線鈕5式の銅鐸である。工事中の不時発見とはいえ、117片もまとまって出土したことが確認されているが、すべてが接合できる状態でもなく、全体の1/3から1/4ほどしか復元できないとのことである。つまりどこかで破砕されたものが持ち込まれたと考えられる。本遺跡の銅鐸片も本来はどこかの地域で祭祀に使

用されていたものかは確定できないが、愛知県渥美町柵遺跡で突線鈕5式の銅鐸の破片200片以上2個体が破砕した状態で出土したとの伝承がある。本遺跡ではこの時期の北陸の大勢と同じく、他地域から搬入された土器は少なく、銅鐸が出土した東地区も同じ状況である。そのなかで先にSI001から東海地方の影響があるとした壺の存在がある。北陸西部は遠賀川式土器文化圏に引き続き、西からの柳描文土器の影響で弥生時代中期となるが、その初期には条痕文土器など東海地方の影響も大きく、特に越前は新遺跡の銅鐸などその名残がうかがえる地域である。これらのことから出土した銅鐸片は、今まで北陸で未確認の突線鈕3式の銅鐸を用いた祭祀が行われなくなり破砕した破片の可能性もあるが、ここでは本来東海地方で祭祀に使用されていたものが、東海で破砕されて本遺跡に持ち込まれたものの可能性を考えておきたい。

破砕されて本遺跡に持ち込まれたと考えられる銅鐸片であるが、各地で出土している銅鐸の破片の多くがペンダントに再加工を目的とした近畿式銅鐸の飾耳の部分であったり、単に破損して後世の溝などに廃棄されただけの場合もあったりし、破片そのものを再利用のため加工した痕跡のある事例は管見の限りではない。そもそもその量の多寡は別として、鉄が存在したであろう弥生時代後期に鉄より軟質の青銅器を本事例のように利器とし有効であったかは、いささか疑問である。むしろ細片ばかりではあるが、SI001を中心に発泡した土器片が多く出土していることや、北陸では弥生時代後期に銅鍍を製造していた事例などがあることを考えると、東海地方を第一の候補として、太平洋側のどこから運び込まれた素材としての破片を、たまたま利器として加工したものであると考えたい。その利器としての目的は、突線の一部が摩擦するまでに端部が細くなっていることから、銅鐸片と同じ東地区でのみ確認された玉作の施溝のための「玉磨(本来は紅塵片岩などの石製)」への転用であろう。

弥生時代を代表する銅鐸が廃棄された時期を示すものとしての学問的意義が大きいのが、さらに本来は銅鐸祭祀に用いられることになかった可能性が高い銅鐸が破砕して北陸へ持ち込まれたことは、日本海側の北陸と太平洋側の東海や近畿と銅鐸祭祀の終焉が異なることを暗示し、その廃絶の意義が単純なものではないことを物語る。

なお玉作関連遺物については、東地区にのみ施溝の技法を残すものがあり、西地区では確認されていない。弥生時代中期以来の技法であった施溝による分割技法が、月影式直前まで残り、その後はおそらく林・藤島遺跡群で確認されたように、鉄を用いた打割に変化したと考えられる。つまり玉作に関しては、東区では中期の名残があったが、西地区では鉄器の使用が盛んになる古墳時代への移行期がうかがえる。

第2節 遺跡の変遷と土器様相の変化 (第7表)

各地区の記載や前節でまとめたように、今回の調査では竪穴住居9棟(うち明確な建替えがあるもの1棟、竪穴住居の可能性のあるもの1棟)、布掘建物2棟、掘立柱建物2棟、平地式住居の可能性のあるもの1棟、土坑や溝など弥生時代後期の一般的な集落を検出した。ここでは位置や切り合いの状況に、出土した土器の時期を参考にして、遺構の時期をIからV期にまとめて整理し、集落の変遷を土器様相の変化についてその推定される概要を述べておく。

I期(集落の成立)……後期後半前葉(法仏式の後半に相当)

この調査区で最も古い遺構は、東地区でSI003、さらに縮小したSI002を中心とし、これらにSB004が伴う。SI003・002はもちろん、この後の時期のSI001などの建物群が位置する範囲(H16グリッドからM6

グリッドを中心とする)は地山の標高が10mを越え、調査区内で最も高いことから、当然ながら自然堤防でもより高いところから集落の形成の契機となった。なお余談となるが、このように竪穴住居と布掘建物が同時期と考えたが、竪穴住居に布掘建物の隅が向かう不自然な配置である。これはこの2種の建物の時期が異なるのではとの指摘がなされようが、次の時期でもSI001とSB005も同じ配置でこの状況が偶然とは考えられない。ここでは東北地方の曲屋のような構造の建物を想定しておきたい。土器は甕が有段口縁で口縁がほぼ直立するものが多く、無文のものは少ない。高坏は坏の口縁内面の端部が肥厚させるものに、有段の坏部のものが加わる。玉作はこの時期に盛んに行われていた可能性は低い。旧河道を挟んだ西地区にはこの時期の土器はなく、少なくとも調査区内に居住域は確認されていない。

Ⅱ期(集落の拡大)……後期後半葉(法仏式から月影Ⅰ式へ移行する過渡期)

SI002廃絶後のSI001に、西側にSI002・003上層から掘り込まれたSB005が、北側にはSB040が伴う。SB005はSI002の上層に堆積していた炭化層面を切って、布掘の溝が掘り込まれている。この炭化面上層(SI002の覆土上層)の土器はこのSB005に伴うか、その直前の時期を次示すものと考えられる。SD029を挟んだ東側にはこの溝と一辺が平行するSD022があり、その間にSB006があり、それぞれが重複しないことからこれらは同時期と考えられる。SD022出土の土器はSI001の土器に近い。またSB006の西側に接して銅鐸片Cが出土し、SI001の床面でも銅鐸片A・Bが出土していることも、この推定に反しない。遺構から出土した遺物がその時期と性格を示すと考えれば、炉などの直接の根拠となるものはないものの、SI001もしくはその周辺で鑄造に関する作業が、SB006では玉生産が行われていたと考えられ、これらの建物が工房群で、集落縁辺部に展開していたと指摘できる。この段階は集落でも最も重要な時期であるが、その時期を明確にすることは現段階の土器編年では難しい。有段口縁などの定型化した壺が少なく、甕は無文の有段口縁が目立ち、擬凹線のある有文の頸部に明確な面を持たないなど屈曲があまく、典型的な完成された月影式の甕を指摘できない。つまりSI001に関するれば従来の法仏式の範疇で納まる可能性が高い。しかしこの住居以外の土器には月影式とも判断される可能性があり、ここではこの2時期の過渡期とした。また西地区では竪穴住居の土器に先行して、SD066・SE067(この2つで土器の遺構間接合を確認)があり、居住域がこの地区にも広がったようである。竪穴住居はないが、旧河道で削平されたと推定したSD079に平地式住居の溝である可能性を求めることができる。旧河道の存在がこの時期まで遡るかは不明である。しかしⅠ期でも述べたように、東地区の建物群はより高い地山の範囲にあって、その高まりの一部は西地区まで続き、その部分にSD079などがある状況は検討を要する。つまり旧河道で東西に区画された状況は最終的なものであるとも考えられる。集落の北側を区画するSD062の土器にやや古い土器もあって、この時期には西地区にも居住域が存在した可能性がある。ちなみにSD066から出土した甕の放射性炭素年代測定ではほぼ紀元後1世紀代のデータが得られた。

Ⅲ期(集落の拡大)……後期末前葉(月影Ⅱ式前半)

西地区では4棟が切り合っていたなかでSI052が最初にあり、SD062の土器もこの時期から次の時期のものがほとんどである。また竪穴住居群と旧河道の間にはSD071・072の2条の溝がある。東地区ではSI001などの廃絶後に建物はなく、その西側にSK007・008・021などの土坑群が展開する。これらの土坑には完形となる壺(第30図1)とガラス玉(欠損)が出土し、これらを供献品と考えると、東地区は西地区の建物と平行する時期には、自然河道を挟んだ墓域となったとも考えられる。この時期の土器は甕の有段口縁でも擬凹線文があるものがほとんどで、壺・高坏などと併に定型化しつつあるのは近隣の加賀などと同じである。

IV期(集落の移動)……後期末後葉(月影Ⅱ式後半)

東地区では先に述べた土坑の一部に加え、調査区東端の土坑(SX036・037)がこの時期まで下るようである。西地区ではSI051から玉作関連遺物が大量に出土し、玉生産において明らかに時期の違いを指摘できる。その北側のSD062の覆土を充填するように出土していた土器や、集落北端の落ち込みの土器群SX058・059もこの時期のもので、図化できた土器は多い。他にSI053とやや離れて位置するSI056とかがこの時期の可能性がある。SI051の床面で採集された炭化米の放射性炭素年代測定では、紀元後1世紀半ばから2世紀半ばのデータが得られた。

V期(集落の縮小)……古墳時代初頭(石川県の土器編年の白江式)

東地区ではこの時期まで下る土坑(SK020)があるが、明確なものは少なくなる。西地区ではSI055がこの集落の最後の時期となり、近接するがSI054も同時期か、やや先行するかもしれない。また旧河道もこの時期に西側に大きく削平されたものと推定される。土器のまとめでも述べたが、SI055と包含層出土の北陸北東部系の高坏(富山県の器種分類では盤状高坏とされている)口縁は北陸南西部でも越前では初めて確認したもので、このタイプの高坏の最も西での確認例ではないかと考えられる。

第7表 高柳・下安田遺跡主要遺構変遷表

主な遺構 画期	SD062	西地区の主な遺構 (竪穴住居など)	性格	旧河道	東地区の主な遺構 (竪穴住居など)	性格
I期	×	×	無人	?	SI003-002・SB004	居住域
II期	?	SD006・SE067 SD079(平地式住居)	居住域?	?	SI001・SB005 SD029・SB006・SD022	居住域
III期		SI052・SD071・072	居住域		SK007-008 SK021-019	墓域?
IV期		SI051・SI053・SI056(?) SK068・069	居住域		SK020	墓域?
V期		SI055・SI054(?)	居住域	張出し部	土坑の一部が 残る可能性あり	墓域?

第3節 遺跡の立地と時期 — まとめて代えて—

九頭竜川を挟んだ南側約4kmには、この時期を代表する林・藤島遺跡群がある。8年に及ぶ発掘調査で70棟近い建物が確認されたが、それらの多くが本遺跡東地区に併行する法仏式を主体とする時期で、西地区に併行する時期は明確ではない。その立地は扇状地で、竪穴住居35棟・掘立柱建物24棟に平地式住居は9棟と同じような傾向である。また湧水点と考えられる砂礫層にまで底が達した土坑、つまり井戸と考えられる遺構はこの大規模な集落にも関わらず1基のみである。若宮遺跡では平地式住居とともに複数の井戸が出土し、舟寄福島通遺跡の井戸は深さ1m以上も掘削し、湧水点である砂層に達している。水に漬かりやすい沖積低地の集落は、床面を掘り込まない平地式住居を選択し、新鮮な水を求めて深い井戸を掘削する。後期に入ると低地にも同様な集落は形成するが、それまでは集落がなかった扇状地にも進出し、竪穴住居を生活の中心とし、井戸を掘削せずに、近くの露出した湧水点から生活水を得ていたようである。この湧水についての具体的な状況は本遺跡では確認できなかったが、先に報告した上安田向田遺跡では土器が出土した近くの砂層から、真夏にもかかわらず冷たい水が湧き出ていることを

確認している。よって本遺跡でも井戸の可能性があることは指摘したが、扇状地にある高柳・下安田遺跡の集落にとって井戸は絶対に必要な遺構ではなく、西地区で井戸の可能性を指摘した遺構(SK060・SE068・SE069)の性格については検討を要する。

集落の構造は同時期の周辺の集落と比較すると、沖積低地に立地する遺跡では竪穴住居ではなく平地式住居に井戸が伴うが、扇状地に立地する本遺跡は竪穴住居を中心としており確認された遺構も特殊なものではなく、一般的な構造である。しかし集落の最盛期には青銅器の鋳造と大々的な玉生産を行い、古墳時代に入ると縮小した。その中心となる時期は北陸のこの時期の指標である石川県の土器編年の月影式で、その実年代はこのあとの附編にまとめている加速器質量分析法(AMS)による放射性炭素年代測定で示された、西暦紀元後1世紀から2世紀半ばである。この実年代はすでに公表されている石川県金沢市大友西遺跡の年輪年代測定結果よりやや古い、多数のデータが提示された富山県高岡市下老子笹川遺跡ではその主体となる実年代が西暦紀元後1世紀後半から2世紀前半と本遺跡のものに近い。下老子笹川遺跡では土器の時期幅がやや広いが、これらも含めて本遺跡のデータと合わせて再度検討する必要がある。

第8章 附編 自然化学分析

第1節 自然化学分析の概要

ここでは銅鐸片の保存処理に際して行った鉛同位体などの化学分析と、放射性炭素年代測定(AMS)の分析を行った煤付着の土器、炭化米、ならびに木片についての考古学的な状況について説明しておく。当初は年代測定の分析対象には土器を優先し、特に銅鐸祭祀の終焉を探るべく銅鐸片が出土した竪穴住居SI001から出土した土器を対象とする予定であったが、測定に必要な炭化物が採集可能で、時期が明確に示すことのできる土器はなかった。この竪穴住居に固執することなく、測定に必要な煤が付着した土器のいくつかで検討したが、結局SD066の甕1点以外は必要量が得られなかったため、SI051の床面でまとまって大量に出土した炭化米と、その竪穴住居の柱穴と考えられるSP12とSP14から出土した木片2点で実施した。炭化米は住居の床面近くで、大きさ約50cmの円形に広がって確認された。

以下、それぞれ分析を依頼した機関からの報告を掲載する。

第2節 高柳・下安田遺跡出土銅鐸片の分析について (第91～94図、第8・9表)

岡山県文化財研究所 鈴木稔

1 はじめに

調査実施項目はX線透過写真撮影、蛍光X線分析による合金材料の非破壊的測定、以上3項目である。

2 実験と結果

① 銅鐸片A、B、CのX線透過写真を撮影した。撮影条件は管電圧140kV、管電流2mA、管球からフィルムまでの距離100cm、富士IX50フィルム使用。照射時間は90秒と150秒(このときは0.027mm鉛増感紙使用)で、フィルムバックに直接載せて撮影した。この写真を検討した結果、目立った亀裂はないものの鑄造時の鬆孔が目立ち、とくにA片の鬆孔は破断面付近に多く存在しているので遺物の強度に悪影響を及ぼしている可能性がある。

② 各片から鉛同位体比分析用の試料をメスと小型グラインダーを用いて削り、微量の試料を採取した。写真に「分析箇所」として示したのが試料採取位置である。この分析の結果、3片の鉛同位体比はともに華北領域内のa領域の中に比較的集中して分布していることがわかった(別項参照)。

③ 前項の試料採取部位を利用して蛍光X線分析を行なった。使用したのはエネルギー分散型微小部蛍光X線元素分析装置(セイコーインスツル製SEA-5290型)で、直径約0.1mmに絞ったX線を測定対象に照射して2次的に生じた蛍光X線を半導体検出器で受けて元素含有量を測定するものである。測定条件は、励起電圧50kV、管電流1,000 μ A、真空雰囲気、測定時間300秒。結果を青銅合金の主要な元素である銅:スズ:鉛のおよその重量百分率で表すと、次表のようになった。この測定法は文化財を傷つけず、比較的短時間で簡便に測定できる特長を持つが、測定結果にばらつきその他の問題点があることも事実である。

	銅	スズ	鉛
銅鐸片A	93	5	2
銅鐸片B	95.5	3.5	1
銅鐸片C	95	2	3

今回の測定では、鉛同位体比分析用の試料を採取した部位を利用したのでサビや付着物がかなり取り除かれて、合金そのものの成分を比較的によく反映していると考えられるが、この程度のばらつきが出ると成分の差なのか、分析法の限界なのか判断に苦しむところである。

3 まとめ

蛍光X線分析の結果からみて、銅合金の主要3元素のうち銅が90%以上を占めスズ、鉛はいずれも数%

程度にとどまる。先行する青銅器の分析例から見て、弥生時代後期の銅鐸にこのような傾向が見られるようである。銅成分が多くなると、いわゆる「湯」の回りが悪くなり鍍上がりに傷や鬆孔が増えると考えられるが、この銅鐸片の場合にも当てはまるようである。3点の破片が同一個体あるいは同一の「湯」に由来するものであるかについては、鉛同位体比分析からも蛍光X線分析からも確認が得られなかったが、仮に同一個体でも部位によって(例えば湯口に近いかそうでないか、上か下かで)相当の不均一性が表れることを考えると、同一個体あるいは同一材料である可能性も否定できないように思う。

第3節 高柳・下安田遺跡銅鐸片の鉛同位体比 別府大学文学部 西田京平・平尾良光

1 はじめに

勸山梨文化財研究所より、福井県坂井市高柳・下安田遺跡から出土した銅鐸片3点に利用されている材料に関して鉛同位体比測定の依頼があった。本報告では銅鐸片3点に含まれる鉛の同位体比測定を行い、産地推定を行った結果を報告する。

2 資料

鉛同位体比測定に必要な試料の採取は山梨文化財研究所で行われた。採取された試料を用いて、鉛同位体比測定を行った。

3 鉛同位体比法

鉛同位体比法に関する原理の説明は他の文献に譲る^{*1,2)}。

鉛同位体比測定の概略は次の通りである。測定用に採取された試料を石英ビーカーに入れ、硝酸で溶解し、適量の蒸留水を加えて溶液とした。この溶液を白金電極を用いて直流2V(ボルト)で電気分解し、鉛を二酸化鉛として陽極に集めた。析出した鉛を硝酸と過酸化水素水で溶解し、試料溶液とした。この溶液の中から0.2 μ g(マイクログラム)の鉛をとり出し、リン酸シリカゲル法でレニウムフィラメント上に塗布し、本学に設置されているサーモフィッシャーサイエンティフィック社製表面電離型質量分析計MAT262に装着した。分析計の諸条件を整え、フィラメント温度を1200 $^{\circ}$ C、測定までの昇温時間20分に設定して鉛同位体比を測定した。同一条件で測定した標準鉛NBS-SRM-981で規格化し、測定値とした。

第8表 高柳・下安田遺跡から出土した銅鐸片の鉛同位体比一覧表

資料名	$^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	測定番号
銅鐸片A-1	17.737	15.542	33.653	0.8762	2.1654	BPA5062-1
銅鐸片A-2	17.741	15.546	33.668	0.8763	2.1657	BPA5062-2
銅鐸片B-1	17.747	15.550	33.677	0.8762	2.1658	BPA5063-1
銅鐸片B-2	17.739	15.541	33.649	0.8761	2.1652	BPA5063-2
銅鐸片C-2	17.750	15.547	33.663	0.8759	2.1652	BPA5064-1
銅鐸片C-1	17.751	15.549	33.668	0.8759	2.1653	BPA5064-2
誤差範囲(1 σ)	± 0.010	± 0.010	± 0.030	± 0.0006	± 0.0003	

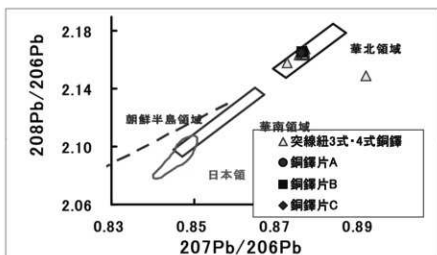
第9表 資料の鉛同位体比の平均値一覧表

資料名	$^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	測定番号
銅鐸片A	17.739	15.544	38.4152	0.8762	2.1655	BPA5062
銅鐸片B	17.743	15.545	38.4224	0.8761	2.1655	BPA5063
銅鐸片C	17.751	15.548	38.4345	0.8759	2.1652	BPA5064
誤差範囲(1 σ)	± 0.010	± 0.010	± 0.030	± 0.0006	± 0.0003	

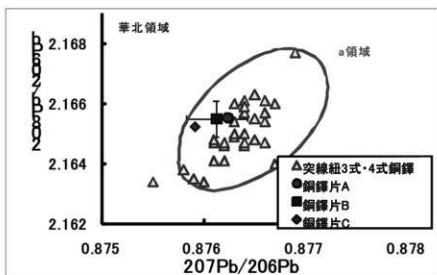
4 測定結果と考察

今回測定した鉛同位体比値を第8表で示した。今回、同一試料について二度の鉛同位体比測定を行った。それぞれの値に大きな違いは見られなかったため、測定値の平均を資料の鉛同位体比の値とした。この値を第9表に示した。

表の値を理解するひとつの方法として鉛同位体比を図で示した。横軸が $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ 、縦軸が $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ の値とした図を第91・92図とし、横軸が $^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ 、縦軸が $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ の値とした図を第93・94図とする。これらの図には鉛同位体比に関して今までに得られている結果を概念的に表している。日本の弥生時代に相当する頃の東アジア地域において、主として中国前漢鏡が分布する領域を後の他資料との比較から華北領域と仮定した。華北領域の中で、特に弥生時代後期の青銅器資料の鉛同位体比測定結果が集中する領域をa領域とした。中国後漢鏡および三国時代の銅鏡が分布する領域を後の他資料との比較から華南領域と仮定した。現代の日本産の主要鉛鉱石が入る領域を日本領域とし、多鈕細文鏡が分布する領域の中央線を朝鮮半島領域と仮定した。

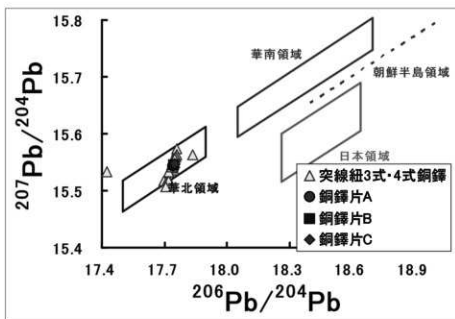


第91図 高柳・下安田遺跡から出土した銅鐸片の鉛同位体比

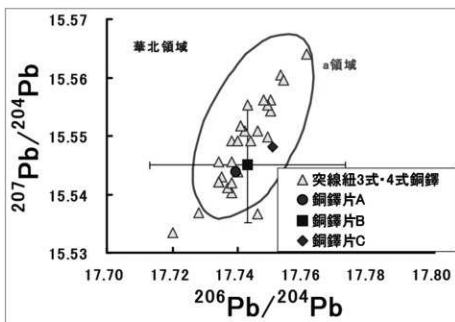


第92図 高柳・下安田遺跡から出土した銅鐸片の鉛同位体比(拡大)

※ ⊕ で示した誤差範囲は各試料に付随しているが、図が煩雑となるため、1つの資料で表現した。



第93図 高柳・下安田遺跡から出土した銅鐸片の鉛同位体比



第94図 高柳・下安田遺跡から出土した銅鐸片の鉛同位体比(拡大)

これら2種類の図に、今回得られた銅鐸片の鉛同位体比測定結果と、現在までに測定されている突線鈕3式と4式の鉛同位体比測定結果をプロットした図を、第91～94図で示した。

これらの図によると、銅鐸片3点には華北産の材料が使用されたと推察できる。また、これら3点の本銅鐸片は第91～94図ともに、華北領域内のa領域の中に分布している。このa領域は突線鈕2式から5式の銅鐸の鉛同位体比が分布している領域であり、一般論として突線鈕3式と4式の鉛同位体比もそのほとんどがa領域内に分布している。今回の銅鐸片は考古学的な見地から突線鈕3式もしくは4式と推定されており、鉛同位体比の測定結果を踏まえると、それがより確かになったといえる。

銅鐸片3点(A、B、C)のいずれもが誤差範囲の中に一致している。測定結果と出土状況などから、これ

ら銅鐸片が元は同一の銅鐸であったことを示唆するが、突線鈕の2～5式のほんどがこのa領域に分布するため、必ずしも同一個体の銅鐸の破片であるとは断定できない。(2007年3月28日)

引用参考文献

- (1) 平尾良光・山岸良二編：鉛同位体比法「青銅鏡・銅鐸・鉄剣を探る」[文化財を探る科学の眼③]、(国土社)、(1998)
 (2) 平尾良光編：「古代青銅の流通と製造」、(鶴山堂)、(1999)
 (3) 平尾良光：鉛同位体比の測定と分析、「考古資料大観6 弥生・古墳時代 青銅・ガラス製品」、井上洋一・森田修編、(小学館)、(2003)

第4節 放射性炭素年代測定 (第95図、第10・11表) パレオ・ラボAMS年代測定グループ (小林絏一・丹生越子・伊藤茂・廣田正史・瀬谷薫・Zaur Lomtadize・Ineza Jorjoliani・中村賢太郎)

1 はじめに

福井県坂井市高柳・下安田遺跡出土より検出された試料について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

試料の調製は廣田、瀬谷、Lomtadize、Jorjoliani、測定は小林、丹生、伊藤、本文は伊藤、中村が作成した。

2 試料と方法

測定試料の情報、調製データは第10表のとおりである。試料は、SD066出土土器(第67図2)の外表面付着炭化物(PLD-7093)、SI051の炭化米(PLD-8046)、SI051-SP12出土木片(PLD-11267)、同SP14出土木片(PLD-11268)の計4点である。これらのうちSI051出土の木片2点(PLD-11267・11268)はいずれも部位が不明であった。SI051の木片2点については残存する中で最も外側を採取した。

試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS: NEC製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

第10表 測定試料及び処理内容一覧表

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-7093	遺構: SD066 墓(実測図第67図2) 遺物No: 1088	試料の種類: 土器付着炭化物 付着部位: 外面 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 0.1N, 塩酸: 1.2N) 処理時の加見: 砂混じり
PLD-8046	遺構: SI051(堅穴住居)床面 炭化米	試料の種類: 炭化米 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1N, 塩酸: 1.2N)
PLD-11267	遺構: SI051(堅穴住居) -SP12 試料No.: 木片1	試料の種類: 生材 試料の性状: 部位不明、外側2年輪分 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1N, 塩酸: 1.2N) サルフィックス
PLD-11268	遺構: SI051(堅穴住居) -SP14 試料No.: 木片2	試料の種類: 生材 試料の性状: 部位不明、外側5年輪分 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1N, 塩酸: 1.2N) サルフィックス

3 結果

第11表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}C$)、同位体分別効果の補正を行って暦

年校正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した14C年代、14C年代を暦年代に校正した年代範囲を、第95図に暦年校正結果をそれぞれ示す。暦年校正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年校正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年校正を行うために記載した。

14C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。14C年代(yrBP)の算出には、14Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した14C年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の14C年代がその14C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

なお、暦年校正の詳細は以下の通りである。

第11表 放射性炭素年代測定及び暦年校正の結果一覧表

測定番号	$\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$	暦年校正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に校正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-7093	-23.23 \pm 0.15	1943 \pm 22	1945 \pm 20	25AD(68.2%)85AD	1AD(95.4%)130AD
PLD-8046	-25.4 \pm 0.29	1895 \pm 20	1895 \pm 20	80AD(68.2%)125AD	50AD(94.4%)140AD 190AD(1.0%)210AD
PLD-11267 試料No: 木片1	-26.72 \pm 0.24	2290 \pm 25	2290 \pm 25	400BC(68.2%)365BC	410BC(76.4%)350BC 290BC(19.0%)230BC
PLD-11268 試料No: 木片2	-25.4 \pm 0.20	2455 \pm 24	2455 \pm 25	750BC(26.9%)680BC 670BC(8.6%)640BC 590BC(2.4%)570BC 560BC(20.6%)490BC 470BC(2.9%)450BC 440BC(6.8%)410BC	760BC(28.2%)680BC 670BC(13.6%)610BC 600BC(53.6%)410BC

暦年校正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5568年として算出された14C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、及び半減期の違い(14Cの半減期5730 \pm 40年)を校正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

14C年代の暦年校正にはOxCal3.10(校正曲線データ: INTCAL04)を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された14C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2 σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は14C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年校正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

4 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年校正を行った。2 σ 暦年代範囲に着目して結果を整理する。2 σ 暦年代範囲は95.4%の確率でこの範囲に暦年代が収まることを意味する。

SI461出土土器(1088)の外表面付着炭化物(PLD-7093)は、1-130calAD(95.4%)。イ400内の炭化米(PLD-8046)は、50-140calAD(94.4%)および190-210calAD(1.0%)。SI400SP442出土木片(PLD-11267)は、410-350calBC(76.4%)および290-230calBC(19.0%)。SI400SP471出土木片(PLD-11268)は、760-680calBC(28.2%)、670-610calBC(13.6%)、600-410calBC(53.6%)。いずれも弥生時代に相当する暦年代が得られた。

なお、木材試料は、部位が内側であれば年輪数に応じて、枯死・伐採の年代よりも古い年代が得られる。これは古木効果と呼ばれる。今回測定した試料のうち、SI051出土の木片2点(PLD-11267・11268)は、部位が不明であり、内側の年輪である可能性があるため、古木効果の影響を考慮する必要がある。

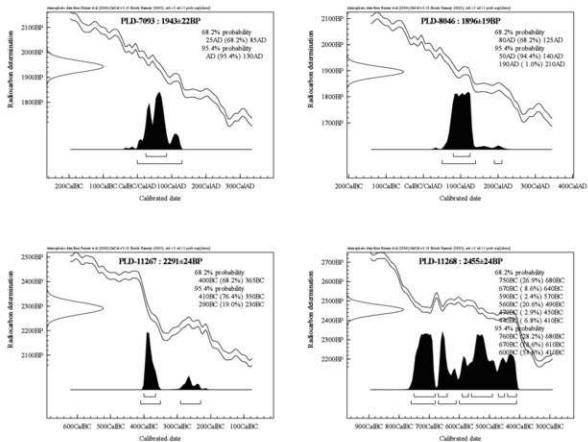
参考文献

中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎,日本先史時代の14C年代, 3-20.

Ramsey C.B. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program, Radiocarbon, 37, 425-430.

Ramsey C.B. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43, 355-363.

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C. J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hoog, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Ramsey, C.B., Reimer, R.W., Remmele, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., Van der Plicht and Weyhenmeyer, C.E. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP, Radiocarbon, 46, 1029-1058.



第95図 暦年較正結果図

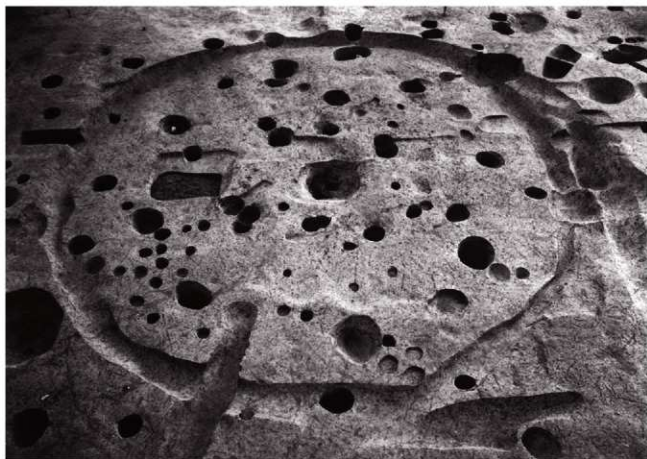
写 真 图 版



① 東地区SI001・SB005全景（西より）



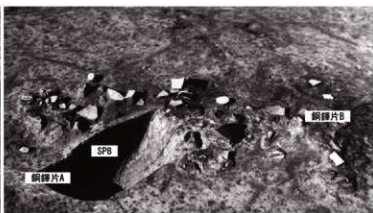
② 東地区SD022・SB006・SI001全景（東より）



① 東地区SI001全景（北より）



② 東地区SI001床面出土状況（南より）



③ 東地区銅鐸片A・B出土状況（東より）



④ 東地区SI001北側床面出土状況（南東より）



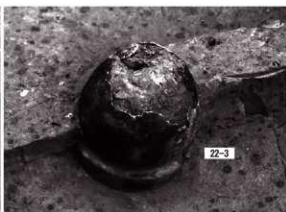
⑤ 東地区SI002・SI003上層（炭化面上）遺物出土状況（南東より）



① 東地区SI002・SI003全景（北西より）



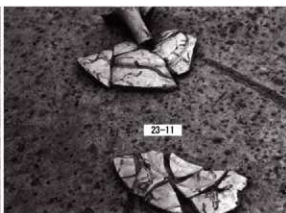
② 東地区SI002床面出土状況（南より）



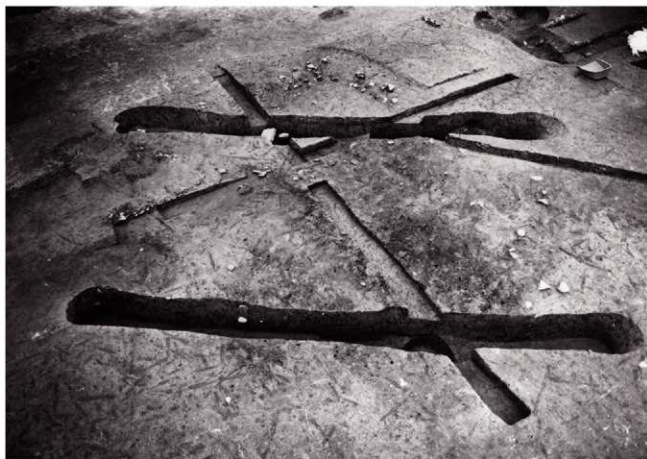
③ 東地区SI002床面出土状況（南より）



④ 東地区SI003床面出土状況（北より）



⑤ 東地区SI002高杯出土状況（北より）



① 東地区SB004全景 (南より)



② 東地区SB005全景 (南西より)



① 東地区SI001・SB006周辺全景（真上より）



② 東地区SB006全景（北より）



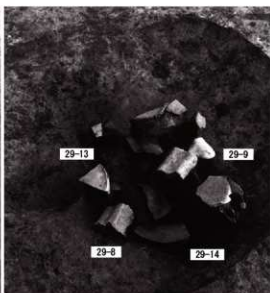
① 東地区SK019土器出土状況（北西より）



② 東地区SK021土器出土状況（東より）



③ 東地区SD022出土状況（北より）



④ 東地区SK036土器出土状況（南西より）



⑤ 東地区襪層（SX039付近）土器出土状況（南より）



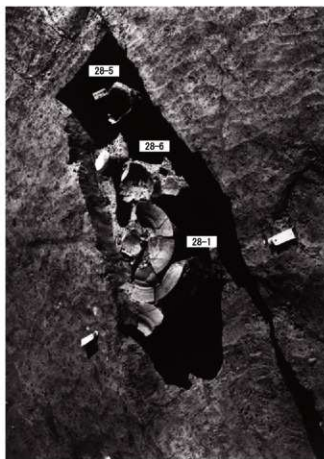
⑥ 東地区SK020土器出土状況（南東より）



① 東地区SK007 (右)・008 (左) 全景 (東より)



② 東地区SK008土層断面 (西より)



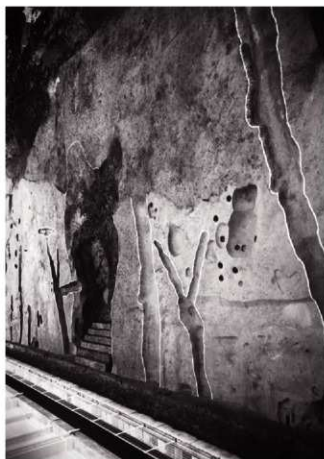
③ 東地区SD009土器物出土状況 (南西より)



④ 東地区SK007土器出土状況 (南より)



① 東地区18年度調査区全景（南より）



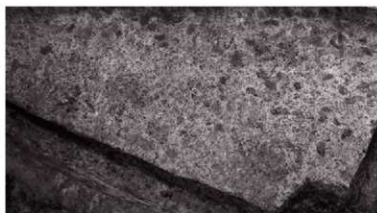
② 東地区18年度調査区北側（北より）



③ 東地区18年度調査区SB040全景（東より）



① 西地区堅穴住居群近景SI051～SI055（西より）



② 西地区SI057近景（西より）



③ 西地区SD062土器出土状況近景（南より）



④ 西地区SD062土器出土状況（北より）



⑤ 西地区SD062土器出土状況（西より）



① 西地区SI051全景（西より）



② 西地区SK065土器出土状況（東より）



③ 西地区SI051土器出土状況（北より）



④ 西地区SI051北西コーナー土器出土状況（南より）



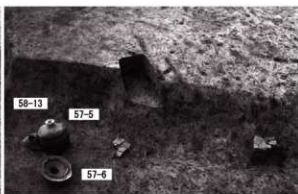
⑤ 西地区SI051床面器台出土状況（南より）



① 西地区SI052～SI055全景（南西より）



② 西地区SI052床面土器出土状況（南東より）



③ 西地区SI052西壁土器出土状況（東より）



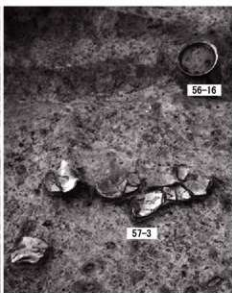
④ 西地区SI052-SP5土器出土状況（北より）



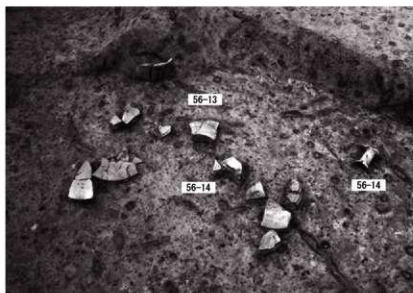
⑤ 西地区SI052土器出土状況（北東より）



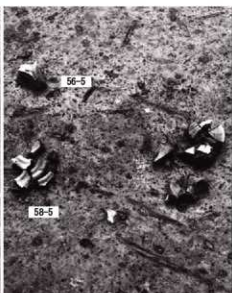
① 西地区SI1052土器出土状況（南より）



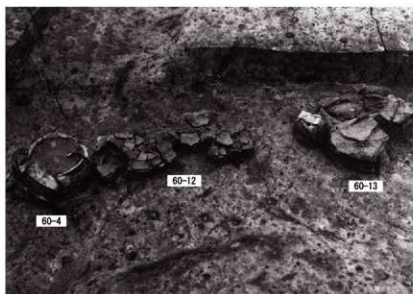
② 西地区SI1052土器出土状況（南東より）



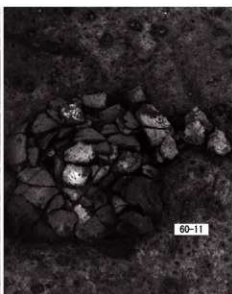
③ 西地区SI1052土器出土状況（南より）



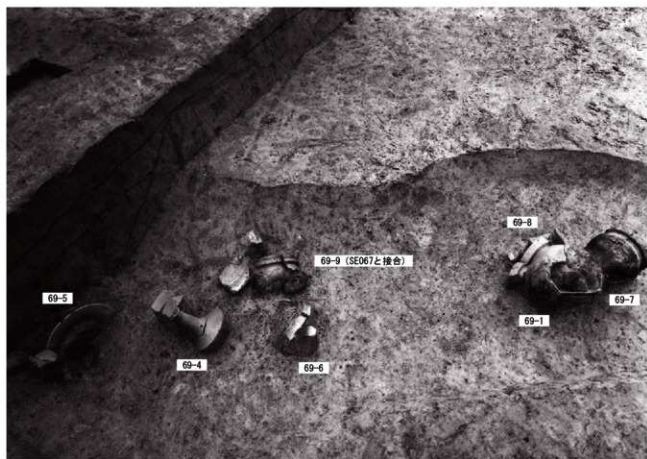
④ 西地区SI1052土器出土状況（東より）



⑤ 西地区SI1055土器出土状況（東より）



⑥ 西地区SI1055土器出土状況（南より）



① 西地区SD066土器出土状況（北東より）



② 西地区SD066土器出土状況（北東より）



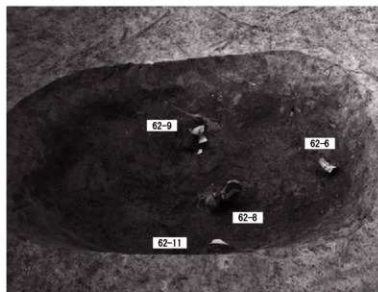
③ 西地区SD066土器出土状況（北東より）



④ 西地区SD066土器出土状況（北より）



⑤ 西地区SD066土器出土状況（北東より）



① 西地区SK060土器出土状況（西より）



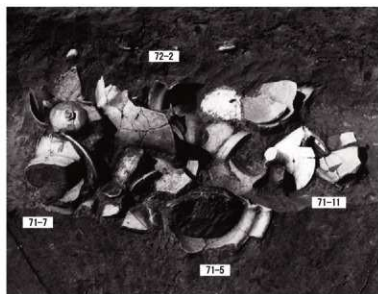
② 西地区SE069土器出土状況（北より）



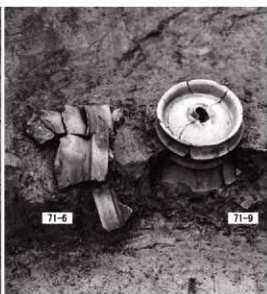
③ 西地区SX058土器出土状況（東より）



④ 西地区SE068土器出土状況（北西より）



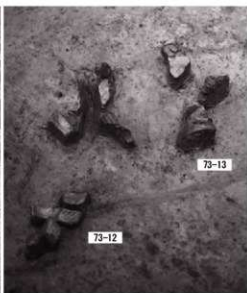
⑤ 西地区SX070土器出土状況その1（南より）



⑥ 西地区SX070土器出土状況その2（南より）



① 西地区SI056全景（南より）



② 西地区SK073土器出土状況（西より）



③ 西地区SK077土器出土状況（西より）



④ 西地区SP075土器出土状況（北東より）

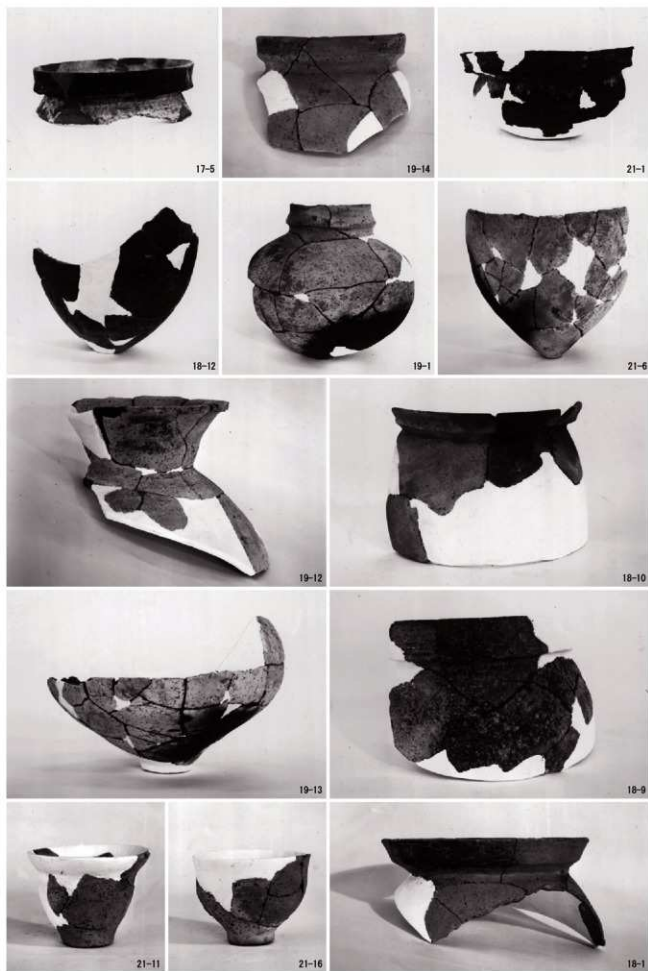


⑤ 西地区旧河道（SP080）土器出土状況（北東より）

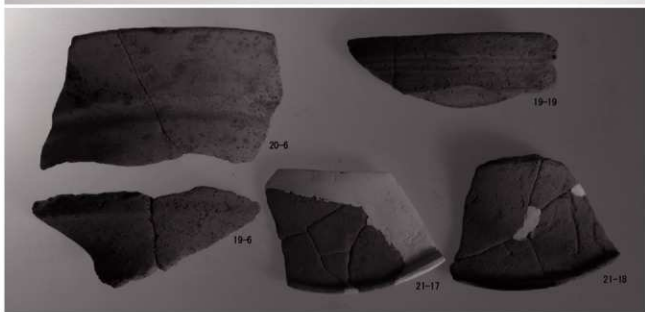
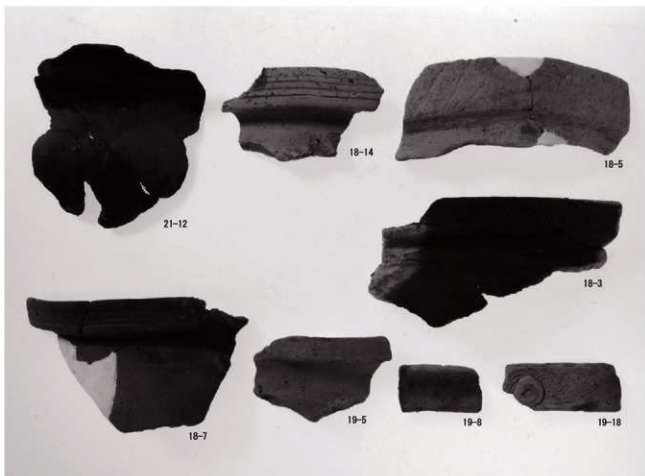


⑥ 西地区旧河道土器出土状況（北より）

図版第一六 遺物東地区(S1001) 出土土器

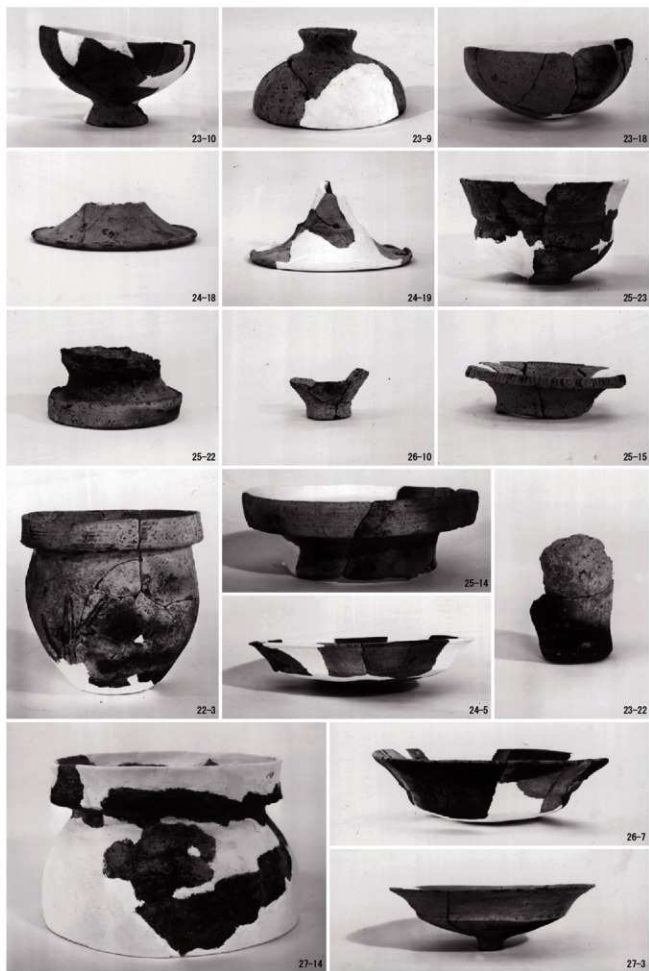


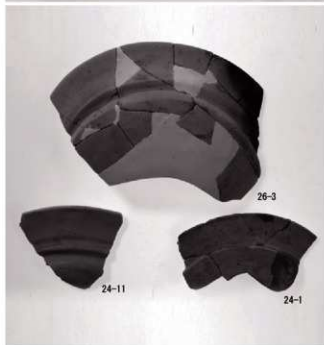
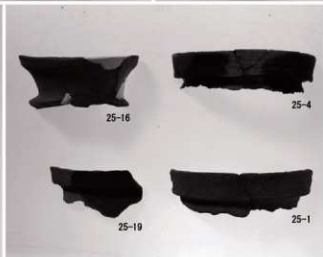
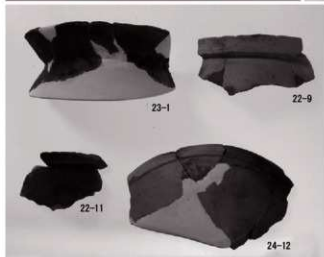
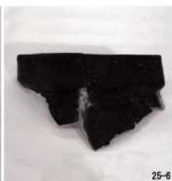


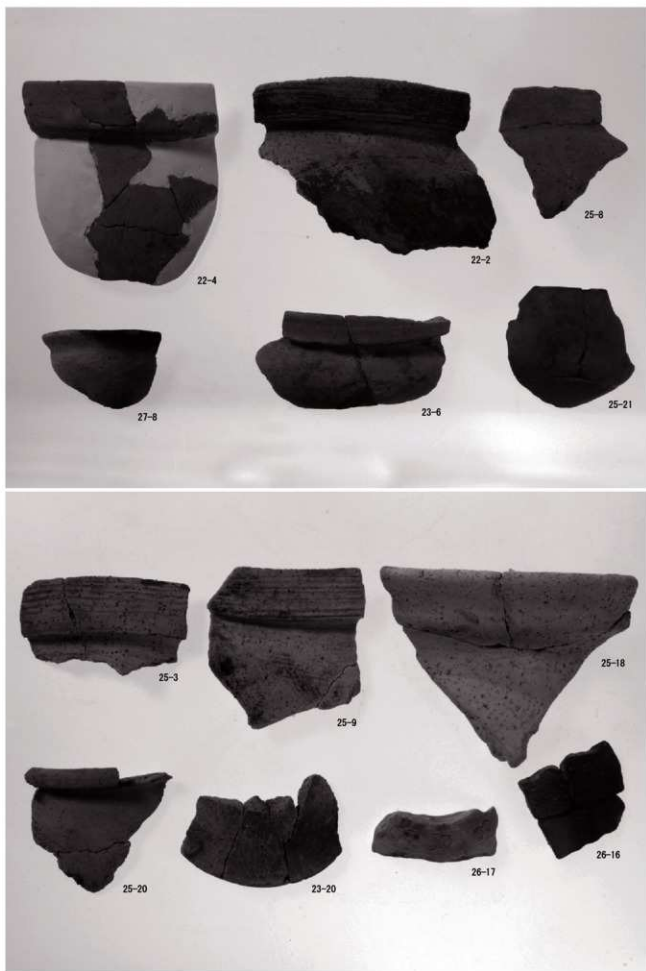


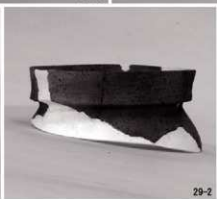


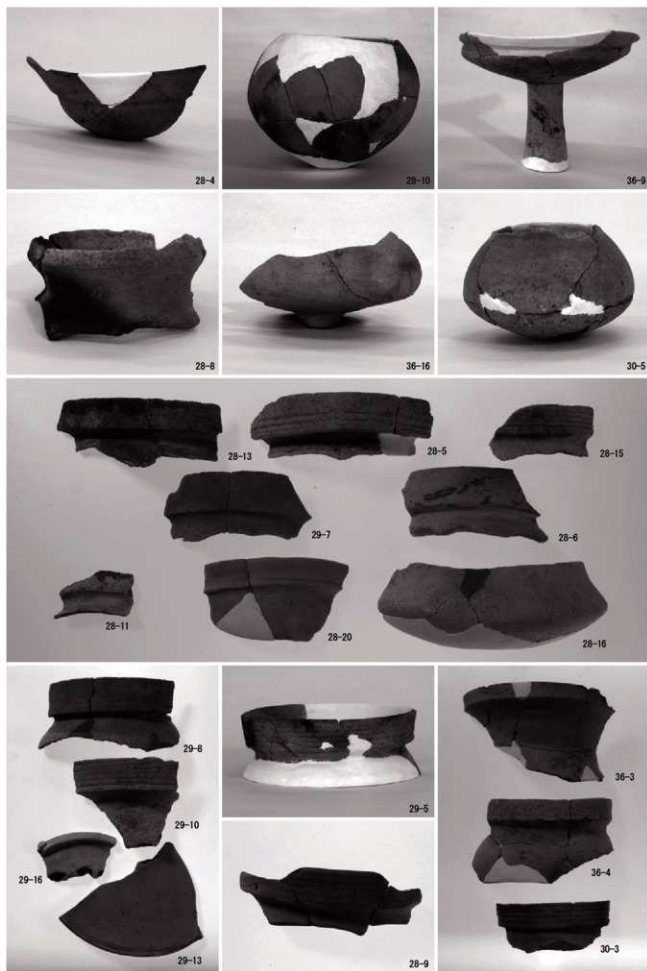
図版第二〇 遺物東地区 (S1002・S1003) 出土土器

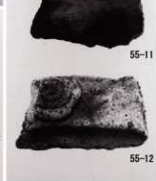


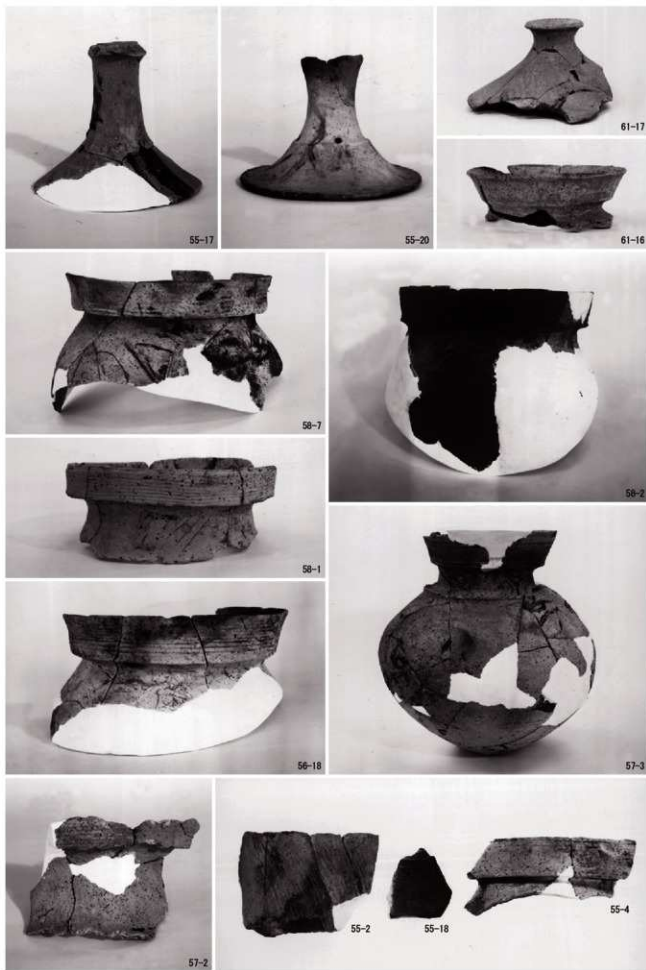


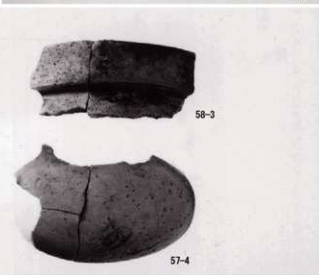
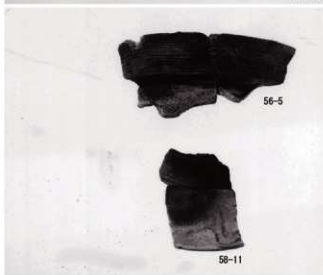


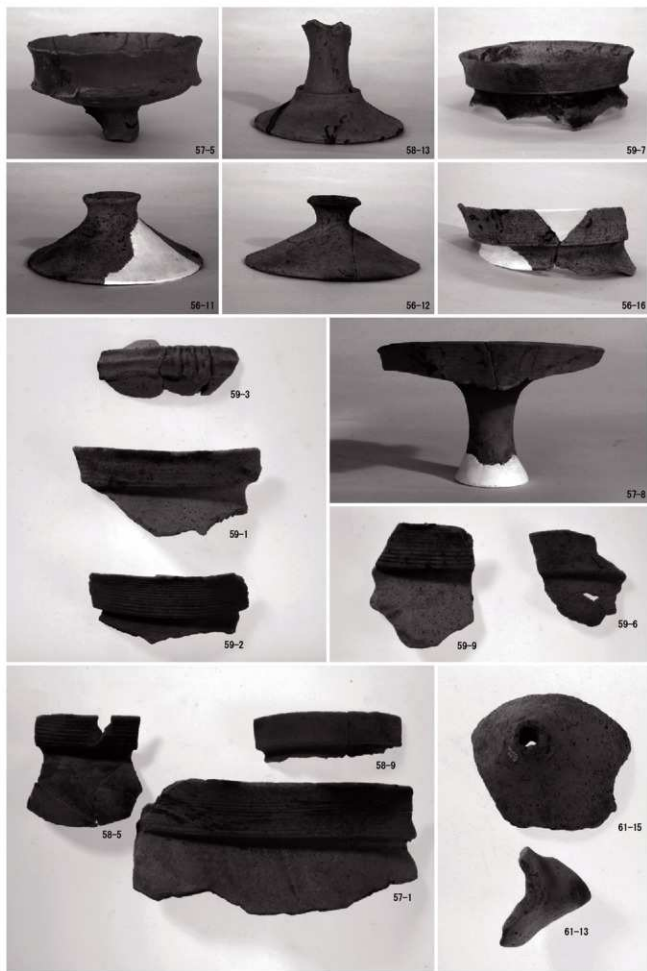


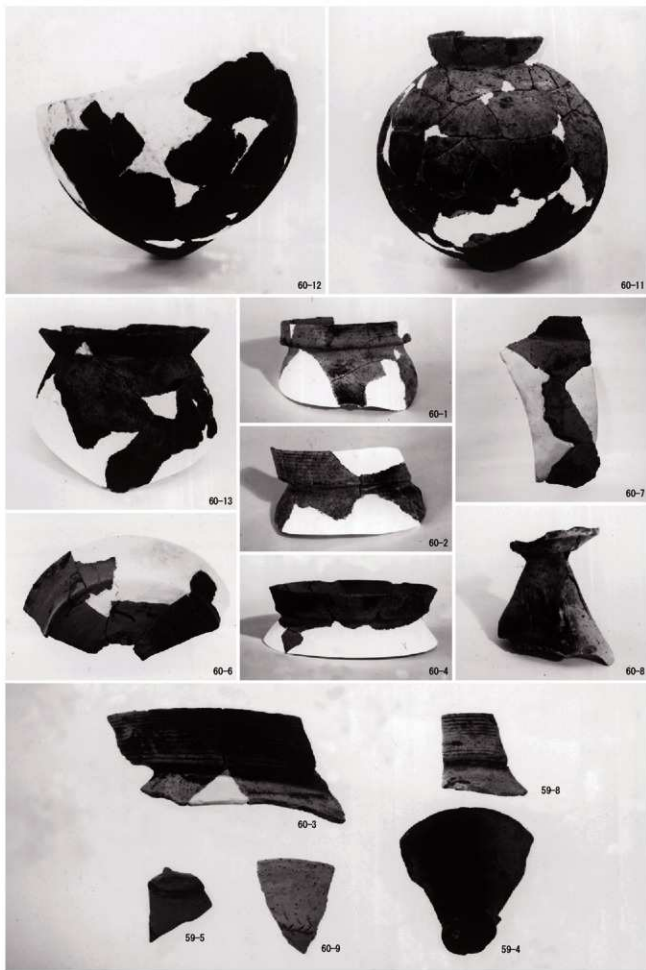








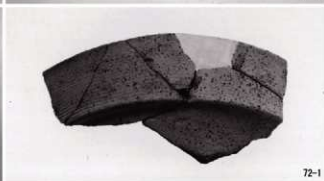


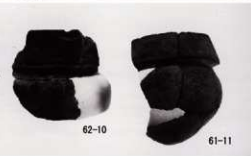






図版第三一 遺物西地区(SX070)出土土器







62-1



73-14



73-9



73-17



73-3



73-16

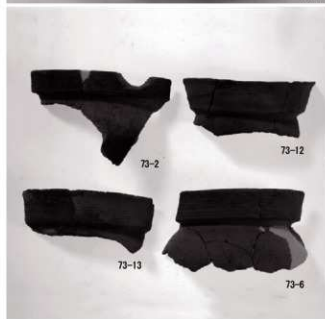


73-1



73-5

73-10



73-2

73-12

73-13

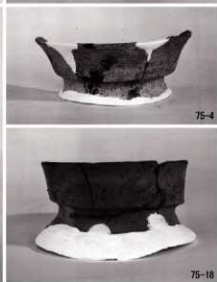
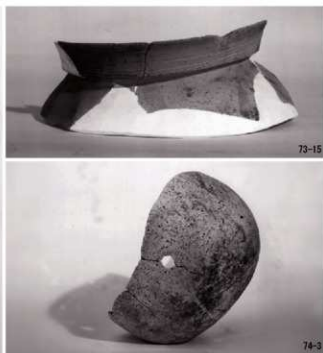
73-6



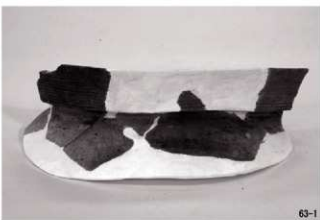
74-1



74-2

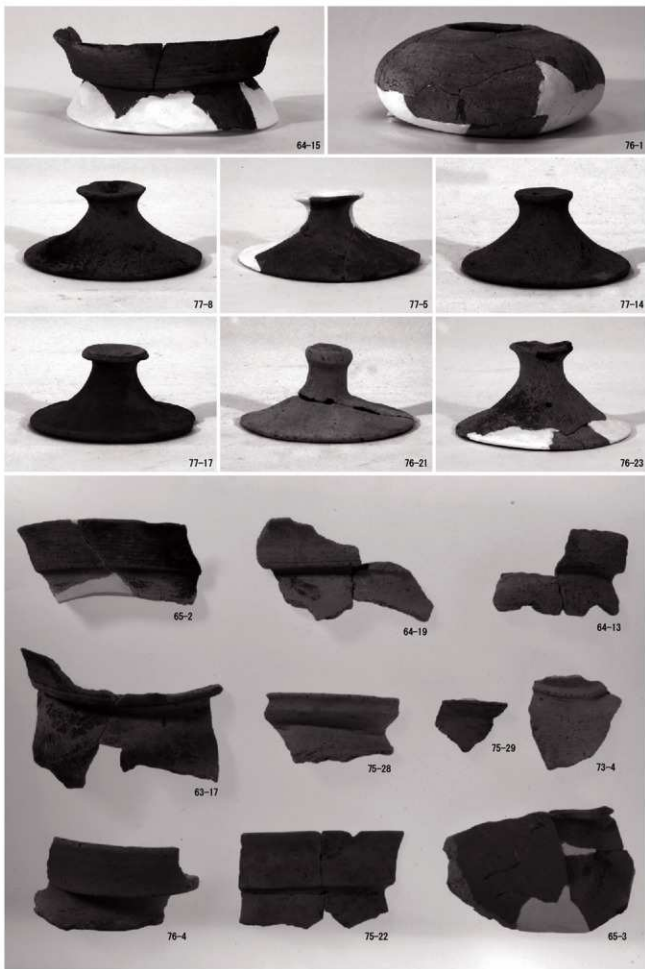


図版第三六 遺物西地区(SD062)出土土器

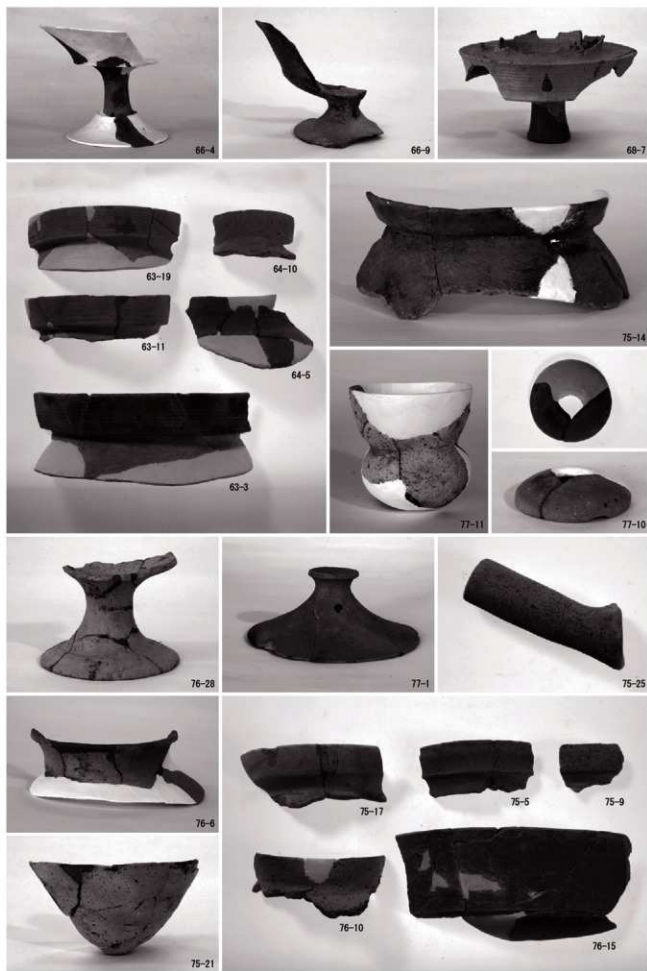


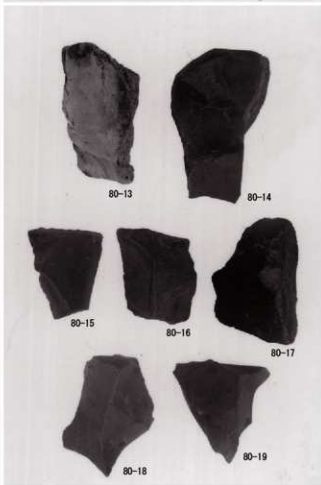
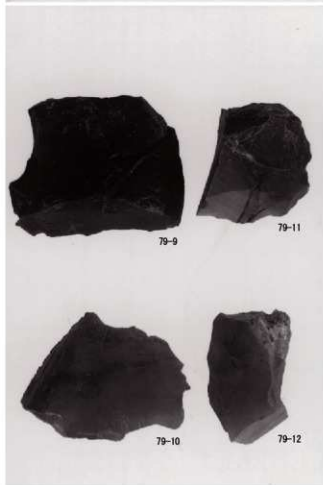
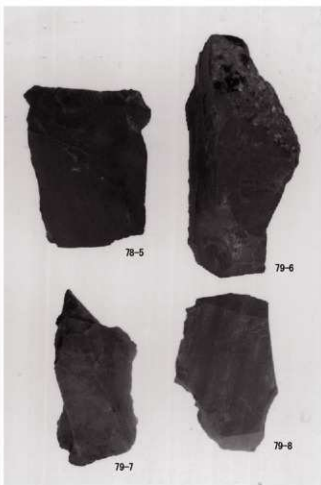
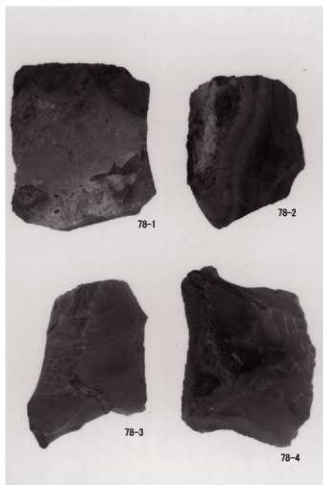


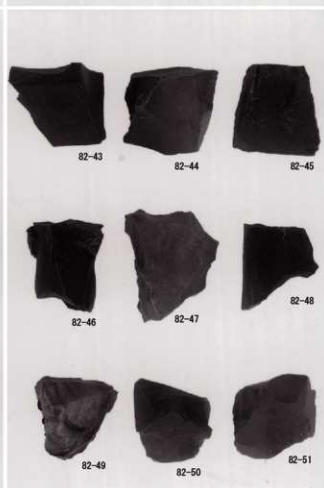
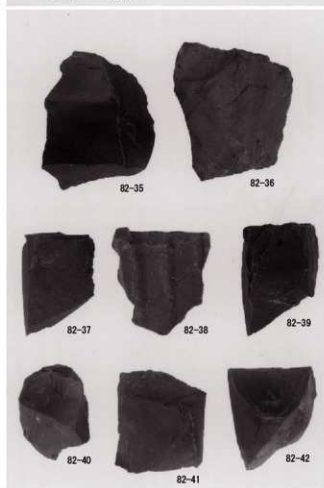
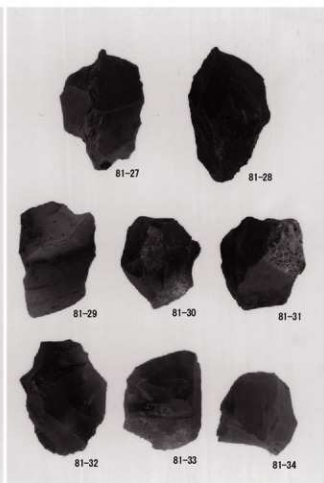
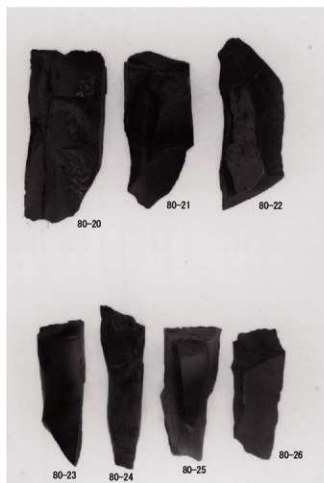


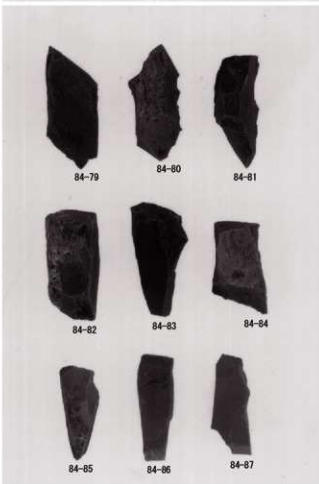
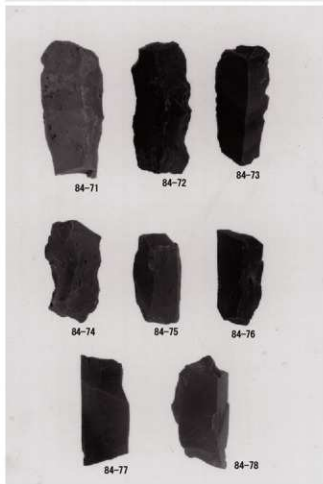
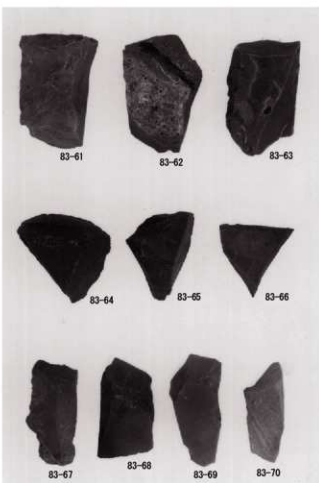
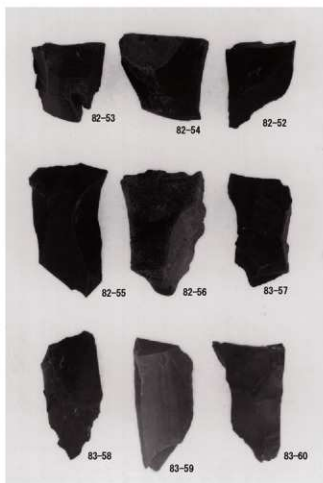


図版第四〇 遺物西地区(SD062・包含層)出土土器

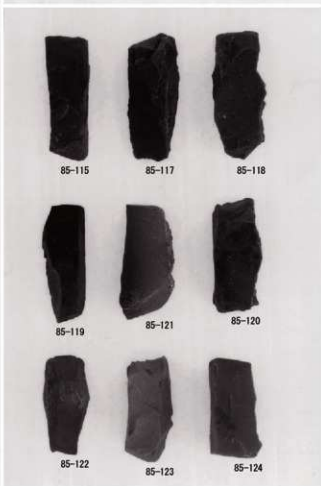
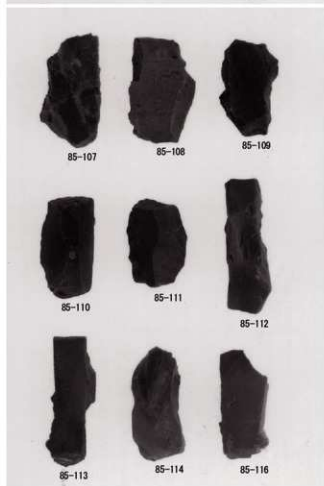
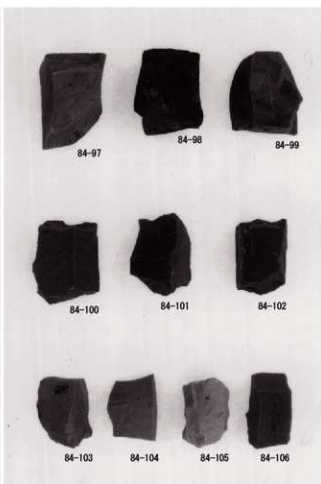
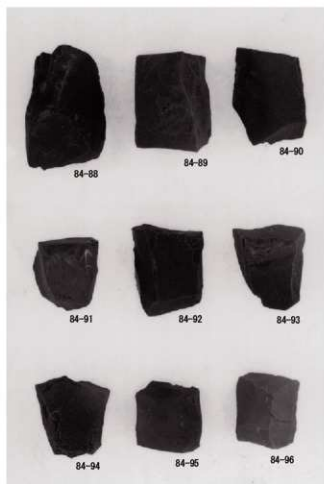


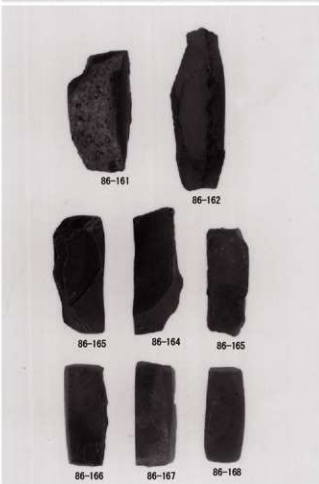
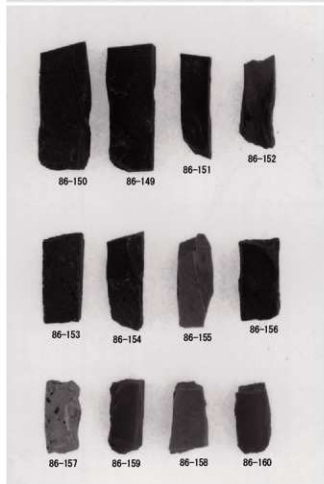
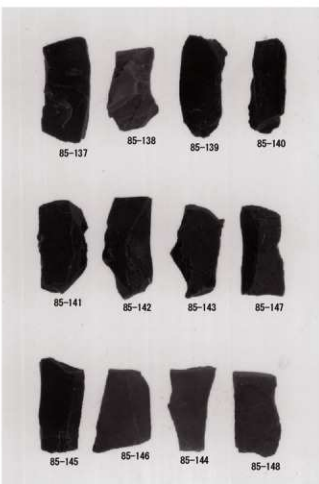
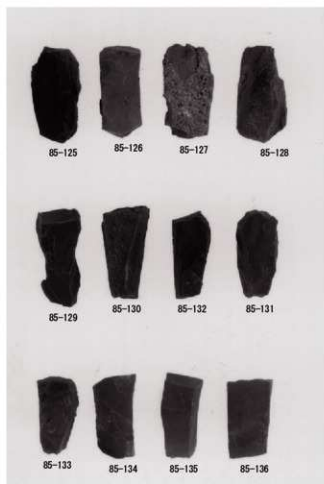


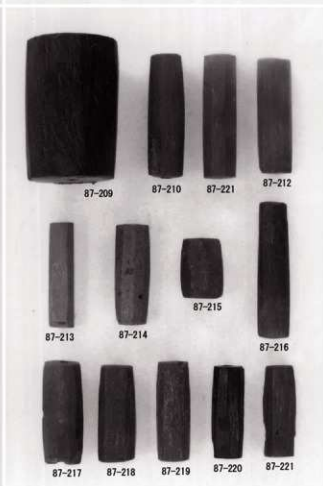
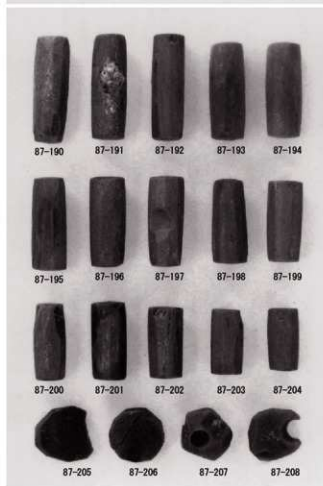
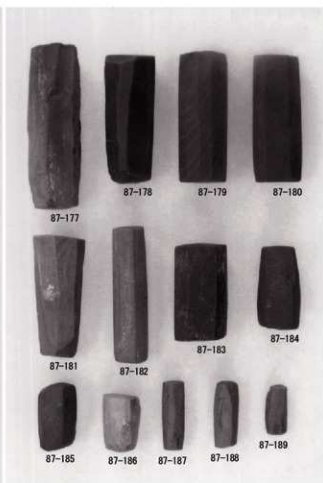
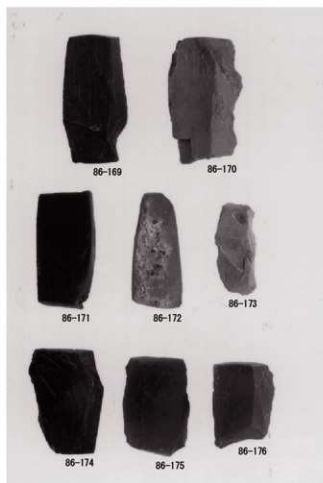


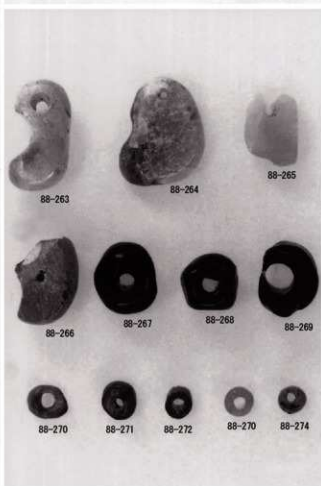
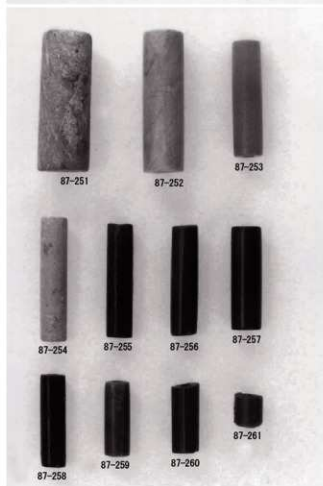
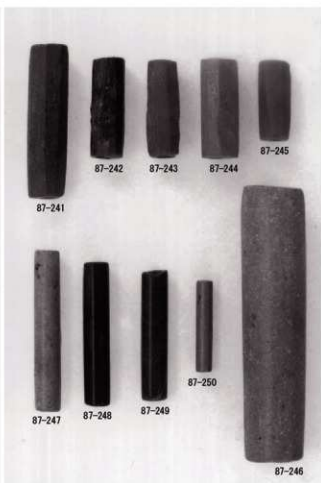
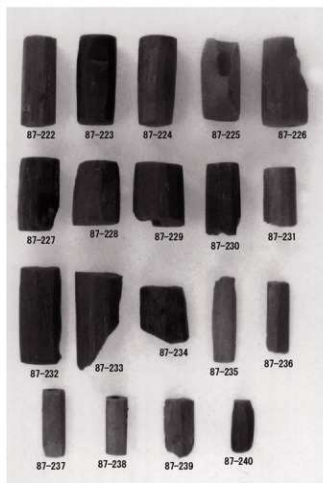


図版第四四 遺物 玉作関係遺物

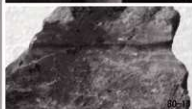
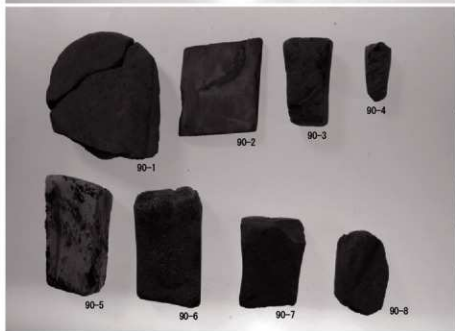
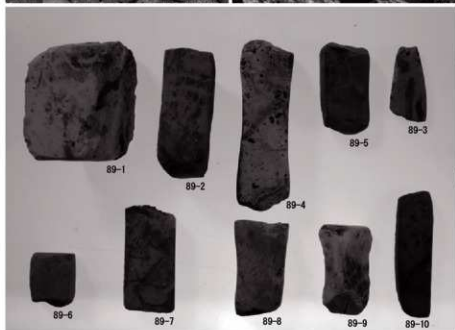
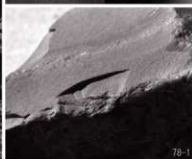








図版第四八 遺物



報告書抄録

ふりがな	たかやなぎ・しもやすだいせき							
書名	高柳・下安田遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	福井県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第112集							
編著者名	赤澤徳明・田中勝之・御嶽貞義							
編集機関	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒910-2152 福井県福井市安波賀町4-10 TEL 0776-41-3644							
発行年月日	2010年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° / ' "	° / ' "			
たかやなぎ 高柳・ しもやすだいせき 下安田遺跡	ふくいけんさかいし 福井県坂井市 まるおからよう 丸岡町 たかやなぎ・しもやすだ 高柳・下安田	18210	13048	37° 07' 51"	136° 15' 30"	20040803 ～ 20050325 20061115 ～ 20061225	4,430㎡ (16年度 3,750㎡) (18年度 680㎡)	国営九頭竜川下流 土地改良事業 (バイブライン敷設地)
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
高柳・下安田 遺跡	集落	弥生時代	竪穴住居9棟・ 掘立柱建物2棟・ 布掘建物2棟・ 土坑・溝など	土器と玉作関連資 料・銅鐸片(3片)・ 発泡土器		玉生産と青銅器の鑄造を行 っていた弥生時代後期の集落。		
要約	<p>旧河道を挟んだ東西の2地区にわかれ、管玉生産を行う弥生時代後期の集落である。中世と考えられる井戸が5基あるが、そのほかの遺構は弥生時代に限定される。東地区の建物がやや先行し、その後、西地区へと移行する。玉生産も東西の両地区で行っているが、東地区が西地区より若干古い。西地区の竪穴住居の1棟は古墳時代初期へ下る可能性のある土器が出土している。玉生産では東地区出土のものに弥生時代中期の技法である施溝分割が確認され、その技法の変化が弥生時代後期にあったことを示す資料として注目される。また竪穴住居の床面からは銅鐸片が出土し、単に破砕されたままではなく、利器として利用した痕跡を残す。さらに発泡土器片も多数出土し、鑄造がこの集落で行われていたことを示し、銅鐸片も鑄造するための素材であったことが想定される。調査区の北と東は地山が低くなり、遺構も北と東に大きく広がる可能性は少ないことから、調査したの は集落の北東の縁辺部であったことは判明し、さらに西と南に広がるものと考えられる。</p>							

福井県埋蔵文化財調査報告 第112集

高柳・下安田遺跡

—国営九頭竜川下流土地改良事業に伴う調査—

平成22年3月15日印刷

平成22年3月31日発行

発行：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

〒910-2152 福井市安波賀町4-10

印刷：白崎印刷株式会社

〒910-0843 福井市西開発3-715
